

**大宜味村文化財基礎調査及び歴史文化基本方針策定事業
報告書**

平成 22 年 3 月

大宜味村教育委員会

大宜味村文化財基礎調査及び歴史文化基本方針策定事業

目 次

第1部 大宜味村歴史文化基本方針

1. 大宜味村歴史文化基本方針づくりにあたって	
(1) 歴史文化基本方針の目的と役割	1
(2) 歴史文化基本方針検討委員会	2
2. 大宜味村の歴史文化の特性	
(1) 大宜味村の歴史変遷	3
(2) 大宜味村の歴史文化特性	10
(3) 地区別の歴史文化の概観	19
3. 大宜味村の歴史文化基本方針	
(1) 村の歴史文化における課題	47
(2) 大宜味村歴史文化基本方針——文化財を結ぶテーマと方向性	48
(3) 今後の歴史文化むらづくりの展望	51
付記. 根謝銘グスク保存・活用の提言	
(1) 根謝銘グスクの特徴	57
(2) 保存・活用への提言	64

第2部 大宜味村の文化財カルテ

1. 文化財基礎調査の目的と方法	1
2. 大宜味村の文化財カルテ	8

第1部

大宜味村歴史文化基本方針



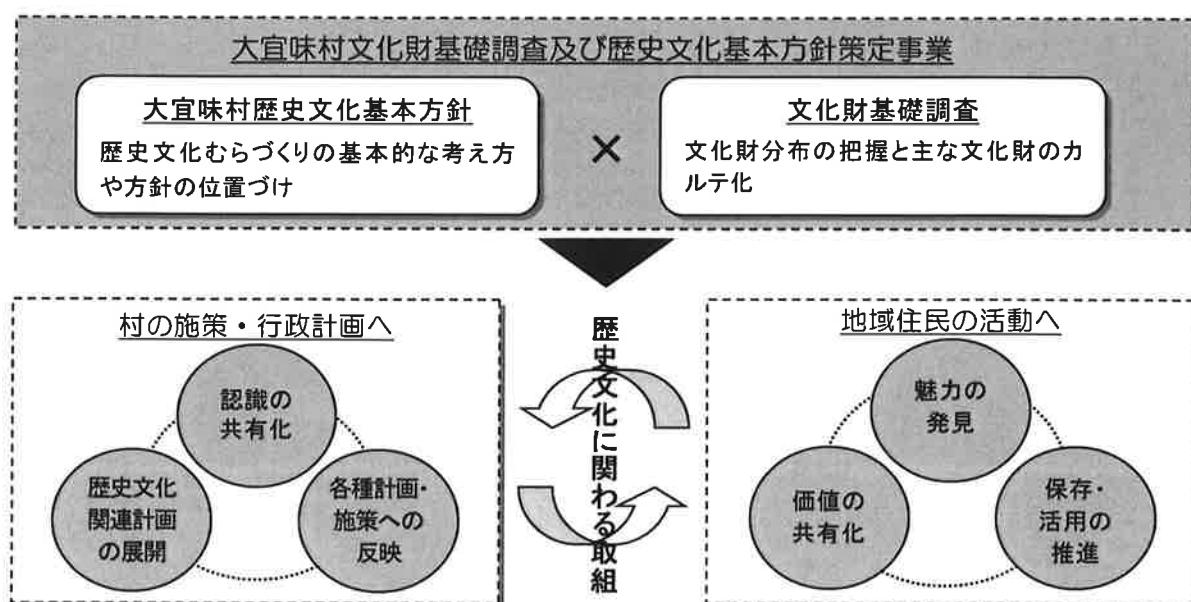
1. 大宜味村歴史文化基本方針づくりにあたって

(1) 歴史文化基本方針の目的と役割

大宜味村は、山原の豊かな自然や静かで美しい集落に囲まれた県下有数の農業地域である。自然や風土に囲まれながら、地域の人々は先祖を敬い、祭祀や生産を営みながら様々な文化をつちかってきた。例えば「長寿の里」に象徴されるように、生涯現役を自負する高齢者が多く、芭蕉布をはじめとする伝統技術や習慣が受け継がれている。しかし一方で、面積の約8割が森林であるため、生活や生産活動は大変厳しく、出稼ぎのため村外へ移り住んだ人々も多かった。こうした村出身の人々が本村を支えてきた側面もあり、例えばウンガミ等の祭祀行事には村出身者も出身字に戻り、字組織の構成メンバーの一員として、伝統の継承やコミュニティの形成に寄与している。

こうした背景をみると、本村の文化財は、地域の自然や風土、人々の生活や活動と深く関わりながら形成されてきたことがわかる。これまで一部の指定文化財だけが高い評価を受けて保護され、その周辺の資源については身近な価値に気づかれないまま失われていくこともあったが、これからは地域に眠る文化財を掘り起こし、一人ひとりが文化財の持つ意味を理解しながら、身近なものとしてとらえていく必要がある。そのためには、村民および村出身者といった大宜味村を支える人々で、文化財を知り、それらを活用しながら、新しいむらづくりに取り組んでいくことが大事である。

大宜味村歴史文化基本方針は、本村の歴史文化の特性をわかりやすく整理しながら、歴史文化を活かしたむらづくりの基本的な考え方を定めたものである。本村の歴史文化の基本的な認識として、また文化財をめぐる保全・活用の方針として、今後の行政計画に活用されることを目指している。さらに、歴史文化むらづくりを行うためには、行政だけでなく、地域の人々による地域の魅力の発見や価値の共有化が重要であり、地域や行政がこれから実践できる取組みを最後に例示している。本村において歴史文化に関わる様々な取組みが積極的に展開されることを期待する。



(2) 歴史文化基本方針検討委員会

本事業を進めるにあたって、文化財基礎調査の方法や整理の仕方、大宜味村の歴史文化特性の検討、また歴史文化基本方針の策定等の作業課題について有益な助言・指導等を得るために、有識者や行政担当者（庁内関連課を含む）、その他関係者からなる検討委員会を組織した。

歴史文化基本方針検討委員会名簿

検討委員（五十音順）

委員長	中村 誠司	名桜大学国際学群国際学類教授
委員	池田 榮史	琉球大学法文学部人間科学科教授
委員	新里 幸昭	名桜大学国際学群国際学類教授
委員	仲原 弘哲	今帰仁村歴史文化センター館長

大宜味村

1	米須 邦雄	大宜味村教育委員会 参事
2	藤田 元也	大宜味村教育委員会 主事
3	島袋 一道	大宜味村企画観光課 課長（オブザーバー委員）

事務局（コンサルタント）

1	西村 秀三	(株)国建 地域計画部 次長
2	大城 涼子	(株)国建 地域計画部 主任
3	伊波 なぎさ	(株)国建 地域計画部 研究員

2. 大宜味村の歴史文化の特性

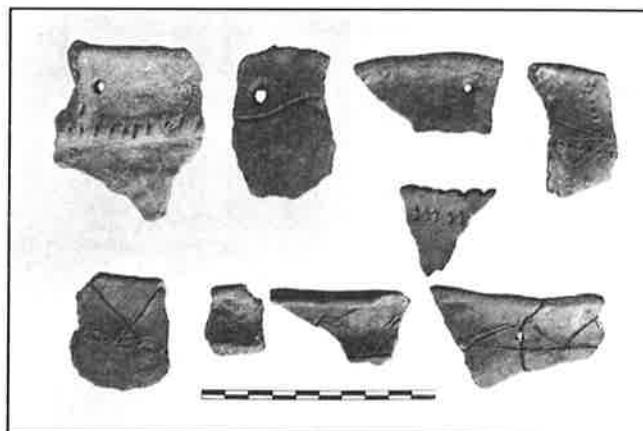
(1) 大宜味村の歴史変遷

1) 先史時代

沖縄に初めて人類が住むようになったのは旧石器時代とされ、山下洞人（約3万4千年前、那覇市）、ゴヘス洞人（約2万年前、伊江村）、港川人（約1万8千年前、八重瀬町）の化石人骨が確認されている。その後の新石器時代は、沖縄では一般に沖縄貝塚時代と呼ばれ、約7千年前の土器や磨製石器が出土している。

大宜味村における沖縄貝塚時代の遺跡は、喜如嘉貝塚、イラブチバンタ遺跡、大兼久遺跡、津波遺物散布地、安根遺物散布地、大宜味遺物散布地が確認されているが、いずれも沖縄貝塚時代の後半に位置づけられる遺跡である。そのうち喜如嘉貝塚は、約1200～1300年前の沖縄貝塚時代後期の特徴を持つ遺跡で、土器や貝製品が大量に出土しているが、石器は1件も出土せず、それに代わる木器等があったと考えられている。

北部地域では本村をはじめ旧羽地村、旧名護町、旧屋部村からは先史時代の遺跡の発見はまだ少ないが、国頭村や今帰仁村、本部町には遺跡が多く分布している。山が海に迫り、原生林が海岸近くまで繁茂していた大宜味の地は、古代の人々の生活環境としては厳しかったと考えられる。



喜如嘉貝塚から出土した有孔及び曲線文土器

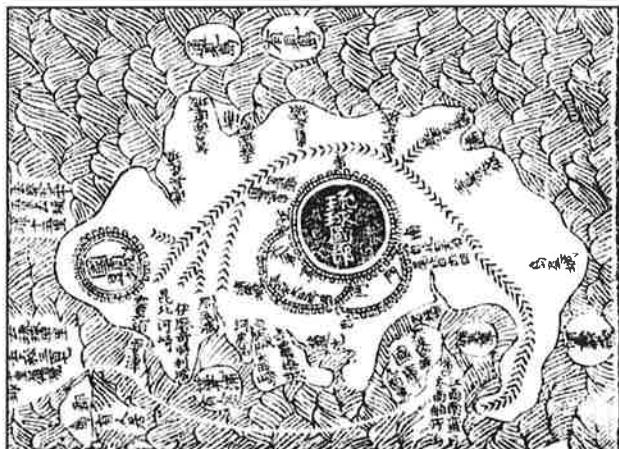
2) グスク時代

グスク時代になると、海岸近くに居住し、イノーや野山での採集生活をしていた沖縄貝塚時代の人々は、鉄器を入手して稻作や畑作の農耕生活を始めるようになり、次第に高地に「マキヨ」という共同体（集落）を形成する。共同体は血縁・地縁的な農業小集団であり、農耕の維持や管理、作物の豊穣が最も重要だった。集団を統率する指導者は、生産の管理や分配、祭祀を主催しながら共同体の首長（按司）として成長し、集落や聖域（御嶽）を取り込みながらグスクを構えるようになった。

山原地域には根謝銘グスクの他に、親川グスク、名護グスク、金武グスク、今帰仁グスクといった中核的なグスクがあり、その他に小規模グスクがあった。この5つの中核グスクの按司たちの支配から、次第に今帰仁グスクを中心とした北山地域に集約されたと考えられている。13世紀末頃になると、沖縄本島は北山（山北）、中山、南山（山南）の3つの小国家（三山）にまとまり、北山は今帰仁グスクを拠点に山原全域を支配した。

根謝銘グスクは、国頭地域を拠点としたグスクで、『海東諸国紀』（1471年）の「琉球国之図」にある「国頭城」とは、根謝銘グスクではないかと考えられている。グスクは断崖と急斜面による天然要害の地に立地し、所々に野面積みの石垣がみられる。グスク内部の最も高

い位置には大城御嶽、一段下がった平坦部には神アサギと中城御嶽がある。村内には、根謝銘グスクの他に、喜如嘉グスク、津波グスク、ガタ山（石グスク）の3ヶ所のグスクがあるが、ここからはグスク時代の遺物は確認されていない。他には根路銘遺跡やイームイ遺物散布地などの同時代遺跡から土器や陶磁器が確認されている。



『海東諸国紀』の「琉球国之図」(部分)

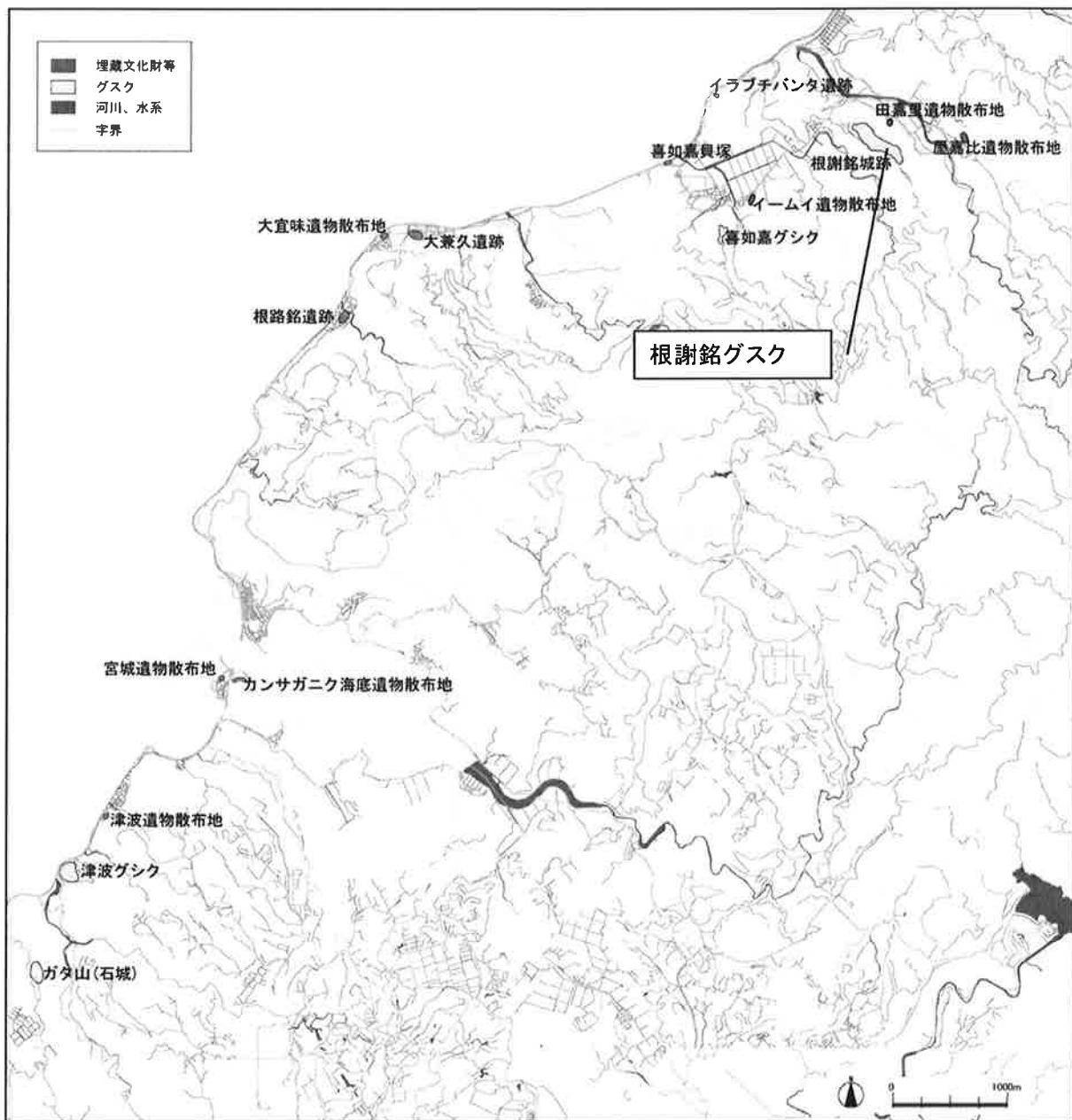


図 貝塚・グスク時代の資源の分布

3) 琉球王国時代

①古琉球

三山時代の後、琉球を統一したのは佐敷グスクの按司だった尚巴志である。尚巴志は 1406 年に中山、続いて 1416 年（一説に 1422 年）に北山、1429 年に南山を滅ぼし三山を統一した。これにより初の統一王国として琉球王国が誕生した。北山攻略のときには、国頭地域を支配した国頭按司は、中山軍に加わり今帰仁グスクの攀安知を攻めたといわれる。

尚巴志の三山統一以降、北山地域は今帰仁グスクに派遣された北山監守によって統治されるが、国頭地域は、根謝銘グスクを中心に国頭按司の支配が続いていると考えられる。

1469 年、首里城でのクーデターによって第一尚氏が滅び、尚円王を初代とする第二尚氏王統がはじまる。第 3 代尚真王の時代には、地方領主の首里集住、身分制度や神女組織の確立など、王国の中央集権体制が強化され、首里・那覇を除く地域では間切・シマ制度（後の間切・ムラ制度）といわれる地方行政制度が成立する。「シマ」とは、グスク時代に成立した共同体をひとつまたは複数に束ねた行政単位のことと、近世期には村（ムラ）となり、現在の「字」に相当する。王国時代の地域社会は、このシマを単位に、貢納を目的とした農業生産や祭祀が営まれた。

この間切制度によって、かつての山北地域は、5 つのグスクの領域で国頭、羽地、名護、今帰仁、金武の 5 つの間切となった。また、国頭按司も首里へ移り住むことになった。



図 5 つのグスクと古琉球期の間切区分

②近世琉球

大宜味が間切として設置されたのは 17 世紀に入ってからである。それ以前は羽地間切と国頭間切の領域だった。1673 年、羽地間切から平南村と津波村の 2 村、国頭間切から 11 村を分け、合計 13 村により田港間切が創設されたのがはじまりである。その後、1682 年に田港間切から大宜味間切に改称され、1695 年には国頭間切から川田村、平良村の 2 村を分割編入すると同時に、親田村、見里村、一名代村、大宜味村の 4 村が新設され、屋古村、前田村が合併して合計 18 村の範囲となった。さらに 1719 年には川田村、平良村の 2 村が久志間切に編入されたことにより、大宜味間切の範囲ができあがった※1。

※1：1695 年、屋嘉比、親田、見里（現在の田嘉里）は、一時大宜味間切から国頭間切所属となつたが、1719 年に再び大宜味間切の所属となつた。

間切を所有する地頭には、按司地頭と総地頭（親方地頭）があり、これを総称して両総地頭と呼ばれる。大宜味間切は大宜味御殿と大宜見殿内がそれぞれ両総地頭家を世襲した。間切行政の中心地である間切番所は、当初田港村に置かれたが、1682年には大宜味村（ムラ）に移された。さらに移転時期は不明だが、1760年には塩屋村に移転していたことが確認できる。

大宜味間切が成立した18世紀頃には、集落基盤も整い、御嶽や村立ての屋敷が拝所として年中行事が行われるようになり、グスク時代の居城であった根謝銘グスクも信仰の対象として、年中行事に拝まれるようになった。

『琉球国由来記』（1713年）によると、親田村、屋嘉比村、見里村は屋嘉比ノロ、城村、喜如嘉村、大宜味村は城ノロ、田港村、屋古前田村、塩屋村、根路銘村は田港ノロ、津波村は津波ノロが行事を管轄し、ひとりのノロが複数の村を管轄していた。

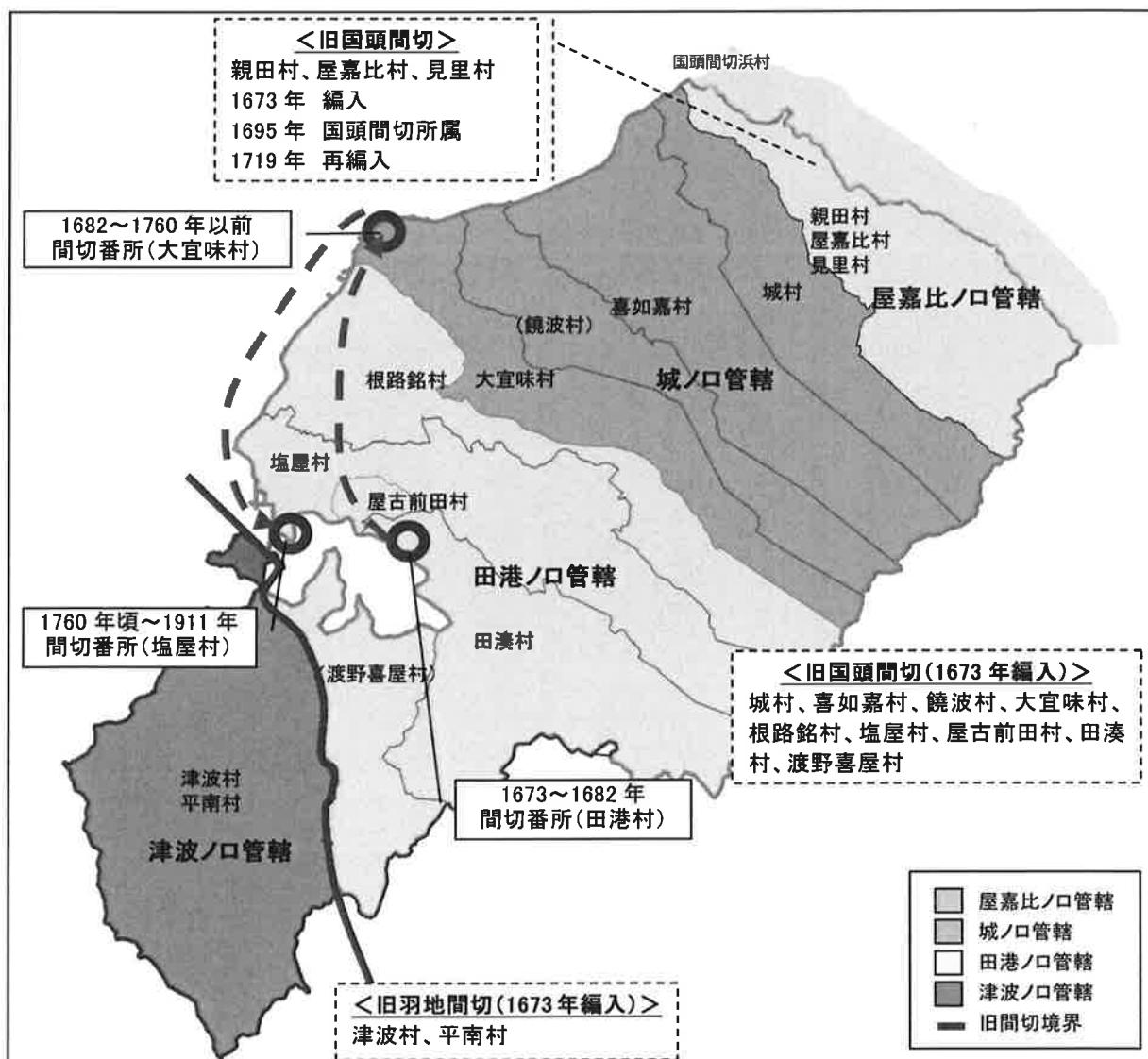


図 近世期の村区分と間切番所の移動(村名は『琉球国由来記』をもとに一部追加)

注: 饒波村、渡野喜村は『琉球国由来記』には記載がないが、それぞれ城ノロ、田港ノロ管轄。

18世紀の蔡温の時代になると、首里王府によって、農政や山林政策が徹底されるようになり、建築材や造船材等を目的とする造林地や抱護林の造成、管理が行われた。現在の大宜味村の山頂や山道に沿う松並木が連なっていたのは、この時代に造成されたからである。農業については、羽地、久志、名護、恩納などの北部の諸間切とともにサトウキビの作付けが禁止され、代わりにウコンの生産が義務づけられた。

1853年に琉球に訪れたペリー提督率いるアメリカ艦隊プリマス号は、山原の港湾の測量を行うため塩屋湾を訪れており、湾一帯の地質調査などが行われた。『ペリー提督日本遠征記』には“SHAH BAY”（シャーベイ）と紹介されている。

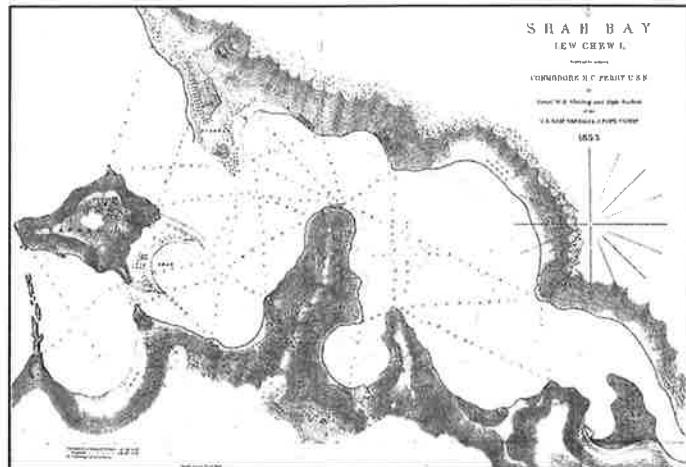
4) 近現代

琉球王国は 1879（明治 12）年の廃藩置県により沖縄県となったが、その後しばらくは、王国時代の行政制度が踏襲された。廃藩置県直後の大宜味間切については、第二代沖縄県令の上杉茂憲による巡回日誌に、道がけわしく交通が不便であること、大宜味間切番所や塩屋湾の様子、各村の人々の様子などが記されている。

1908（明治 41）年、沖縄県及び島嶼町村制の施行により、従来の間切は村（ソン）に、村（ムラ）は字に改称され、大宜味間切も大宜味村となった。塩屋にあった間切番所は村役場となったが、1911（明治 44）年に大宜味に移された。1925（大正 14）年には、本格的な鉄筋コンクリート造の建築物として、現在県指定文化財となっている旧大宜味村役場庁舎が竣工した。

明治以降から戦前昭和期には、士族が移住して形成された屋取集落や藍製造などで新たに開拓された集落が分離・独立して新しい字となった。戦後には字津波の丘陵地に開拓移住地として出発した江洲も 1962（昭和 37）年には単独の字となり、大宜味村は現在の 17 字となつた。

生業では、1888（明治 21）年よりサトウキビの作付けが許可され、黒糖の製造も行われた。また、藍の需要が増加するとその作付けによって山間の開拓が進んだ。しかし収入を得る方法は限られていたため、明治末期から大正にかけて、出稼ぎによる人口の流出が顕著になつた。1945（昭和 20）年の沖縄戦後には、中南部からの避難民や外地からの引きあげ者



「塩屋湾の図」(『ペリー提督日本遠征記』所収)



神門(ハーミンゾー)から塩屋湾への眺め

により、村人口は9千人を超すほど一時増加したが、琉球政府の前進である沖縄諮詢会による戦後復興対策として八重山開拓移民が計画され、これに応じて大宜味村からも多くの人々が八重山へ移民した。また、戦後復興の中で、当時は「大宜味大工」の名で有名だった本村の大工職人が多数中南部へ職を求め流出したこと、本村の人口は減少に転じた。1870（昭和45）年の人口は4535人で、1980（昭和55）年以降は3千人台で推移し、現在は3371人（平成17年度国勢調査）となっている。

1950年代後半からは本村の農業にも変化が現れ、米、サツマイモ主体からサトウキビ、パインアップル、ミカン、イグサなどが栽培されるようになった。

1974年には喜如嘉の芭蕉布、1997年には塩屋湾のウンガミが国の重要文化財に指定された。

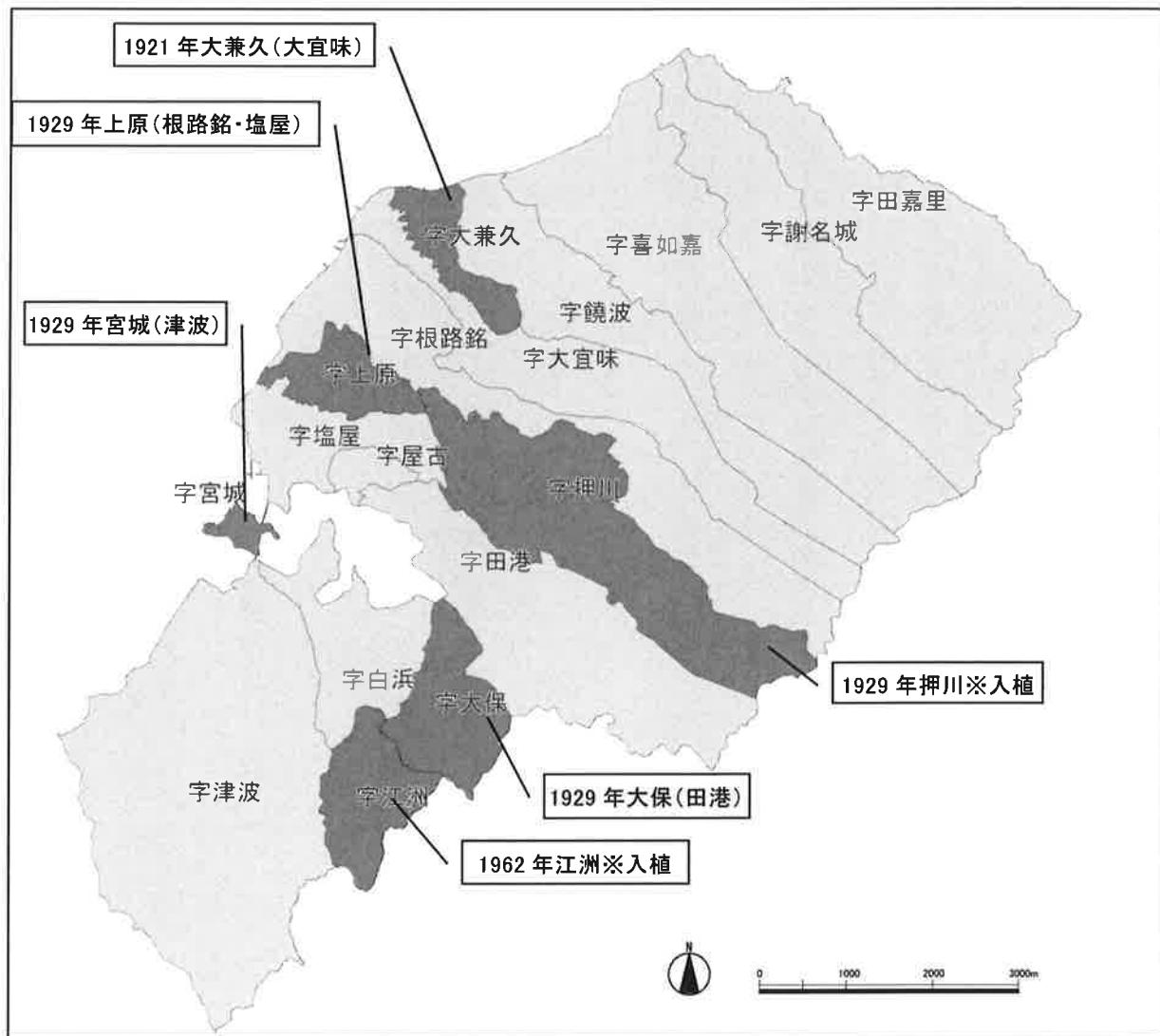


図 明治以降の新設集落の状況（後のカッコは分離前の字名を示す）

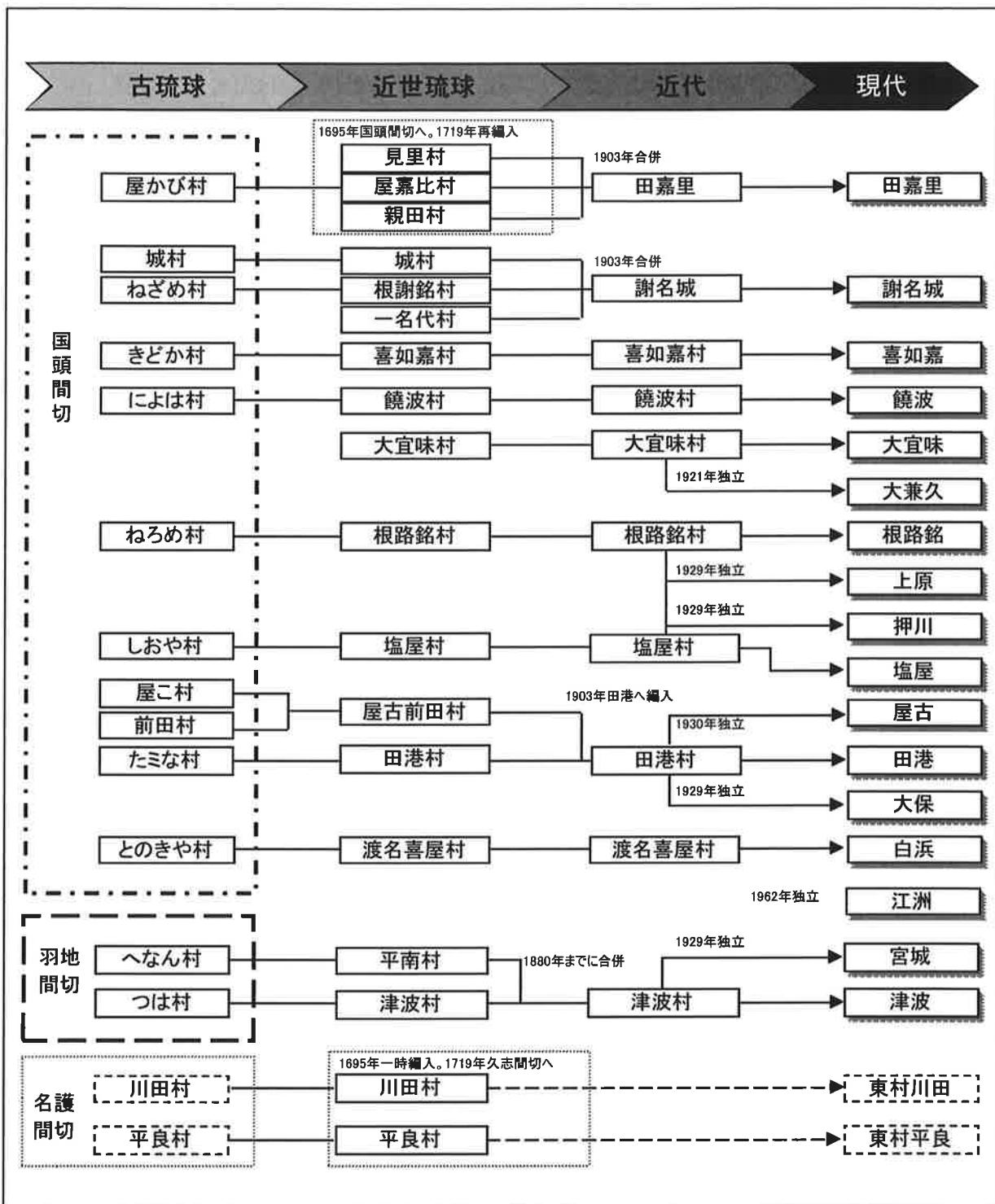


図 大宜味の村(ムラ)から字の変遷 (新設字の独立年は行政区となつた年を示す)

(2) 大宜味村の歴史文化特性

大宜味村全体の歴史文化の特性は次のように要約できる。

①自然と共生して育まれた個性的なムラ・シマ（字）

大宜味村では、山林、川、海といった自然環境の中で、御嶽や神アサギ、カ一（湧水）、フクギの屋敷林などが集落内に分布するなど、沖縄・山原の伝統的集落景観が残されている。こうした歴史文化資源は、ムラ・シマと呼ばれた字を単位に、人々の生活や祭祀、生業等の影響を受けて形成されている。ムラ・シマ（字）には「ブナガヤ伝承」をはじめ、多くの伝承が語られ継承されている。また、字や郷友会では字誌や記念誌を多数発行しており、ムラ・シマ（字）を単位とする歴史文化への関心の高さや誇りを確認できる。

②沖縄最北の拠点としての根謝銘グスク（上グスク）

根謝銘グスクは沖縄本島最北に位置し、国頭按司の居城とされるグスクであり、グスク時代は、根謝銘グスクが国頭地域（国頭と大宜味）の拠点だったと考えられる。また、グスク内の御嶽は、隣接する謝名城や田嘉里の集落と深い関わりを持っており、グスクの成立と集落の関係を読み解く重要な場所としてとらえられている。つまり、根謝銘グスクは、国頭の拠点であると同時に、山原の歴史や文化を読み解く重要なキーポイントとなるグスクである。

③伝統祭祀（ウンガミ）や拝所にみえる地域同士のつながり

大宜味村のムラ・シマ（字）は、大宜味間切設立時の分割・統合をはじめ、間切番所の移動、集落間の合併や新設など、複雑な過程を経て形成してきた。ムラ・シマ（字）同士のつながりは、ノロの管轄範囲やウンガミなどの伝統祭祀、御嶽や神アサギの分布、まつりや学校区を核とする地域意識などから確認することができる。現在においては、住民だけでなく村外へ移住した出身者も伝統祭祀や芸能へ参加しており、人々と歴史文化資源、ムラ・シマ（字）の間を結びつけている。

④自然の実りから営まれた生産技術（芭蕉布、大宜味大工、猪垣）

大宜味の人々は厳しい自然を糧に生業を営んできた。こうした生産物は、首里王府への貢納品という役割から、時代を超えて大宜味村を支える生産技術として発達したものもある。「大宜味大工」として称えられた職人たちも大宜味の技術を代表するものととらえられる。猪垣は野生の猪から農作物を守るために何世代にも継続して築かれた生産遺産である。芭蕉布はかつて琉球王国全城で生産された織物である。近代に衰退しかけたものを、喜如嘉で復興させた沖縄の誇る伝統工芸として意義づけられる。

1) ムラ・シマ（字）を支える自然環境

大宜味村の地形は沖縄本島北部の背骨となる国頭山地、山地まわりの丘陵、低地の3つに分けられる。山林が全面積の70%余りにも及ぶ。ここではムラ・シマ（字）における自然環境の特徴を整理する（各字の概況は次節で整理）。

- 集落の多くは西海岸沿いに発達し、各字は海岸線から山地の骨格まで細長い短冊型に区切られている。集落を守るため背後にはリュウキュウマツの抱護林、集落内部にはフクギの屋敷林が植えられている。
- 村内には10余りの河川があり、所々に滝が形成されている。川の近くには水田地帯も形成された。田嘉里川、外掘田川のタープックワ（田圃）はその代表的なものだった。
- 山地地形が険しいため、塩屋などを除き東西の交通路は細い山道しかなかった。海岸を通る南北の交通はさらに困難で、日常の往来は船にたよるしかなかった。琉球王国末期から戦前昭和にいたるまで、山原船が海上交通の主役だったが、その山原船が停泊した場所は津や津口などと呼ばれ、塩屋湾や根路銘の船溜まり、屋嘉比港などが主な停泊地だった。また、田嘉里、喜如嘉、田港は、当時は奥まったところまで入江があった。
- 王国時代には、番所のあった塩屋湾が中心となり、船は各村の前に船をつけて荷物の積みおろしをした。また、大宜味には地船（村船）があり、1884（明治17）年の「津口手形」には、渡野喜屋村地船、大宜味船、根路銘村地船などが記されている。薪や木材、樟腦、藍など那霸や泊に運んでいた。
- 大宜味村は「ブナガヤの里」と呼ばれるほど、ブナガヤをはじめとする妖怪の伝承や目撃談が、村内各地で伝承されており、自然と人々の生活とがより密接な関係にあったことがうかがえる。喜如嘉、謝名城では旧8月のブナガヤの季節になると、巨木や山の中腹などに小屋を建てブナガヤの出現を待つ「アラミ」という風習があり、戦前まで行われていた。田嘉里にはブナガヤが建てたといわれる「六又屋」があり、その後ろにはブナガヤを祀る神屋がある。

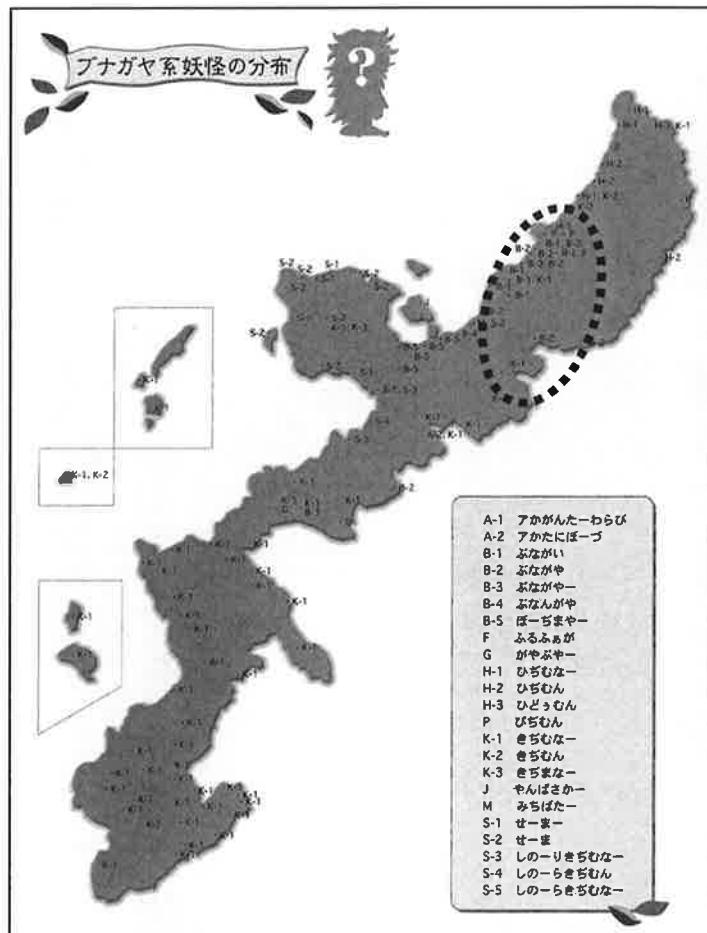


図 ブナガヤ系妖怪の分布

出典：新里幸昭「沖縄の妖怪」『沖縄文化研究』1999年
(『ぶながやの里』より転載)

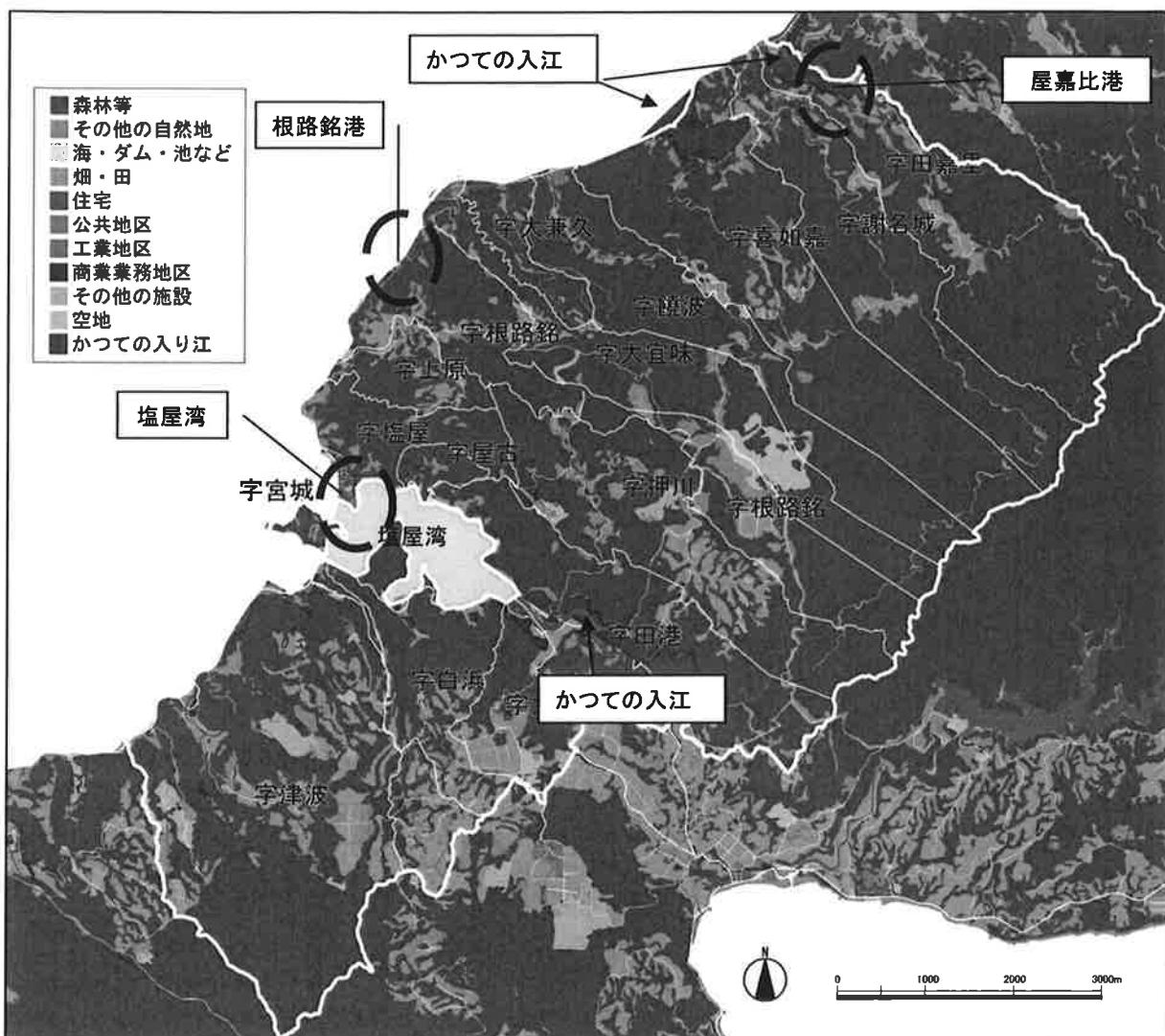


図 大宜味村の土地利用と港（海拔 5 メートル以下を青で着色し、往時の入江を表現）

2) 根謝銘グスクの特徴

根謝銘グスクは14世紀から15世紀に機能した城塞的なグスクで、地元では「ウイグシク」と呼んでいる。城集落背後の標高約100メートルの舌状丘陵端に形成され、丘陵頂上部に古世期石灰岩の割石で石塁を巡らし、尾根筋は人工の掘切で切断している。

根謝銘グスクの調査は始まったばかりで、考古学と歴史学の両面からの研究が必要だが、現時点で下記の2点に整理でき、山原のグスク文化や集落との関係を読み解く重要なグスクとして位置づけられる。

①国頭地方の拠点としてのグスク

- ・『海東諸国紀』に載る「琉球国之図」には、ひときわ大きな円形の城塞マークの中に「国頭城」と記載されており、これが根謝銘グスクではないかと考えられている。根謝銘グスクは国頭地域の要となつたグスクととらえられ、16世紀前半の首里への按司集居までは、国頭地域の拠点だったと考えられる。
- ・『おもろさうし』には、屋嘉比港が貿易港として栄えた時代をたたえたオモロが残されている。屋嘉比川の河口にあたる屋嘉比港は、根謝銘グスクの直近に位置し、グスクと対になる港としての役割を持っていたと考えられる。
- ・屋嘉比川の河口にあたる国頭村浜は、1673年の田港間切創設時に、国頭間切番所が設置された地である。それ以前の間切番所の位置は不明だが、根謝銘グスク周辺にあった番所が、田港（大宜味）間切の新設によって移動されたのではないかという説もある^{*2}。



根謝銘グスク

②御嶽と集落との関係

- ・根謝銘グスクに隣接する謝名城と田嘉里は、それぞれ城、根謝銘、一名代、屋嘉比、親田、見里の村（ムラ）が、1903年に合併してできた行政区である。グスク内部にある中城御嶽、大城御嶽は、それぞれ謝名城、田嘉里の御嶽であり、この両御嶽に寄り添うように、6つの村（ムラ）が形成されていったと考えられる。
- ・グスク内には地頭火の神、ウドゥンニーズ・トゥンチニーズなどの拝所があるが、これらは首里に住む総地頭との関係で設置されたものである。グスクには、集落レベルの拝所と総地頭などの支配者層の拝所が混在して存在している。
- ・城（グスク）のウンガミには、城ノロが管轄する謝名城、喜如嘉、饒波、大宜味、大兼久が参加する。屋嘉比ノロが管轄する田嘉里は、城のウンガミには参加せず、大城御嶽を拝むだけで、それぞれの管轄は継承されている。

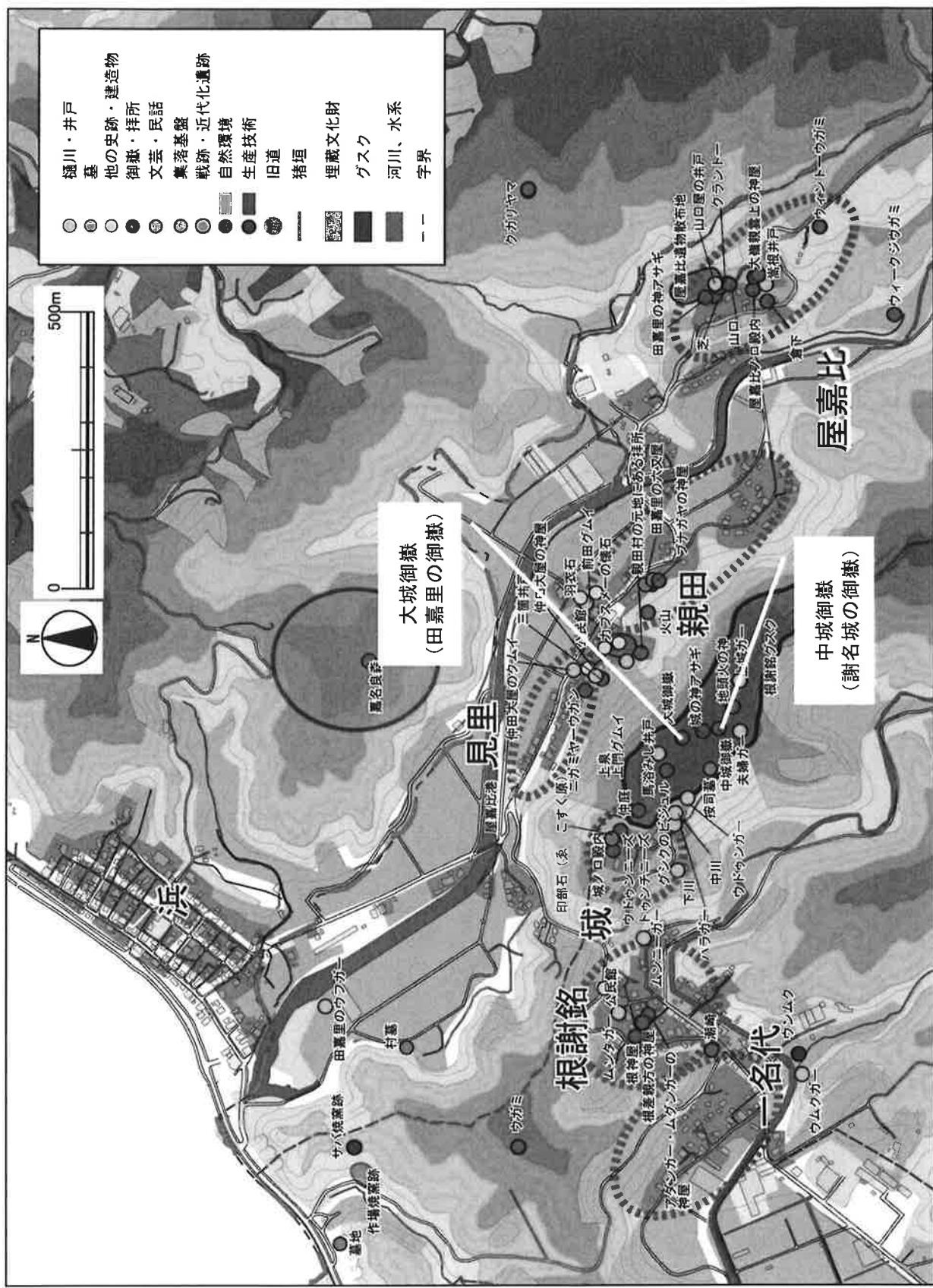


図 根謝銘グスクと関係する村(ムラ)

3) ウンガミに代表される祭祀行事の諸相

大宜味村のムラ・シマ（字）は、国頭・羽地間切から分離・独立した経緯をはじめ、古琉球期に形成された集落、近世期に合併や移動した集落、屋取集落や開拓集落として独立した集落等、様々な形成過程を経て今日にきている。こうしたムラ・シマ（字）の歴史的背景は、祭祀行事や拝所の形態に、地域の個性として反映されている。

- 大宜味村の祭祀行事は、屋嘉比、城、田港、津波の4人のノロ管轄村落で大きく区分できる。そのうち、屋嘉比ノロは国頭村浜も管轄領域とし、国頭間切時代の地域区分を今に伝えている。
- 地域の祭祀行事は基本的には根神が主宰しており、ノロの行事は主にウンガミ行事に代表される。特に、塩屋湾のウンガミや城のウンガミは、古くからの祭祀の形態を継承している。
- 塩屋湾のウンガミは、田港ノロが管轄し、塩屋、屋古、田港、白浜にて一体的に開催される行事である。現在は新設された大保、押川、江洲も行事に参加している。かつては根路銘も田港ノロの管轄地域として参加していたが、1911（明治44）年より上原と単独で開催している。
- 城のウンガミは、謝名城、喜如嘉、饒波、大宜味といった城ノロの管轄する集落の神人が集まる行事で、根謝銘グスクで山の神・海の神を迎える、喜如嘉の浜で送る行事である。神人の不足などから行事の一部が短縮されるなど形態は変化している。
- 昭和初期の生活改善運動や年中行事の統一の影響で、火の神の合祀や行事の簡略化が行われた地域もある。
- 山原では王国時代から明治頃まで村（ムラ）ごとに神アサギが建てられており、大宜味村でも古い集落を中心で神アサギの分布が確認できる。本来、神アサギは茅葺き屋根の壁のない柱だけの建物だが、大宜味村内の神アサギは建て替えられ、様々な形態をしている。特に津波の神アサギはひとつの建物が内部で分かれ、津波村と平南村の拝所が区別されており、別々の村（ムラ）だった名残をみることができる。
- 五穀豊穣を祈願する豊年祭（豊年踊り）は各字で行われ、多彩な伝統芸能が上演されている。また、本村には臼太鼓の他に、喜如嘉、謝名城、饒波、大兼久、大宜味、根路銘などでエイサー（またはエンサー）が踊られている。これらは県内他の地域にあるエイサーとは異なり、女性だけで踊られる独特なものである。

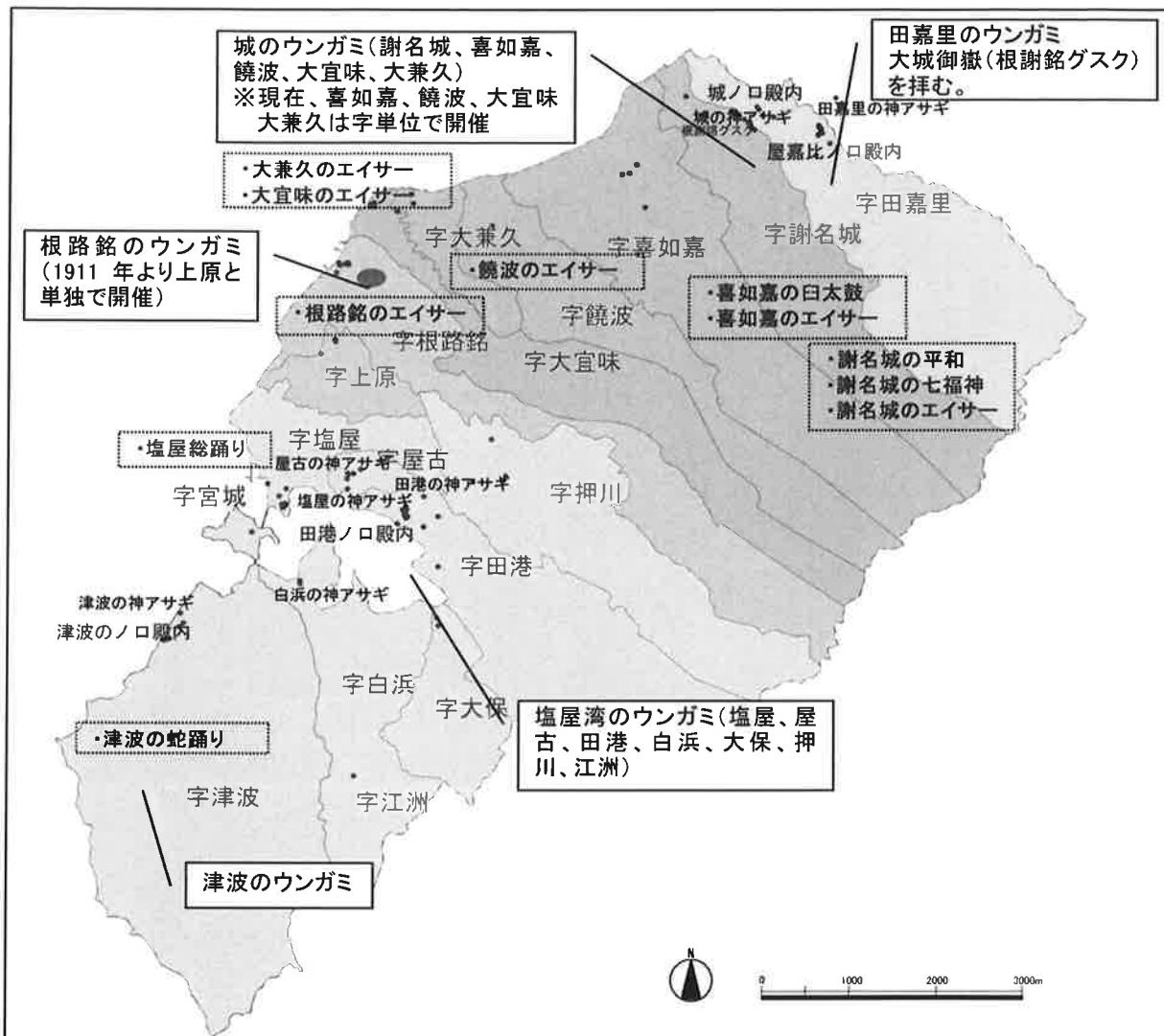


図 ウンガミの開催区域（赤丸は御嶽・拝所の分布を、枠内青字は代表的な伝統芸能を示す）



塩屋湾のウンガミ 屋古の神アサギ



津波の神アサギ

4) 生産技術やその痕跡

山林、川、海といった大宜味村の厳しい自然環境のなかでも、人々は元気にそして慎ましく生産活動を営んでいた。

- 王国時代の生産は農業と林業が中心であり、間切内には広大な杣山があった。集落周辺の畠には、貢租のための稻やウコンが作付けられた。
- 漁業は明治末期頃から大兼久で糸満から技術導入した追い込み漁が盛んになり、戦後しばらくは漁業が営みの中心となっていた。
- 猪垣は、1776年から1782年に工事が行われたという記録が最も古い(『球陽』1787年の条文)。塩屋、屋古前田、田港、渡野喜屋、根路銘の村々が改築にあたったとあるため、猪垣はそれ以前から作られたと考えられている。その後も継続的に増築され、現在大宜味村全域で見出せる。猪は、魚や肉、野菜、薪炭とともに間切から首里の両総地頭への献上の品物でもあり、祭祀でも狩猟の所作がみられる。猪は、農作物を守るために猪垣で排除するとともに、山からの糧でもあったととらえられる。
- 製塩業がいつ頃から始まったか不明だが、塩屋の森川之子祠は、製塩業の祖として祀られている。明治から大正期にかけては、大保や宮城では製塩業が盛んに行われ、「シナマー(塩田跡)」と呼ばれる広い砂地が残っている。
- 1900(明治30)年頃から戦前にかけて、「大宜味大工」と呼ばれた優秀な大工が村を出て沖縄全島にかけて活躍した。戦後においては多くの建設会社を立ち上げており、大宜味村や沖縄県の建設業を牽引する存在ともいえる。
- 耕地の少ない村域には生命力の強い糸芭蕉の生産が適していたこと、「大宜味大工」として男たちがこぞって那覇に進出していったことを背景に、明治以降に女性たちの副業として芭蕉布づくりが見直された。戦後、喜如嘉の平良敏子氏を中心とする人々の手によって再興され、沖縄を代表する伝統工芸(技術)として継承されるようになった。
- 復帰以降、江洲を中心に窯元が増えてきた。大宜味村内で活動する工芸家の作品を一堂に集めて紹介する「いぎみていぐま展」、年1回の村主催の芸術文化展「おおぎみ展」の開催など、多くの村民による新しい芸術文化の取組みが展開されている。
- 「大宜味椿の会」が中心となり、塩屋富士散策道を巡り、猪垣やヤブ椿など歴史と自然に恵まれた森を観察するツアーが行われている。

表 大宜味村の特徴的な生産遺跡

名称	所在地	類型	概要
大宜味村の猪垣	村全域	生産技術	農作物への猪被害を防ぐため畠地と山地の境界に築かれた猪垣。村指定文化財。
イルマタ銅山	大保	生産技術	銅山跡。1916(大正5)年に創業か。
シナマー	大保	生産技術	集落周辺の渦にある砂地が塩田跡。大保は塩業を営むために入植したといわれる。
宮城塩田跡(シナマー)	宮城	生産技術	開始時期は不明だが、昭和の初期までは津波から出向き、1929(昭和4)より宮城区が行った。
大保川上流域の生産遺跡群	根路銘	生産技術	近代沖縄の炭焼窯生業を考える上で重要な資料。



図 自然環境資源と生産技術関連資源の分布



猪垣



平良敏子氏

(3) 地区別の歴史文化の概観

1) 田嘉里（ヤハムティ）

＜田嘉里の歴史文化キーワード＞

国頭文化との結節点/根謝銘グスクとのつながり（屋嘉比ノロ、大城御嶽、屋嘉比港）/山々の伝承（クガリ山、嘉名良森、カブスメー、火山）

田嘉里は、屋嘉比（ヤハビ）、親田（ウェーダ）、見里（スンバル）の3つの集落で構成され、北は国頭村、南東は東村に接し、大宜味村の最北端に位置する。

もともとは国頭間切に所属し、1673年に田港間切に編入されたが、1695年に国頭間切へ再編入され、さらに1719年に大宜味間切となった。屋嘉比村は『絵図郷村帳』（1648年）に記録されており、古琉球時代に形成された古い集落である。親田村、見里村は18世紀初頭までに形成されたとみられる。1903（明治36）年に3村が合併し、各村の名から一字を取って田嘉里となった。

集落は田嘉里川（屋嘉比川）流域に位置する。山地は国頭山地とその西側に開ける海岸段丘丘陵地からなる。『おもうさうし』には、屋嘉比港が港として利用されていた状況が謡われ、かつての河口は現在の河口から1km以上内陸に入った屋嘉比集落付近にあり、根謝銘グスクが利用されていた頃の港はこの地だったと考えられる。後世堆積して陸化し、水田が開かれた。当時、屋嘉比の港には沖縄本島周辺各地や、さらに奄美諸島との交易船が盛んに出入りし、大正期には山原船が停泊し、薪炭や木材を積み出していた。戦前は薪などの林産物が豊かな産地で知られ、終戦後も炭焼きに従事した人もいたが、現在は山の仕事は行われなくなり、サトウキビや果樹栽培が主である。

旧3集落の祭祀は、国頭村浜を含めて屋嘉比ノロが管轄しており、行政的に分断されながらも4集落の祭祀は深いつながりをもって継承してきた。また、根謝銘グスク内の大城御嶽（大グスク）は、屋嘉比ノロが管轄する御嶽として現在でも田嘉里が拝んでいる。そのことから根謝銘グスクと屋嘉比港、さらに屋嘉比、親田、見里の3集落は密接な関わりを持っていたことがわかる。

集落の年中行事の祭場となる神アサギは、屋嘉比集落（屋嘉比バール）の最も高い所にある。そこに隣接して、山口、芝といった旧家が立ち並んでいる。これらの背後には、山口の祖先と喜界島のノロとの伝承のあるクガリ山があり、集落の重要な拝所である。また、ブナガヤが建てたという伝承が残る六又屋（ムチマタヤー）とその神屋、力持ちのプスメーという人物に由来する巨石も現存している。



クガリ山

田嘉里の主な資源

名称	分類	概要
大城御嶽(ウフグシク)	御嶽・拝所	上城の根謝銘グスク内に所在する。田嘉里が拝む。
田嘉里の神アサギ	御嶽・拝所	田嘉里の神アサギ。神アサギ後方はクガリ山に通じている。
屋嘉比ノロ殿内	御嶽・拝所	田嘉里(親田、屋嘉比、見里)を管轄した屋嘉比ノロの屋敷と神屋。神屋には、ノロの衣裳や装飾品が保管されている。
クガリヤマ	御嶽・拝所	旧家である山口の主と、喜界島の女の伝承がある。
ブナガヤの神屋	御嶽・拝所	六又屋の後ろにある、ブナガヤを祀る神屋。ブナガヤが家を建てた伝承に由来する。
倉下(クラサ)	御嶽・拝所	ウスデークの時に最初と最後に巡る場所である。
芝(シバ)	御嶽・拝所	旧家。
山口(ヤマグチ)	御嶽・拝所	旧家。クガリヤマの伝説がある。山口屋の横に神屋があり、中には山口屋の先祖を祀っている。
大嶺親雲上の神屋	御嶽・拝所	大嶺親雲上は屋嘉比村の川から水をひき、琉球国王からその功績を認められ褒美をいただいた人物。
力(ちから)プスメーの懐石	他の史跡・建造物	昔、力(ちから)プスメーという力持ちがいた。彼は大きな石を懐に入れて持ち歩いていたという。そのカプスメーが山の上から投げたといわれる石。
嘉名良森(ハナーラムイ)	自然環境	昔は沖縄の山の中でもとても高い山で、頂上に登って杵とヘラをつないで立てたら天につくほどだったが、山崩れがおこり現在のように低くなったという伝承が残る。
火山(ピーザン)	自然環境	田嘉里共同売店の後方。この火山があるため、昔は火事が多かったといわれる。風水上、火山は尖った形の岩をさす。

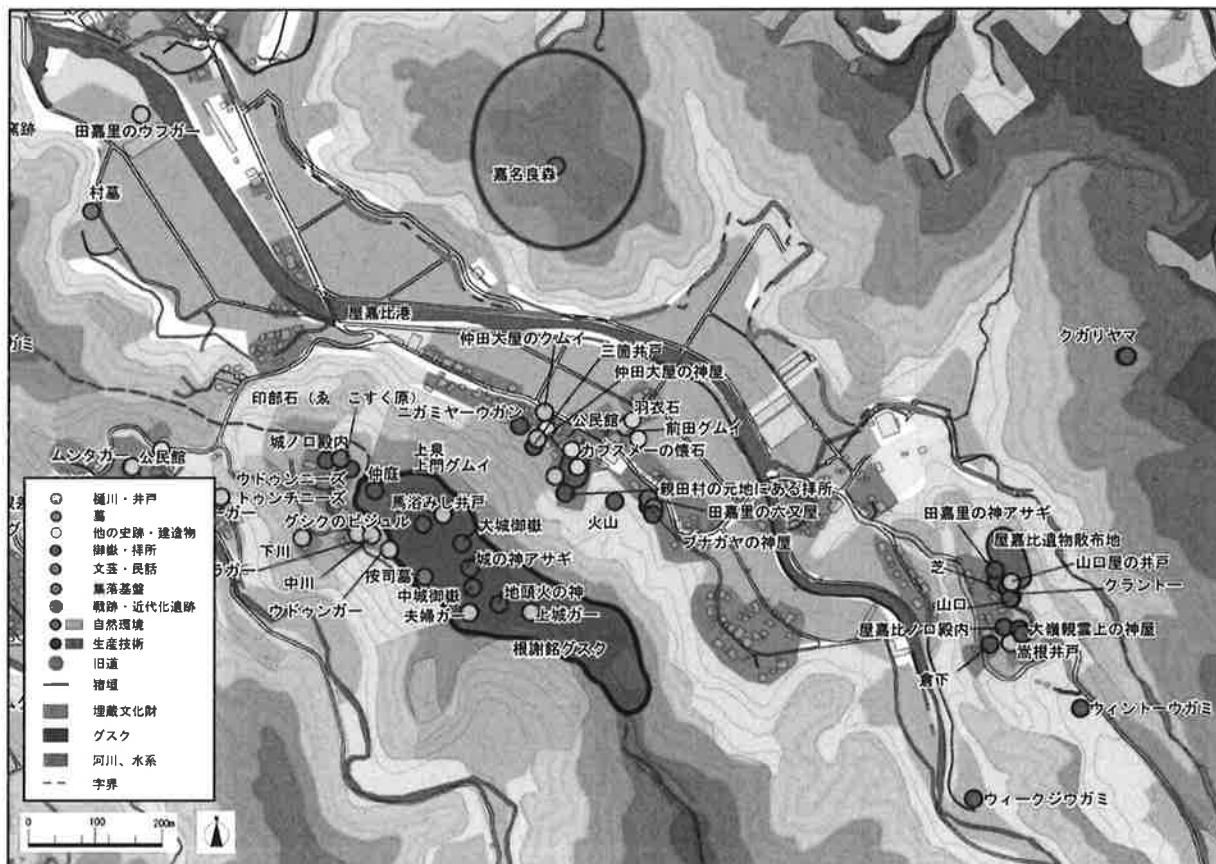


図 田嘉里の地域資源

2) 謝名城（インジャミ）

＜謝名城の歴史文化キーワード＞

根謝銘グスクと集落/城のウンガミ/謝名城の豊年祭/根差部親方

謝名城は、一名代（ティンナス）、根謝銘（ニジャミ）、城（グシク）の3つの集落で構成され、大川（謝名城川）流域の海岸段丘陵に位置する。

もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。城村、根謝銘村は『絵図郷村帳』（1648年）に記録されており、その後、一名代村が段階的に形成されたと考えられる。1903（明治36）年に3村が合併し、各村の名から一字をとって謝名城とした。グスクをクサティ（腰当）に、3つの集落が展開した過程がわかる特徴的な集落である。

大川周辺の土地は肥沃で、1965（昭和40）年頃までは水田があり、以後サトウキビ畑となっている。現在でも「ティンナスダー（一名代田）」「ウムダー（宇茂田）」という地名が残っている。集落周辺の段畑にはシークワサーが植えられている。

謝名城の旧3村は、喜如嘉、饒波、大宜味とともに城ノロの管轄である。根謝銘グスクや周辺には城ノロが管轄する中城御嶽や神アサギ、地頭火の神、城ノロ殿内などが分布している。ウンガミでは、謝名城、喜如嘉、饒波、大宜味、大兼久の神人が参加し、根謝銘グスクに登り、山の神、海の神を迎え豊作を祈願する行事だが、近年は簡素化されつつある。

謝名城の豊年踊り（祭）は、隔年で開催される行事で大宜味村の中でも古くからの形を残しているものある。1924年に玉城金三氏の指導で古典芸能をふんだんに取り入れ、「謝名城の平和」「謝名城の七福神」等、当区でしか見られない演目も上演されている。

さらに、首里から謝名城へ都落ちして神事を伝えたとされる根差部親方を祀る神屋が残されている。

謝名城の主な資源

名称	分類	概要
根謝銘グスク	グスク	上城とも、また単にグスクとも呼ばれる。国頭按司の居城といわれる。田嘉里・謝名城の拝所である「大城御嶽（ウフグシク）」「中城御嶽（ナカグシク）」がある。
中城御嶽	御嶽・拝所	根謝銘グスクにある御嶽。謝名城の御嶽である。
城の神アサギ	御嶽・拝所	謝名城集落の神アサギ。旧7月のウンガミを行う。
根差部親方の神屋	御嶽・拝所	根差部親方は首里で王様に使えていたが、その後都落ちして謝名城へ至り、神事を教えた人物。神屋内に、根差部親方に関係すると伝わる衣服が保存されている。
地頭火の神	御嶽・拝所	かつては神アサギの西側にあったが、80年前頃に移動したとされる。祠は東側を向き、中に石3個の火の神が祀られている。ウンガミの時に拝む。



城(グスク)のウンガミ

名称	分類	概要
ウドゥンニーズ・トウンチニーズ	御嶽・拝所	御殿・殿内の火の神を祀っている。かつては別々だったが合祀された。
城ノロ殿内	御嶽・拝所	ノロの火の神が祀られている。大宜味、大兼久、饒波、喜如嘉、謝名城を管轄した。
上城ガ一	樋川・井戸	グスク時代に住んでいた頃の生活用水、飲料水で使用された。現在水は涸れて形は残っている。
ウドゥンガ一	樋川・井戸	大正時代に掘られた井戸で、城バールの住民には大変貴重な水源地だった。神井としての拝所でもある。2つある。
按司ガ一	樋川・井戸	昔按司ガ一で髪を洗っているのを見られて敵から攻められたとの伝承がある。草木がうっそうと茂っている。
夫婦ガ一(ミートウガ一)	樋川・井戸	グスク内にある井戸。ふたつの井戸があるため呼ばれた。
按司墓	墓	中城御嶽にあった骨を納骨したもの。
潮崎(ウスザキ)	他の史跡・建造物、自然環境	昔、喜如嘉田園は海であったと伝えられており、ここまで潮が寄せていたという。ウスザキは当時の船を繋いでおく場所だった。
謝名城の豊年祭	伝統祭祀	大宜味村内でも、古くからの形を残しているものとして知られ、謝名城の平和、謝名城の七福神などここにしかない芸能が継承されている。
印部石(ゑこすく原)	集落基盤	検地(土地測量)の基準点として設置された石。石のあった場所は、城村の地で現在小字「城原」となっている。

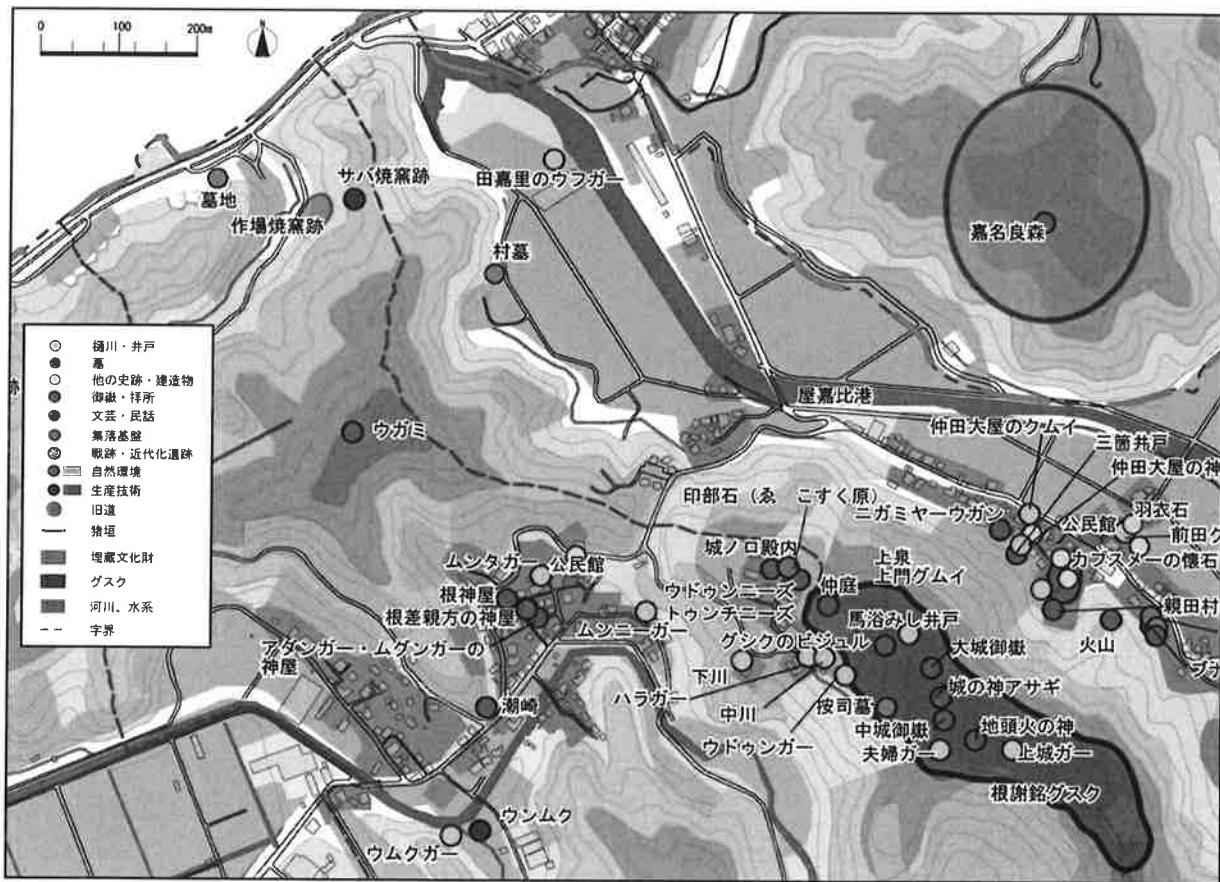


図 謝名城の地域資源

3) 喜如嘉（キザハ）

＜喜如嘉の歴史文化キーワード＞

芭蕉布の里/フクギと芭蕉に囲まれた集落/真謝上ファーファーの話/喜如嘉の臼太鼓/
喜如嘉貝塚/喜如嘉誌（字誌）

大川下流域に位置する集落で、もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。集落の南西部の海浜砂丘からは沖縄貝塚時代後期の土器や貝製品が大量に出土しており（喜如嘉貝塚）、また喜如嘉村は『絵図郷村帳』（1648年）に記録されていることから、大宜味村でも古い時代から人が住んでいた地域ととらえられる。

集落の前面は、かつては美田地帯で知られていたことから、地元では「喜如嘉タープク（田圃）」と呼ばれ親しまれている。またタープクのあった一帯は東シナ海が湾入りした入り江で、山原船の出入りもあった。現在はサトウキビや野菜などの耕地が広がっている。

喜如嘉の祭祀は城ノロの管轄で、主要な拝所にヒンバームイや七滝拝所がある。ヒンバームイは展望の良い公園として集落では大切にされ、七滝拝所一帯は樹木の伐採が禁じられている。ウンガミでは、根謝銘グスクへの拝みに神役が参加した後、集落のヒンバームイで、七滝拝所、グスクへ遙拝を行う。

喜如嘉の芭蕉布は、近代期に一時衰退したが、平良敏子氏を中心とする女性たちが織り手になって再興させたものである。1974（昭和49）年に国の重要無形文化財に総合指定され、2000（平成12）年には平良氏が人間国宝に指定、現在では県内外から多くの伝承生が集まり芭蕉布技術の習得に励んでいる。

喜如嘉は居住域と河川を含め農地、山、川、海などの自然域がコンパクトな範囲にまとまり調和をみせる集落である。集落には「芭蕉布の里」を象徴する芭蕉がいたるところに植えられており、芭蕉布の里として赤瓦民家やフクギ並木の集落道とともに、美しく特徴的な景観を形成している。また、喜如嘉板敷海岸の板干瀬も貴重な資源である。先人たちは屋敷囲いの材として板干瀬を利用した時期もあり、集落に残るこの屋敷囲いも喜如嘉の特徴のひとつである。

喜如嘉臼太鼓と喜如嘉エイサー等の民俗芸能が、年に1度の喜如嘉まつりで踊られ、保存継承されている。

字内には、喜如嘉芭蕉布会館や喜如嘉のふるさと資料館などの文化施設が立地している。ふるさと資料館では、喜如嘉を中心とする大宜味村の民具やぶながやの話を収集して展示している。1996（平成8）年に『喜如嘉誌』（字誌）が発行されている。



喜如嘉集落と耕地

喜如嘉の主な資源

名称	分類	概要
喜如嘉の芭蕉布	工芸技術	1972(昭和47)年に国指定重要無形文化財(工芸技術)。平良敏子氏が2000(平成12)年に人間国宝に指定された。
喜如嘉七滝	御嶽・拝所	昔は滝の左側の石を拝んでいたが、1934(昭和9)年に祠を作って拝むようになった。
ヒンバームイ	御嶽・拝所	ヒンバームイの拝所にはコンクリート建てのお宮があり、中には火の神が二柱祀られている。昭和の初めごろから、神アサギの代わりとされている。
喜如嘉貝塚	埋蔵文化財	喜如嘉集落の北西部、国道58号線に沿った標高3~5mの海浜砂丘に形成された遺跡。
七滝拝所周辺の植物群落	自然環境	喜如嘉七滝周辺には巨大なガジュマルを中心に、ビロウ、センダン、アコウが群生している。
喜如嘉板敷海岸の板干瀬	自然環境	喜如嘉区の南海岸の波打ち際にあり、炭酸カルシウムのメント作用により砂、礫、岩石等が固結された海浜性の岩石。
大山墓ならびに喜如嘉墓のフクギ群	自然環境	国道58号線沿いにある喜如嘉の墓群一帯にあるフクギ群。
真謝上(マザウイー)	自然環境	「真謝上ファーファーの話」(喜如嘉集落創建)が伝わる山。真謝上の頂上に翁と嫗が住んでおり、ある日翁が臼の上に立て杵を差し上げてみると天に届いた。それほど真謝上の山は高かったという話。
喜如嘉の臼太鼓・エイサー	芸能	喜如嘉まつりで踊られる。
印部石(む かうち原)	集落基盤	検地(土地測量)の基準点として設置された石。
印部石(ト はさま原)	集落基盤	検地(土地測量)の基準点として設置された石。

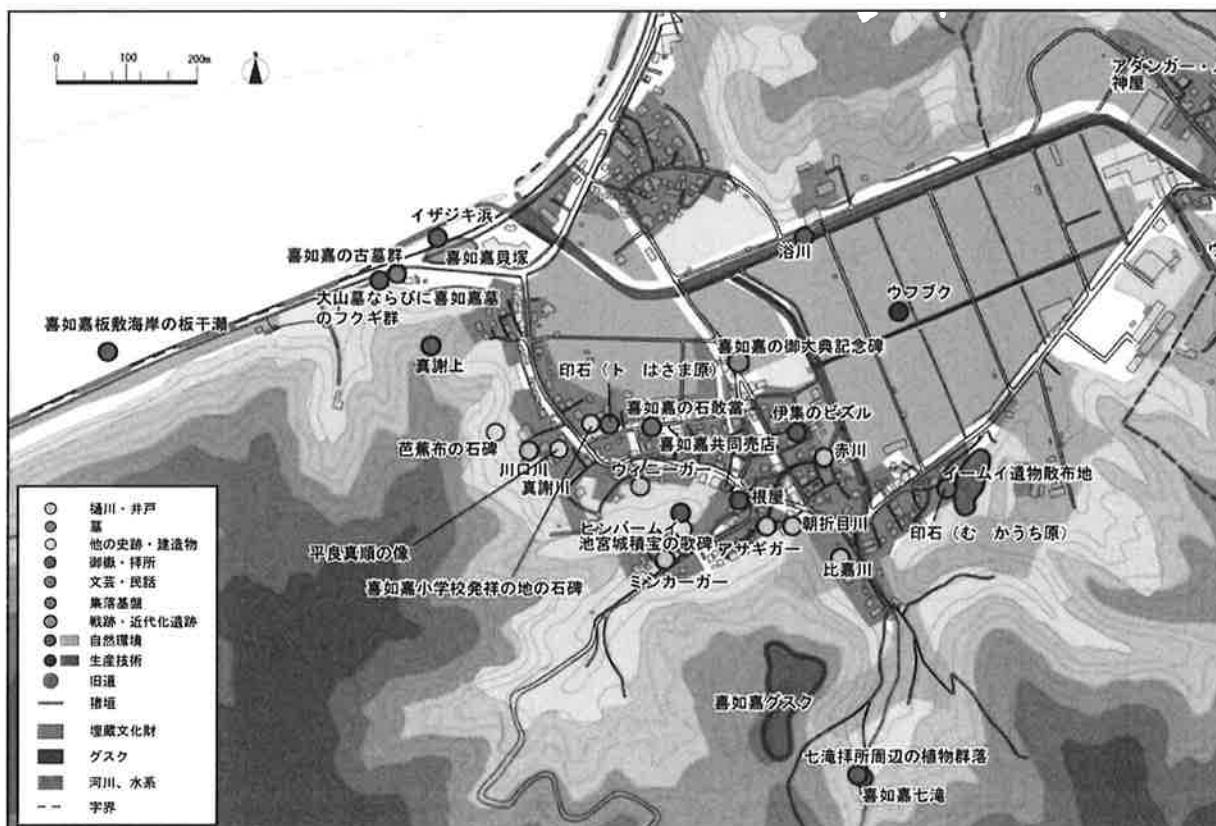


図 喜如嘉の地域資源

4) 饒波（ヌウファ）

＜饒波の歴史文化キーワード＞

山原船の航海安全を祈るお宮/芭蕉の生産/大波を返すサザマ石/
大宜味大工/饒波誌（字誌）

村の中北部の饒波川流域に位置する集落である。もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。饒波村は『絵図郷村帳』（1648年）に記録されており、古琉球時代に形成されたと考えられる。集落の東はずれの喜味堂（キミドウ）と呼ばれる地にかつて集落があったが、山くずれで現在の場所に移動したと伝えられる。

饒波川流域の平坦地は入り江で、集落は海岸から1km程のところにある。饒波川流域には、饒波、大宜味、大兼久の3集落の水田が混在していたというが、現在はサトウキビ畑となり、稲は作っていない。かつて饒波川の入り江では、薪材、炭などの積み出しが饒波川入り江であり賑わった。

戦前は芭蕉布を織ることも盛んだったが、過疎化によって織り手がほとんどいない状況になっている。しかし、喜如嘉に原料の芭蕉を出荷することで芭蕉布との関わりを続けている。そのため集落には喜如嘉と同様、見事な芭蕉が栽培されている。

饒波の祭祀は城ノロの管轄だが、ウンガミでは根謝銘グスクへは訪れず、遙拝に簡略化されている。その後の子の日には道ズネーやエイサー（エンサー）、奉納舞踊が演じられる。

饒波から海の見える丘にあるお宮は、饒波で初めて造られた山原船の遭難事故を慰靈して建てられたもので、9月13日に集落での行事が行われる。

昭和初期に他集落に先がけて簡易水道ができたため、君川（クンカー）などの古くからの掘り抜き井戸も現在使用されず、拝所となっている。大宜味大工の出身地として代表的なところでもある。2005（平成17）年に『大宜味村饒波誌』（字誌）が発行されている。

饒波の主な資源

名称	分類	概要
饒波のお宮(カミヤー)	御嶽・拝所	饒波で初めて作られた山原船が、唐からの帰りに沈んでしまった。その犠牲者の靈を祀ると共に、航海安全を祈願してお宮を建立した。饒波にはたくさんの拝所があり、それをひとつにまとめようということで饒波のお宮を建立した。
ムラの火の神(仲田)	御嶽・拝所	1年越しに豊年祭があり、集落で拝んでいる。
根神(ニガミ)	御嶽・拝所	香炉が1つと火の神が祀られている。集落の拝み所。
根屋(ニーヤー)	御嶽・拝所	前の広場はアシビナー。
パートガ	樋川・井戸	昔は水深があり、子供達はここで泳ぎ、婦人達は洗濯をしたり、大人達も汗を流したりした場所。戦後岩山を削り、川をまっすぐにしたので面影は残っていない。

名称	分類	概要
アナガー	樋川・井戸	旧7月15日に年1回拝み、米3合、線香、ご馳走を供える。昔は水を汲んで生活用水にしていた。
フサキヌアナガー	樋川・井戸	昔大きな木の根本に穴があった。今は水がなく井戸のように見えない。少しほんでいるのが確認できる。
アミンジュルガー	樋川・井戸	集落の祈願場所
君川(クンカ一)	樋川・井戸	集落の水源地から流れてくる川。昔は川のなかにある岩に線香を置いて拝んでいたが、現在は川のすぐ上の方に拝むところをつくっている。正月の新しい水(ミーミジ)、あるいは若水(ワハミジ)をこの川から汲んでいた。
サザマ石	自然環境	2人のブナガヤが沖から担いできたとされる石。もとは1つだった石が小さな二つに分かれ、大きくなつた。饒波に大波が寄せてきたら、この石で沖に返す返し石になっている。

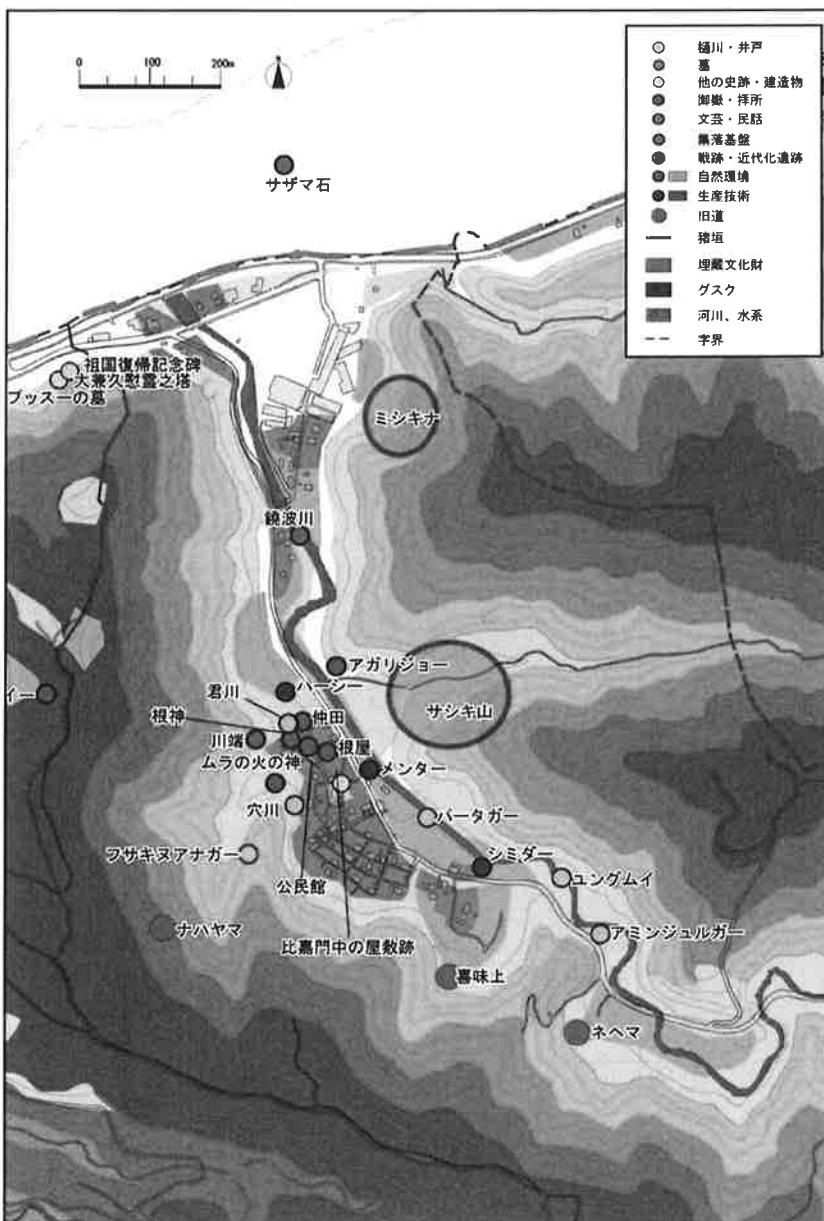


図 饒波の地域資源

5) 大宜味（イギミ）、大兼久（ハニク）

＜大宜味・大兼久の歴史文化キーワード＞

大宜味村行政の中心地（間切番所・村役場庁舎）/大宜味御嶽と植物群落/
上納船の航海安全祈願「ゾーガリー」/漁業の集落/大兼久誌（字誌）

大宜味、大兼久は村の中央部に位置し、大兼久川を境に字が分かれる。大兼久は1921（大正10）年に大宜味から分離した集落であり、イギミ・ハニクと併称される。

大宜味は海辺にある本集落と、その背後の山中にある大正年間に山地開墾でできた喜納という集落からなる。もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。大宜味村（ムラ）が登場するのは、1713年に編集された『琉球国由来記』が最初である。18世紀初頭には大宜味村（ムラ）に間切番所が設置され、一時大宜味間切の中心地だったが塩屋村へ移転された。明治末期に大宜味村役場が塩屋から移転して以来、村の行政の中心地となっている。

戦前までは集落裏側の松並木は大宜味ナンマチと呼ばれて美観を誇っていたが、戦争と虫害で全滅した。大宜味小学校及び裏手一帯は、かつて水田であり、「シマター」と呼ばれていたが、現在は野菜が主な生業である。大兼久では明治末頃から追い込み漁を導入して以来、漁業が盛んになり、昭和初期には南洋諸島まで進出し、糸満、本部に次ぐ漁獲高を誇り、当時は漁業の村として知られていた。

大宜味・大兼久では、元はひとつの村（ムラ）だったことから拝所や神人も共通し、年中行事を共同で行うものも多い。豊年祭は特に盛大に行われる大宜味御嶽は大宜味・大兼久の共同の鎮守の森で、70本もの大木が群生するビロウ群落は県内でも代表的な植物群落として知られている。大宜味の神アサギは、根屋を背に舞台を兼用してできており、豊年祭のときは、神アサギを舞台にしてアサギマーではエイサー（エンサー）が行われる。また、盆の翌日16日にはゾーガリーという大兼久だけの行事がある。この行事は大宜味に間切番所があった頃、大兼久の浜辺から出航した上納船の航海安全と来年の豊作を祈願することに由来しており、中の門（ナハンゾー）や穴川（アナガー）で祈願する。

大兼久にある旧大宜味村役場庁舎は、1925（大正14）年に建てられた現存する県内最古の鉄筋コンクリート造の建築物で、技術の導入や構造法の歴史を知る上で貴重とされている。

1991（平成3）年に『大兼久誌』（字誌）が発行されている。



大宜味御嶽

大宜味・大兼久の主な資源

名称	分類	概要
大宜味御嶽	御嶽・拝所	3月9月の吉日に行われるウガンプセーのとき、両集落の神役と役員がこちら一帯に縄をめぐらし、その中に入ってはいけない標示をする。樹木を取ることも禁じられている。<大宜味>
根神屋	御嶽・拝所	火の神が祀られている。<大宜味>
大宜味のアサギマー	御嶽・拝所	ウンガミの翌日の豊年祭が行われる。<大宜味>
根屋(ニーヤー)	御嶽・拝所	集落の草分けの家の屋敷跡で集落の拝所になっている。<大宜味>
大兼久のクサティ(フサティ、お宮)	御嶽・拝所	拝所として集落民の聖所となっている。シャーロット台風の時に大きな山崩れがあり、地形が変わった。<大兼久>
アナガー(穴川)	樋川・井戸	クサティオミヤの側にある泉。昔はハニクの人々の生活用水として使用されていた。大兼久だけの拝所である。<大兼久>
中の門	旧道	ゾーガリーを行う場所。ゾーガリーとは上納船の航海祈願で行われた行事で、現在は大兼久でとれた野菜や魚を海路への出荷式として行われている。<大兼久>
クラサブッスー(クラサタヌメ)の墓	墓	穀物倉庫の軒下で亡くなった老人を、大兼久の人々が手厚く葬り、折々お祭をかかさず供養したという。倉の下という意味で倉下ブッスーと命名された。<大兼久>
大宜味御嶽のビロウ群落	自然環境	大宜味小学校の北側を流れる川に沿って位置し、本島の海岸斜面に成林するビロウ群落の代表的なもの。<大宜味>
旧大宜味村役場庁舎	戦跡・近代化遺産	県指定有形文化財(建造物)。県内初の本格的な鉄筋コンクリート造の建築物。<大兼久>
大兼久ハーリー	伝統祭祀	昔、漁民の集落であった大兼久では、余興としてハーリーが行われていた。<大兼久>

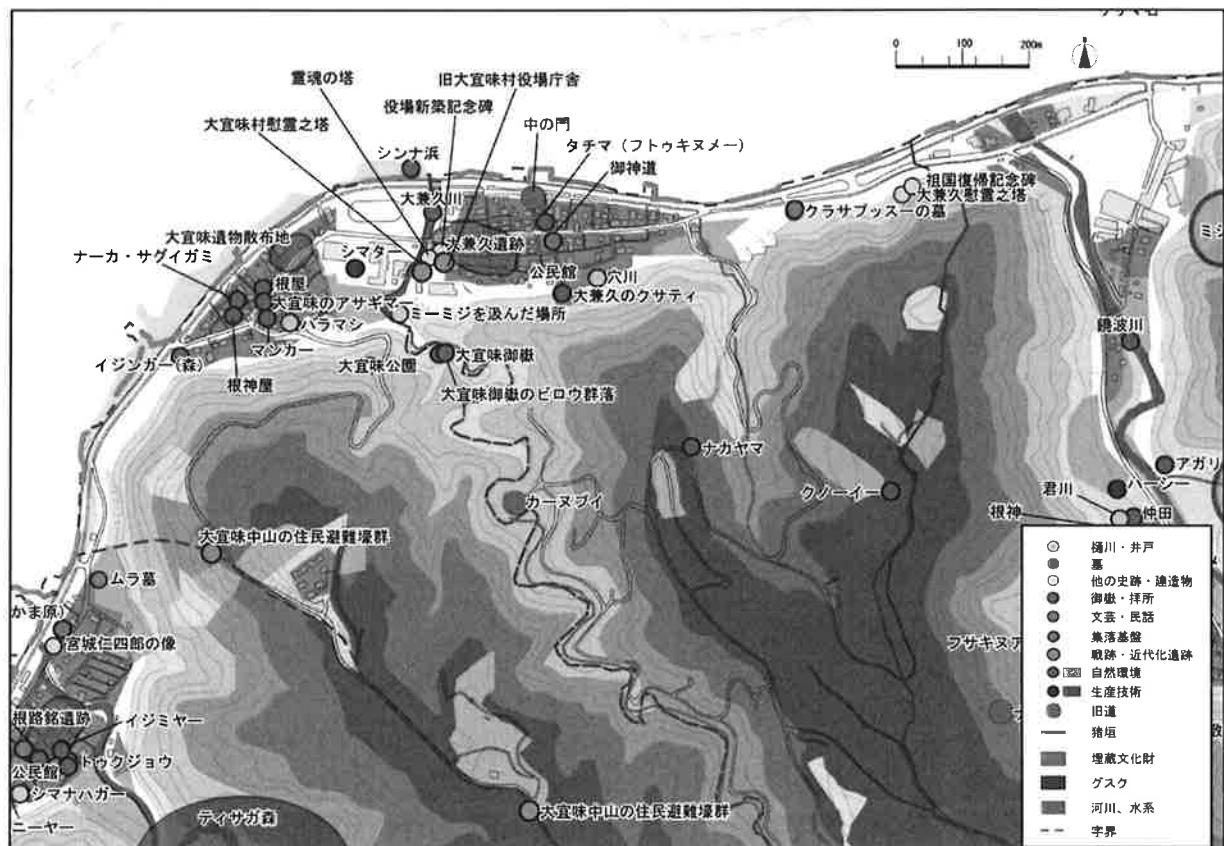


図 大官味・大兼久の地域資源

6) 根路銘（ニミ）・上原（ウイバル）

＜根路銘・上原の歴史文化キーワード＞

ティサガ森の悲劇伝承/大宜味加那筑の伝承/独立した祭祀の開催/根路銘誌（字誌）

根路銘は村の中央部に位置し、海岸段丘の崖下の根路銘川河口の狭い砂丘地に立地する集落である。もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となつた。根路銘村は『絵図郷村帳』（1648年）に記録されており、古琉球時代に形成された古い集落である。集落は大川周辺の山手と根屋周辺からはじまり、段々と周辺に広がつたとされている。上原は、廃藩置県以前に首里や今

帰仁からの移住者でできた屋取集落で、1929（昭和4）年に根路銘と塩屋から行政区として独立した。海岸線に面している安根以外は高い山の中に点在して分布する。

戦前までは杉を主とした木材を村有林から切り出す仕事が集落の重要な収入財源で、また漁業も大兼久と並び盛んだったという。現在はシークワサー栽培を中心であり、特に上原は収穫量の多い地域である。

根路銘は上ヌ川上流の御嶽とティサガ森と北側の子抱森が集落の背後に位置している。ティサガ森は根路銘、上原、大宜味の聖地とされる。女神「天鶴」の悲劇の伝承が伝えられており、その女神を慰めるために集落では、隔年の3月3日にニガナの和え物を供えている。

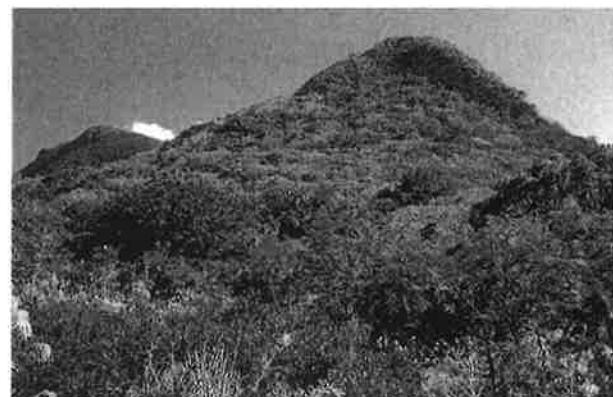
根路銘は田港ノロの管轄村落である。かつては塩屋湾のウンガミにも参加していたが、明治末期より上原と単独で行うようになった。また、大正期には集落内の拝所を根路銘村の火の神と合祀している。根路銘の神アサギは現在なく、集落の祭祀は公民館を利用するなど、伝統的な祭祀を現代的な様式で継承する姿がみられる。一方でウンガミや豊年祭など主要なものは根路銘と上原で一緒に行うなど、地縁的関係は深く結びついている。

大宜味加那筑は、根路銘出身の人間離れした力持ちの人物と伝承される。様々な逸話が残され、彼の屋敷跡と、彼が海から棒で担いできたと伝わる石がある。

1985（昭和60）年に『根路銘誌』（字誌）が発行されている。

根路銘・上原の主な資源

名称	分類	概要
根路銘のお宮（ハミヤー）	御嶽・拝所	根路銘の創始者を祀っているといわれる。<根路銘>
トウクジョウ	御嶽・拝所	脇地頭の屋敷跡とされ、戦前は拝んでいた。井戸跡も残っている。<根路銘>
ティサガ森	御嶽・拝所	ティサガ森の天作という男神と、女神「玉鶴」、女神「天鶴」の伝説がある。天作の妻である玉鶴が、天鶴に嫉妬し、薬を入れたニガナの和え物を食べさせて声を奪う話。<根路銘>
イジミヤー	御嶽・拝所	脇地頭の屋敷跡とされ、神人の衣装が残っている。<根路銘>



ティサガ森

名称	分類	概要
アブシバレーマー	御嶽・拝所	浜下りの行事の時に、浜辺まで遠いため海の見えるこの場所で行事を行った。<上原>
上原のお宮	御嶽・拝所	上原の氏神でティサガ森の神の分身とされる。<上原>
ジージーワーウー	集落基盤	昔マジムンがよく人を騙したといわれている。<上原>
加那筑屋敷	集落基盤	力持ちだったといわれる加那筑という力士の屋敷跡。彼が担いだ岩とされる石が2つ残されている。<根路銘>
印部石(ろ ほかま原)	集落基盤	検地(土地測量)の基準点として設置された石。根路銘に「外間原」があり、それにつながる原名とみられる。
加那筑の力石	他の史跡・建造物	加那筑屋敷に残されている彼が担いだとされる岩。<根路銘>
根路銘のウンガミ	伝統祭祀	当初は塩屋のウンガミに参加していたが、明治末期より根路銘・上原単独開催。<共通>

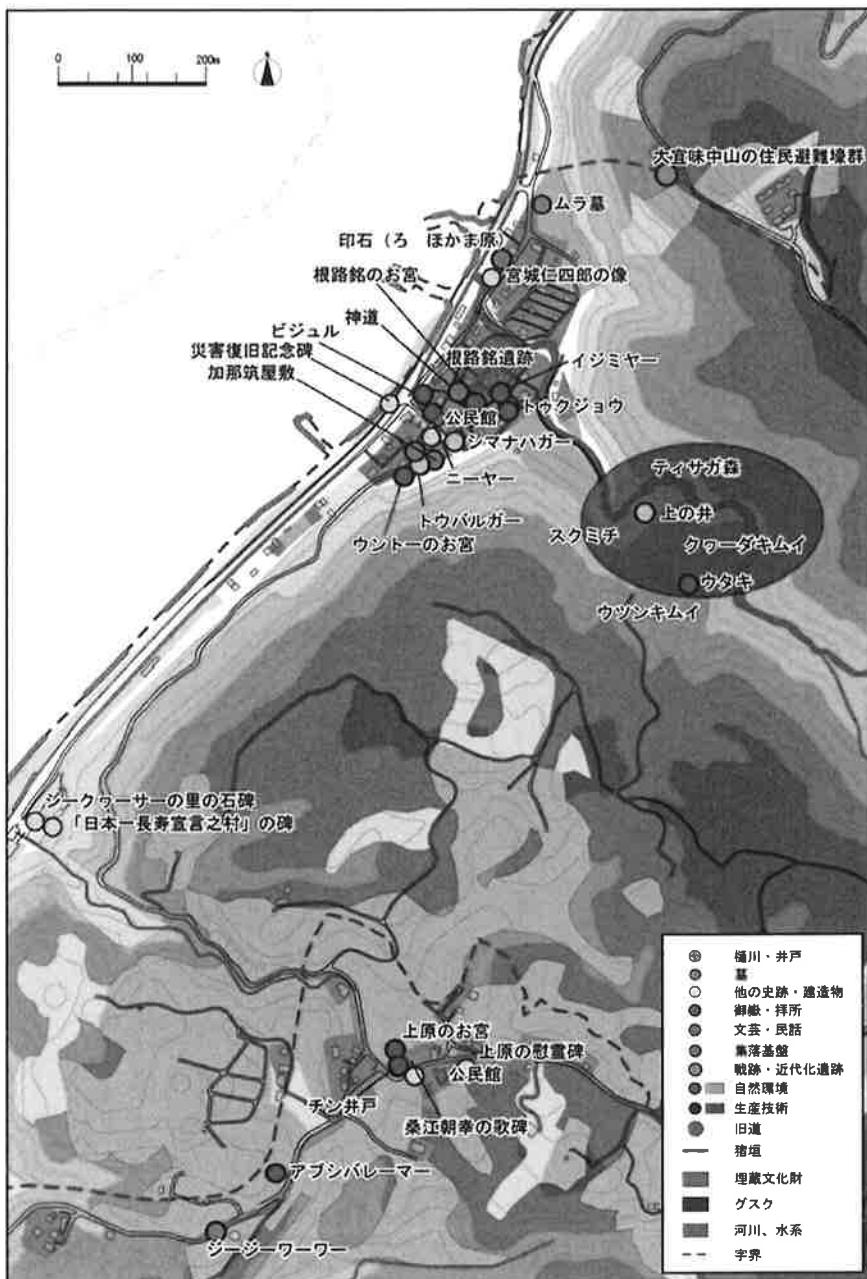


図 根路銘・上原の地域資源

7) 塩屋

<塩屋の歴史文化キーワード>
塩屋湾のウンガミ/塩炊き伝承の森川子之祠/間切番所/塩屋湾/
交通の要所/塩屋誌（字誌）

村の中央部の塩屋湾口の突き出た砂洲上に立地し、村内で最も人口の多い集落である。もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。間切番所は田港村、大宜味村（ムラ）を経て、のち塩屋村に移っており、1760年頃から1908年までは塩屋村が間切行政の中心地だった。塩屋港は古くから陸上・海上交通の要所であり、大宜味間切の王府への貢納物は塩屋村に集積され、今帰仁の運天港に運ばれていた。

1960（昭和35）年頃までは、集落背後の山は山頂まで傾斜の急な段畠だった。サトウキビ畠になっている山手一帯はかつての水田跡で「タチマシ」という水田の名で呼ばれている。また大保集落の潟原の両岸にも集落の所有する水田があり、舟で通い耕作していたという。現在はサトウキビやシークワーサーの生産を中心である。

塩屋は田港ノロの管轄村落で、集落の主要な拝所や旧家、墓地は集落南側の丘の上にある神門（ハーミンゾー）を取り巻くように分布している。また、隣接して組踊「花売りの縁」で知られ、製塩業の祖とされる森川之子を祀った祠もある。神門の麓のムラ墓はウフンチャ墓と呼ばれ、ここのハスノハギリは村指定の天然記念物である。

塩屋、屋古、田港、白浜とともに行われる塩屋湾のウンガミでは、屋古から出発したハーリーのゴールの地にあたり、その地はシナバと呼ばれている。また隔年のウドウイマール（踊り年）では、塩屋のアサギマーで女性だけが参加して総踊りが行われる。

1999（平成11）年に『塩屋誌 第1集』（字誌）が発行されている。

塩屋の主な資源

名称	分類	概要
森川之子祠（ムイカースー祠）	御嶽・拝所	製塩業の祖とされる森川之子を祀った祠。森川之子は首里から都落ちしてきた人物で、琉球古典劇「花売の縁」のモデルとなった。
ハニクバマ	御嶽・拝所、自然環境	塩屋橋からスーシヌサキ（白岩の崎）までの浜。ナガリとも呼ぶ。
塩屋の神アサギ	御嶽・拝所	塩屋区の神アサギ。集落の祭祀行事が行われる。現在の神アサギは1997（平成9）年に建て替えられた。
根神屋（ニガミヤー）	御嶽・拝所	集落の年中行事を起こす場所。
神門（ハーミンゾー）	御嶽・拝所	「集落の年中行事は根神（ニガミ）で起こして、神門で祈願する」といわれるほど重要な拝所である。
ナーカ門中のお宮	御嶽・拝所	昔、塩を炊いた場所で、屋古のナーカ門中のお宮とされる。

名称	分類	概要
塩屋ウフンチャのハスノハギリ	自然環境	塩屋区のウフンチャ墓地内に生育している。ハスノハギリは海岸付近に生育する性質があり、このことから昔はこの樹木が生育している付近が砂浜だったことが伺える。
シナバ(青年浜)	自然環境	かつては砂地だったが現在はアスファルトの広場。ウンガミの際には砂を敷いて、奉納相撲を取り行う。
大宜味間切番所跡	他の史跡・建造物	18世紀中頃から大宜味村から移転し、以来1908(明治41)年まで大宜味間切の行政の中心地だった。現在の塩屋小学校の敷地にあたる。
塩屋港	自然環境	王国時代から交通の要所となった港。王国時代末期にはペリー一艦隊のプリマス号が調査に訪れた。



図 塩屋の地域資源

8) 屋古（ヤフ）

＜屋古の歴史文化キーワード＞ 塩屋湾のウンガミ/クムーと芭蕉でできた神アサギ

塩屋湾北側に位置する集落で、東隣りの田港とヤフ・タンナと併称される。もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。17世紀末に道ひとつ隔てた前田村と合併して屋古前田村となる。1903（明治36）年に田港村の一部となつたが、1930（昭和5）年に再び屋古として独立した。

集落背後には急峻な山が迫り、その山間を縫うように奥手に入り込んだ形で集落が形成されている。土地は広いとはいえない。

集落南面を流れるウフヌハ一沿い、集落周囲の平坦地及び山の斜面を開けた段畑が耕作地となっている。現在はサトウキビやシークヮサーが植えられている。戦前は寄留民により藍が栽培されていた。

集落の主要な拝所には、神アサギ、屋古のクサティガミ、ワハヌル、ハーミヌマー等があり、田港ノロが管轄した。正月の若水はヌルガー、メーダガー、ウフヤーガー、マンカーガーで汲まれた。集落の墓地は塩屋湾北岸の最奥部に当たるメーレーと呼ばれる一帯にあり、屋古、塩屋、田港、押川、大保の人々で使用している。屋古集落の東側にはその共同墓から独立し、新規に建立された墓もある。

塩屋湾のウンガミでは、田港の次に屋古を拝み、塩屋へと移動する。祭場となる屋古の神アサギは、アサギ広場の中心に太い柱を立て、その柱を中心にクムー（藁で編んだ日よけ）を張り、さらに周辺には、芭蕉の葉で作られた屋根が張り巡らされ、地面も芭蕉の葉が敷きつめられる。

屋古の主な資源

名称	分類	概要
ハーリーガミ	御嶽・拝所	ウンガミ行事のとき、爬竜船を漕ぐ前に無事を祈願する場所。
屋古のクサティガミ	御嶽・拝所	屋古の神アサギのすぐ後ろにあるので、クサティガミと呼ぶ。ウンガミでは村の有志が集まり、田港の神アサギからやってくる神人たちを迎える。
屋古の神アサギ	御嶽・拝所	ウンガミのとき、神人が田港の神アサギから屋古の神アサギにやってくる。アサギマーには太い柱を立てて、それを中心にクムーが張られ、その周辺は芭蕉の葉の屋根でめぐらされ、下のほうは芭蕉の葉を筵代わりに敷く。
ヌルガーのクサイ	御嶽・拝所	ヌルガーの後方にあるから呼ぶ。
ワハヌル(若ヌル)	御嶽・拝所	若ヌルの拝所の左側に、若ヌルが乗るカゴなどが保管されている。
ハーミヌマー	御嶽・拝所	根神が祀られている。旅立ちのとき、石を拾った場所。



ウンガミで作られる屋古の神アサギ

名称	分類	概要
前田井戸(メーダガ一)	樋川・井戸	正月の若水を汲む井泉。屋古は前田村といったのでその名がついた。
ヌルガー	樋川・井戸	正月の若水を汲む井泉。知念井戸とも呼ばれる。
大屋井戸(ウフヤーガ一)	樋川・井戸	正月の若水を汲む井泉。
マンカーガー	樋川・井戸	正月の若水を汲む井泉。
馬つなぎ場	集落基盤	神人の馬をつなぐ場所。
ウフヌハー(ウフヌガ一)	自然環境	上流の畠地と山林が接する所が御願場所となっている。ウフヌハーの上流は飲料水を汲む場所で、下流は洗濯場所と定められていた。

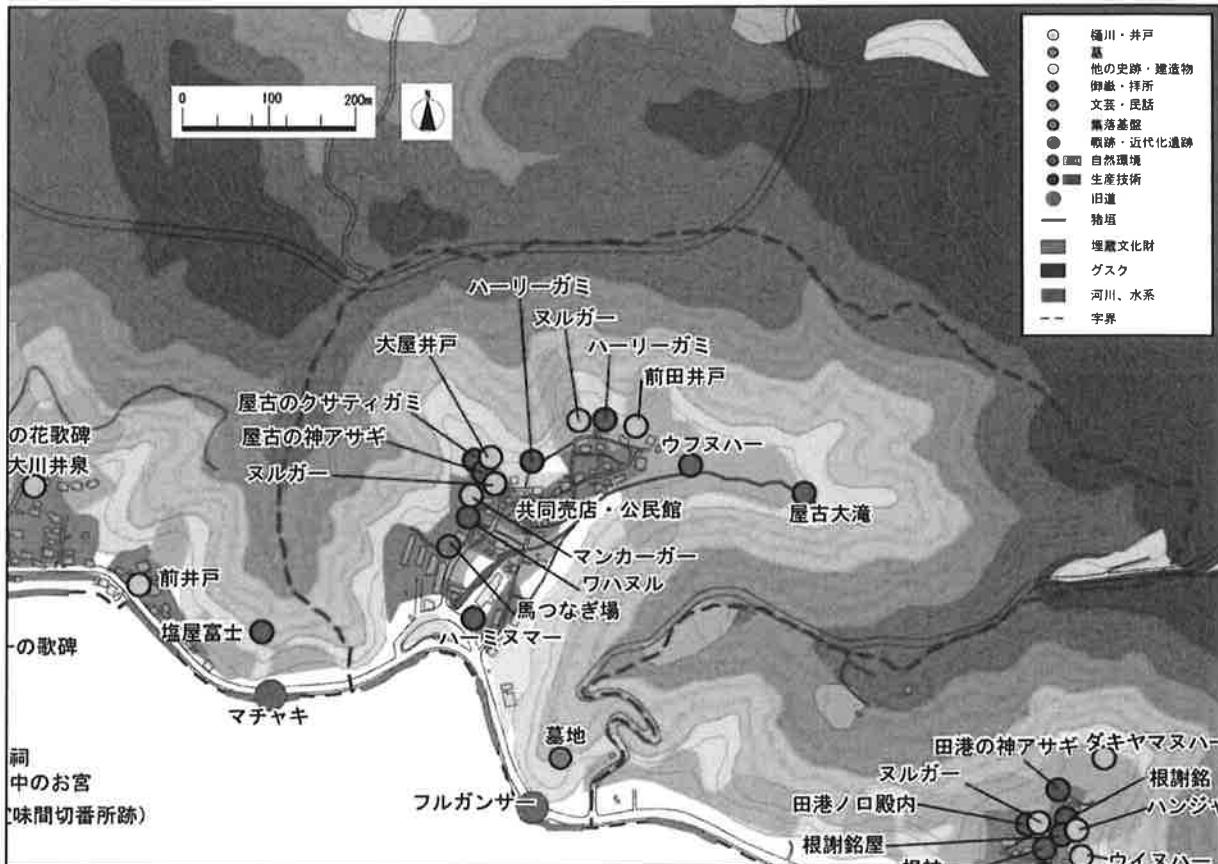


図 屋古の地域資源

9) 田港（タンナ）

<田港の歴史文化キーワード>
塩屋湾のウンガミ/田港御願の植物群落/田港ペークーと田港乙樽/
男女二神を祀る山/メーレー墓

塩屋湾北岸に位置する集落で、近隣集落の中で屋古とともに最も古いとされる。もともとは国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。1903年に屋古前田村を編入したこともあり、大宜味間切で最大の村となった。1929年頃には屋古と大保が行政区として独立した。

集落北側の背後には急峻な山が迫っており、その谷間のわずかな平坦地に集落が立地している。戦前は農業と林業が中心で、山仕事では松を切り出し、薪や炭にして搬出していた。低地では、ダチガーの豊富な水量を用い、水力タービンによる製材も行われていた。またアルコール原料となる蘇鉄の澱粉栽培も盛んだったという。大正中頃から昭和初期にかけては海外移民も多かったらしい。戦後の農業はサトウキビとシークヮーサー生産が主流である。

集落東側の田港御嶽は、拝所の中でも重要な聖地とされ、今日まで保護されてきた。そのため山原でも希有な植物群落が残っており、沖縄の古生期石灰岩の代表的植生として、国指定天然記念物となっている。

田港の伝説上の人物には、武芸の達人といわれる田港ペークー、孝女として名高い田港乙樽があり、それぞれに由来する旧家もある。集落南方のメーレー墓は、イクサンザキとの戦争に関連する伝承をもつ場所で、現在は共同墓となっている。

塩屋湾のウンガミでは、ウフェ屋とノロ殿内で田港ノロが朝の祈願を行い、その後、田港の神アサギに神人が集合して儀式がはじまる。

田港の主な資源

名称	分類	概要
田港ノロ殿内	御嶽・拝所	ウンガミのときにノロを乗せるカゴが保管されている。
田港御嶽	御嶽・拝所	田港御願は、田港にある拝所の中で最も重要な聖地。ノロの管理で祈願する所。
イビナ嶽(オミヤ)	御嶽・拝所	イベの神を祀っている。田港御嶽へ遙拝する場所もある。
田港の神アサギ	御嶽・拝所	ウンガミでは、神人たちが集合して最初の儀式を行う。
大屋(ウフヤ)	御嶽・拝所	屋我地門中の先祖が祀られている(一部)。田港ペークーが住み着いていた場所。
ウンカミ山	御嶽・拝所	女の神だけを祀っており、カミンチュが拝む。山に行く道がないため麓から遙拝する。



田港御願の植物群落

名称	分類	概要
ウヘーヤ(ウフェ屋)	御嶽・拝所	ムラを総支配する神とされている。ウンガミの朝、ノロが拝む。
根謝銘(ニジャミ)	御嶽・拝所	ムラの草分けとされており、世を創った神々が生まれた場所という伝説がある。男女二柱の神を祀っている。田港乙樽の生家とされる。
サンタキ	御嶽・拝所	集落の始祖が住んでいたとされる場所。男の神だけを祀っている。山の上に墓がある。
根神(ニガミまたはニガミヤー)	御嶽・拝所	ウンガミのときに根神をかごに乗せて屋古の神アサギまで連れて行く。
ヌルガー	樋川・井戸	ノロだけでなく一般の人々も拝む井戸。年中行事で拝まれる。
前田井戸(メーダガ一)	樋川・井戸	正月のミーミジや、産湯に使用された。ウフガーとも呼ばれる。
ハンジャガー	樋川・井戸	ハンジャーとは鍛冶屋のことである。昔、この水を利用した鍛冶屋があったことからそう呼ばれる。
メーレーバカ(眼洗い墓)	他の史跡・建造物、墓	昔、大保側のイクサンザキと戦争があった頃、武士が鉄砲の弾が当たった目を洗ったことに由来する。メーデー墓ともいう。
ダチ川	他の史跡・建造物	井戸の側にダチ坊主が住んだ跡があったと伝わる。
田港御願の植物群落	自然環境	田港御願は、田港にある拝所の中で最も重要な聖地とされ、人為的な干渉を受けることなく今日まで保護してきた。国指定天然記念物。

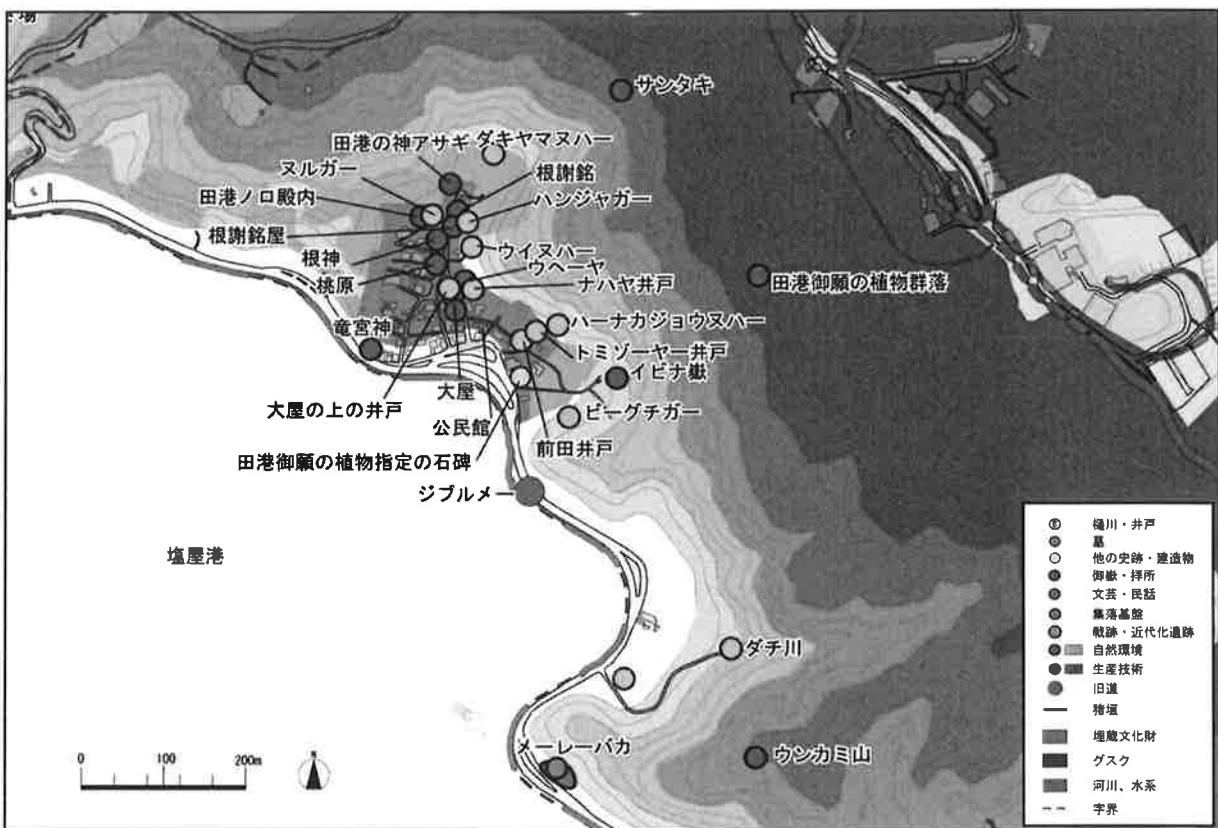


図 田港の地域資源

10) 白浜（トゥヌガー）

＜白浜の歴史文化キーワード＞
塩屋湾のウンガミ/渡し船の発着所/渡野喜屋/平良保一生誕の地

塩屋湾の南岸に位置する集落で、戦前までは渡野喜屋村と呼ばれた。当初は国頭間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。1946年に小字名であった白浜に改称された。

白浜は世帯数も少なくこじんまりした集落である。戦前の生業は農業と林業で、薪などを山原船にのせ、那覇で交易していた。現在はパイナップル作が行われている。

塩屋湾岸道路や宮城橋が整備される前までは、塩屋への渡し船の発着所としてにぎわった。

集落東の山麓に拝所があり、火の神2つと香炉が置かれるお宮がある。ウブガー、ピンカガ、サバガ、ミートウガなどの掘り井戸が残されている。

塩屋湾のウンガミには、塩屋、屋古、田港とともに参加し、その翌日に行われるヤーサグイでは、白浜の根神殿内、タマ屋、クラントーを拝む。

白浜の主な資源

名称	分類	概要
ウイクランニー(上倉根)	御嶽・拝所	屋号上倉根(旧家)。
白浜のお宮	御嶽・拝所	オミヤには火の神2つが祀られている。
サバガ	樋川・井戸	湧泉。ミーミジを汲んだ場所。山原船が係留して水を汲んだ場所でもある。
ピンカガ	樋川・井戸	井戸に関わる御願が最後になされる場所。
ミートウガ	樋川・井戸	ミートウ(夫婦)のように寄り添った井戸。海岸べりにあり、水はなく空井戸になっている。
クラサガ	樋川・井戸	オミヤ近くにある井泉。
シマガ(チンガ)	樋川・井戸	飲み水を汲んだり、洗濯する井泉であった。
ウブガ	樋川・井戸	産湯に使用。水が赤い年は女の子、白い年は男の子が多く生まれるといわれる。
平良保一の顕彰碑	他の史跡・建造物	1909(明治42)年、沖縄県となってから初の県会議員。
ハンザキ製錬所跡	生産技術	イルマタ銅山(大保)から採掘した銅を精錬した場所。一帯には金属やレンガが散布されており、その跡を裏付けている。



平良保一の顕彰碑

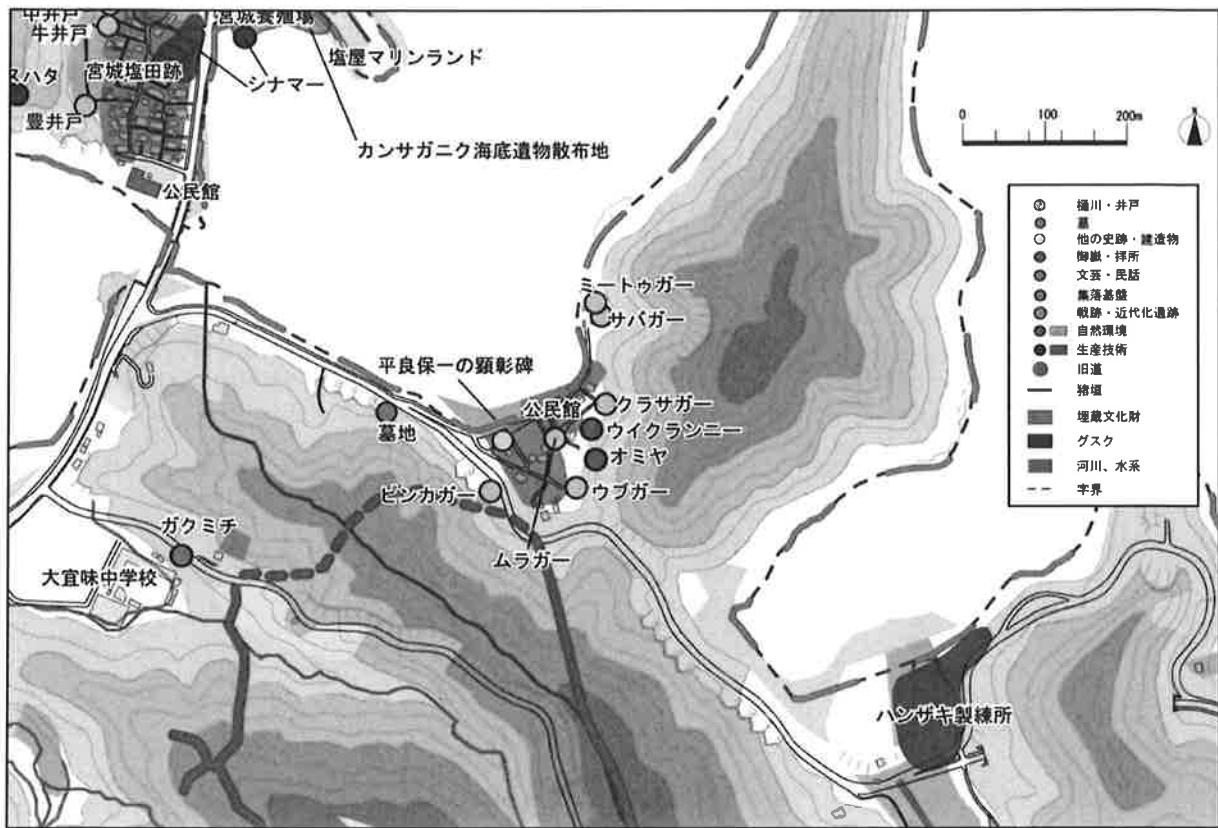


図 白浜の地域資源

11) 宮城（マーグシク）

＜宮城の歴史文化キーワード＞

塩屋湾港の島/屋取集落/シナマー/津波・宮城のトウケーの板干瀬

塩屋湾口に位置する島で、塩屋湾内側の平坦地に集落が立地する。18世紀中頃、首里などから人が移住ってきて集落が形成された屋取集落である。はじめ津波村に属し、1929(昭和4)年に行行政区として分離した。

戦前までの生業は農業と製塩業であり、塩田跡はシナマーとして地名が残っている。また集落の周辺にはヤフジー(屋古地)、ニルミジー(根路銘地)と称される土地があり、屋古や根路銘の人から借地し小作していたといわれる。宮城島と本島間に最初に橋が架けられたのは1937(昭和12)年で、それまでは往来に渡し船を使っていた。津波との間に住民一体となって架けた丸木橋が何度も台風で破壊されたという。また津波の南海岸から宮城島に向かって板干瀬が発達している。

拝所は公民館北側に集中し、お宮の他に、セメンガー、中井戸、牛井戸の順に井戸がある。この3つの井戸はそれぞれ若水用、飲料用、生活用水専用と決められていたという。

宮城の主な資源

名称	分類	概要
宮城のお宮	御嶽・拝所	宮城集落の拝所。
セメンガー	樋川・井戸	若水や産湯、飲み水に使用した。
中井戸(ナカガ一)	樋川・井戸	飲み水に使用。
牛井戸(ウシガ一)	樋川・井戸	牛に飲ませたり、風呂や洗濯に使用。
豊井戸(トヨガ一)	樋川・井戸	井戸を作ったが、水がほとんど出なかつたために使用していない。
カンサガニク	埋蔵文化財	カンサとは墓のこと。塩屋湾に突き出た砂嘴にある。カンサヌメーとも呼ばれ、宮城の崎山、屋我、花城、辺土名、屋良の各門中の墓がある。
カンサガニク海底遺物散布地	埋蔵文化財	カンサガニクの南側の小湾の浅瀬一帯に青磁等の陶磁器片が散見できる。
宮城遺物散布地	埋蔵文化財	宮城島の村営住宅の北東側砂丘にあり、瘤状把手のついたグスク土器や青磁等が採集されている。
宮城塩田跡(シナマー)	生産技術	昭和の初期までは津波集落から出向いて製塩を行っていたが、1929(昭和4)年に宮城が津波から分離し、それをきっかけに宮城区民が買い取った。戦前は重要な収入源であった。
ニルミジー(根路銘地)	生産技術	根路銘集落の耕作地。
ヤフジー(屋古地)	生産技術	屋古集落の耕作地。
津波・宮城のトウケーの板干瀬	自然環境	津波小学校の西海岸にある板干瀬。宮城島に向かって塩屋湾の南側開口部を閉じるような形で形成される。



津波・宮城のトウケーの板干瀬

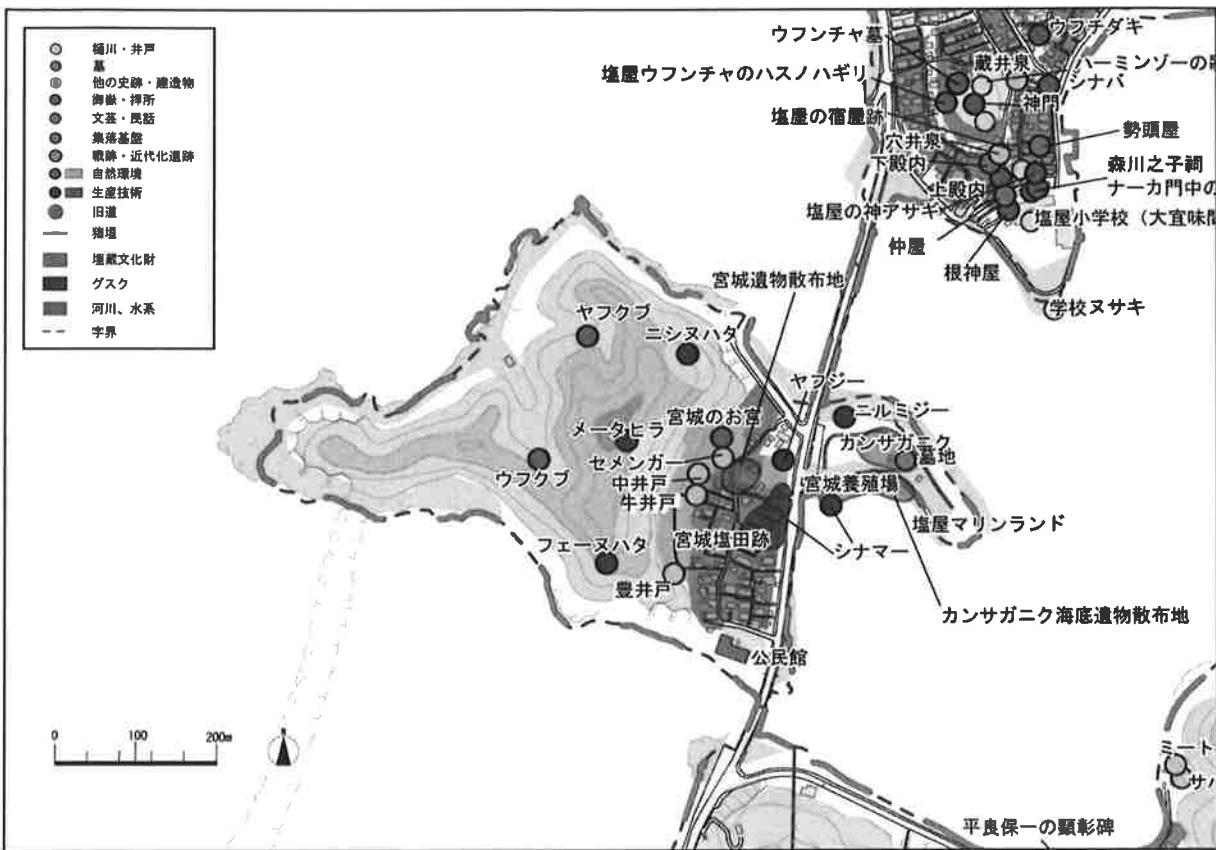


図 宮城の地域資源

12) 津波（チファ）

＜津波の歴史文化キーワード＞

羽地間切との結節点/平南村の記憶を残す神アサギや拝所/津波グスクと大蛇伝説

村の南端に位置する集落である。もとは羽地間切に属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となつた。もともと集落は南側の平南村にあつたが、大津波の影響で現在の位置に移動したと伝えられている。1880年以前に南にあった平南村を合併したとみられる。

戦前は薪や建築材などの搬出が行われ、山原船で那覇方面へ積み出していた。大正初期から近年までは茶の栽培も盛んであった。現在はサトウキビとパイン作が主な生産物である。

祭祀は津波ノロの管轄にあり、主な拝所にはトゥヌ、神アサギ、ノロ殿内、ヘナンウフェーフ等がある。津波の神アサギは山原でも珍しいタイプとされる。建物はひとつだが、内部が二分しており、津波アサギ、平南アサギと呼び分けられおり、合併村の痕跡を見ることができる。

津波グスク、石グスクの2つのグスクがあるが、いずれもグスク時代の遺物は確認されていない。津波グスクには人に危害を加える大蛇がいて、それを退治したという伝承が残されており、そのエピソードを基に、豊年祭では「大蛇退治の踊り」が披露される。津波集落背後の尾根筋は、かつて松並木（抱護林）が連なっていた。これを大蛇の背に見立て、その頭は津波小学校の北の岬にあたり、そこの洞窟が目であったと伝承される。大蛇を龍とすると見事な風水伝承であり、風水景観である。

2004年に『大宜味村津波誌』（字誌）が発行されている。

津波の主な資源

名称	分類	概要
津波グスク	グスク	津波集落の南西丘陵の先端部に位置し、国道58号に接している。石墨・遺物は見当たらない。大和で修行した坊主が大蛇を退治する話が残る。
ガタ山(石グスク)	グスク	アザカ滝を背に左斜めに見える山である。平南村があつた頃の拝所であると思われる。
森川之子(森川子遺跡)	御嶽・拝所	琉球古典劇「花売の縁」の主人公「森川之子」に由来する遺跡。
津波の神アサギ(ツハアサギ・ヘナンアサギ)	御嶽・拝所	津波の神アサギ。左が津波、右が平南。2つの神アサギがあるのは平南村の合併を表している。
シマウフェーフ	御嶽・拝所	津波の拝所。
津波のノロ殿内	御嶽・拝所	津波のノロ殿内。隣りにはヘナンウフェーフがある。現役ノロがいた頃には、年中行事などはノロ殿内から拝んでいた。



津波の神アサギとトゥヌ

名称	分類	概要
トウヌ	御嶽・拝所	津波で一番高い神様で、村の繁栄を祈願する。
ヘナンウフェーフ	御嶽・拝所	平南の拝所。
ニガミヤー	御嶽・拝所	津波のムートウドウクル。
イチャピシポンシー	御嶽・拝所	津波村の始祖「イチャピシポンシー」(板干瀬大主)関係か。
津波の神アサギ周辺の植物群落	自然環境	津波の神アサギ前方の広場には、クワノハエノキの大木、後方の斜面には、フクギの優占する小規模の群落が発達する。
津波・宮城のトウケーの板干瀬	自然環境	南側の海岸から宮城島に向かって塩屋湾の南側開口部を閉じるような形で形成されたもので、その形状から昔の砂嘴が固結してきたものと推定される。
平南川の滝(タ一滝、アザカ滝)	自然環境	大宜味村の南端に架かる平南橋。その下を流れる平南川の上流を行くと、平南のタ一滝がある。
印部石(ユ あさか原)	集落基盤	検地(土地測量)の基準点として設置された石。
印部石(井 つは原)	集落基盤	検地(土地測量)の基準点として設置された石。
津波の豊年祭	芸能	隔年で開催される。津波グスクにまつわる大蛇退治の伝説を基に創られた「大蛇退治の踊り」が踊られる。

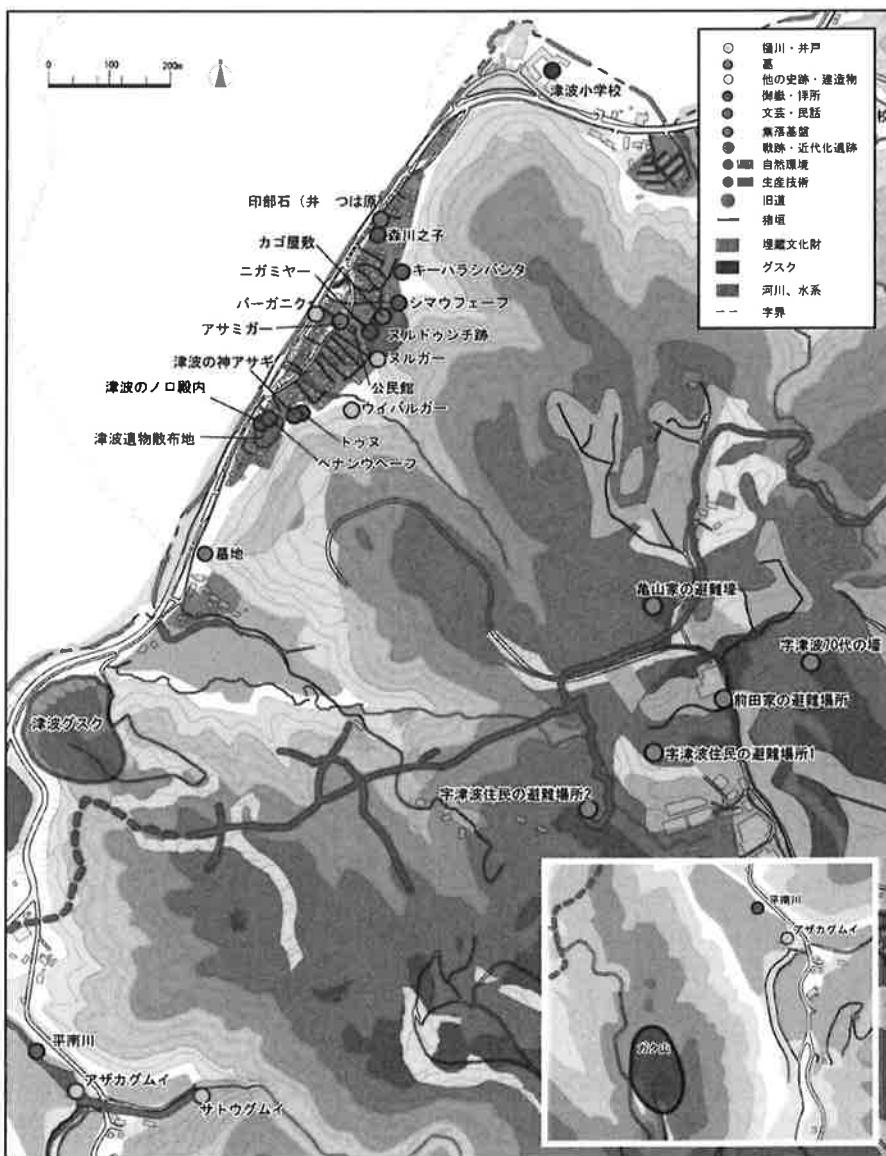


図 津波の地域資源

13) 押川（ウシカ一）・大保（テーフ）・江洲（イシブロー）

＜押川・大保・江洲の歴史文化キーワード＞

山間にできた新しい集落/塩屋湾のウンガミへの参加

■押川（ウシカ一）

大保川河口から北に 3 kmほどあがった山間にある集落である。1900（明治 33）年頃に大宜味、越来（沖縄市）、高嶺（糸満市）の各間切の人々が藍を栽培するために開墾を始め、その後本部、今帰仁、羽地の人々が入植した。1929（昭和 4）年に塩屋・根路銘の区域から人々一部を分字し、行政区となった。高い山に囲まれたわずかな谷あいに、家々が散在している。

戦前は山林、芋やウコン、藍の栽培が盛んだったが、藍は昭和初期以降生産されなくなった。戦後はサトウキビとシークワサー生産を中心である。

集落は 5 班（バール）に分けられ、かつては班ごとにモウと呼ばれる祭場に集まっていたが、戦後 1949（昭和 24）年にお宮と呼ばれる祠がつくられ、そこで一括して行事が行われるようになった。塩屋湾のウンガミにも参加している。

■大保（テーフ）

塩屋湾の最奥部に位置する。18世紀後半に那覇、首里、泊などから移住してきた人々が開拓した屋取集落である。行政上は田港に属していたが、1929（昭和 4）年に行政区となった。

大保大川の河口南側に集落が形成されている。近隣には小規模な低地があり、かつては田港の水田だった。明治から大正期にかけては製塩が盛んに行われ、「シナマー」と呼ばれる塩田跡が残されている。戦前は農業と林業を生業とし、薪や山原竹を山原船で出荷していた。現在はサトウキビとパイン作を中心である。

1916（大正 5）年頃に、イルマタ銅山が創業した。製錬所のあった場所一帯には製錬後の金屑やレンガなどが散布している。集落西方の一帯はイクサンザキと呼ばれ、三山時代や薩摩侵攻に関わる 3 種類の戦いの伝承が残っている。塩屋湾のウンガミにも参加している。

■江洲（イシブロー）

琉球政府の開拓計画で、1959（昭和 34）年に入植した集落で、1962（昭和 37）年に行政区として独立した。集落が所在する一帯は白浜に含まれていた。江洲は上原、押川とともに内陸部に位置し、屋敷は標高 100～150m の台地状の土地に広く散在している。入植者は大宜味村出身者が大半を占めるが、他に国頭村、今帰仁村、読谷村、沖縄市、豊見城市、宮古、八重山など広範囲に及ぶ。

新しい集落であるため、拝所は、お宮（ムラガミ）と呼ばれる祠の一箇所のみであり、集落の祈願祭祀や正月の初詣でが行われる。塩屋湾のウンガミにも参加している。

復帰以降、焼物の窯元が増え、江洲焼の名で知られる。

押川の主な資源

名称	分類	概要
押川のお宮	御嶽・拝所	集落の祭りを一括して執り行う場所。1949(昭和 24)年に祠がつくられた。
モウ	御嶽・拝所	各バール(班)に存在する。
マエダガ一	樋川・井戸	若水を汲んだ場所。
ムイニーガ一	樋川・井戸	正月の若水を汲んだ。
ムターガ一	樋川・井戸	集落生活用水として使用していた。
セーグムイ	樋川・井戸	セー(小さなえび)がこの川にいたので名がついた。

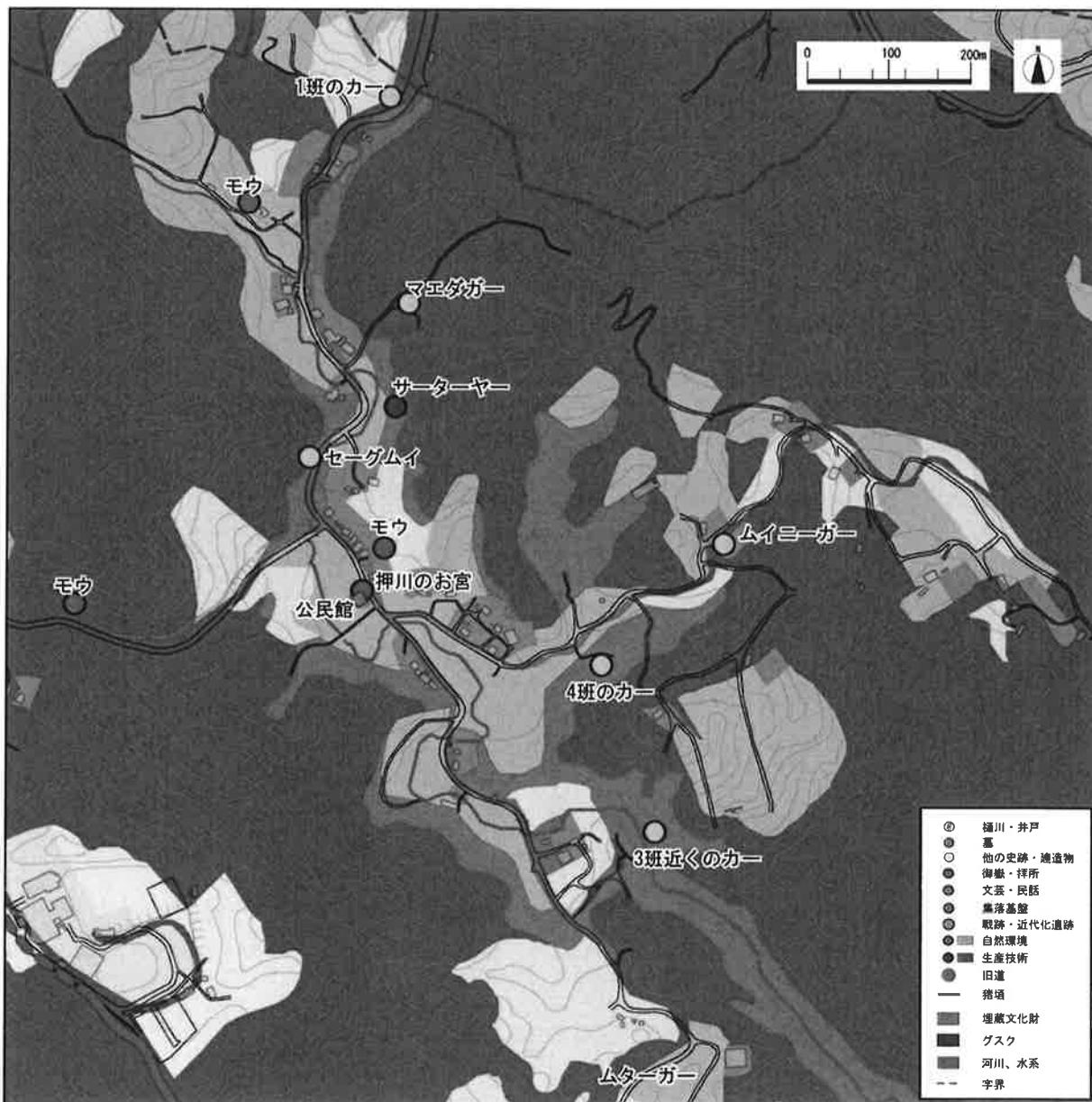


図 押川の地域資源

大保の主な資源

名称	分類	概要
大保のお宮(クサティ)	御嶽・拝所	台風被害で下方に移動した。2006年に改築。
竜宮神	御嶽・拝所	お宮の石(貝)を持ってきて、航海安全の神として祀っている。
タキノウイ	樋川・井戸	大保集落における最初の生活用水の場だった。タキノウイ(滝の上)といっているが、実際には滝の下にある。
ナーカノカ一	樋川・井戸	洗濯用水として使用していた。枯れ井戸になっている。
アガリノカ一	樋川・井戸	若水をとる。
イクサンザキ(戦ん崎)	墓、他の史跡・建造物	戦争に関する伝説が3つ残っている。
シナマー	生産技術	塩田跡。かつて製塩に使ったところで、1985(昭和60)年に埋め立てられ、宅地となった。
青田(オーター)	生産技術	水田跡。
塩兼(スーカニ)	生産技術	水田跡。土地改良により耕作地となっている。
イルマタ銅山	生産技術	銅山跡。1916(大正5)年頃に創業か。製錬所のあった場所は、白浜集落の裏手にある小さな入り江の奥(ハンザキ)で、一帯には製錬後の金屑やレンガなどが散布している。

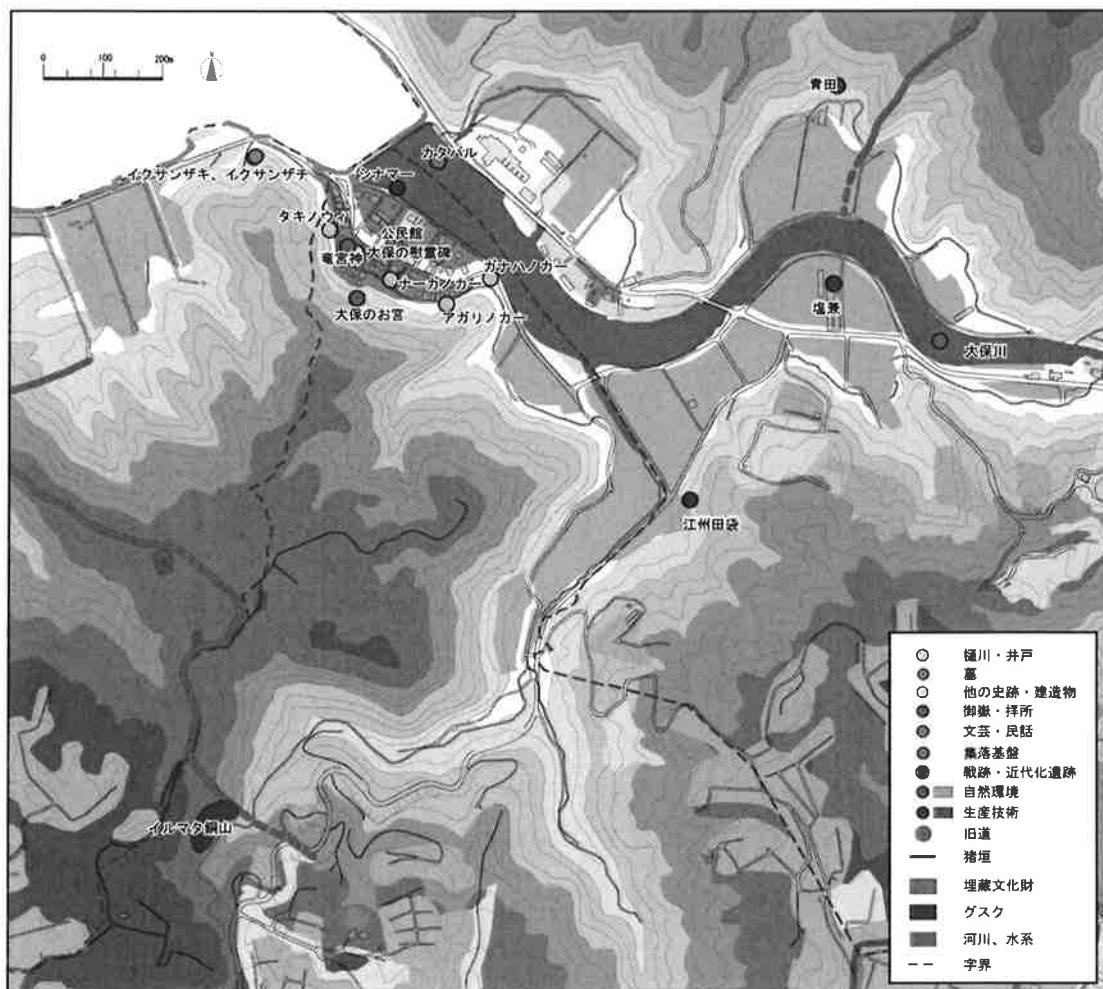


図 大保の地域資源

江洲の主な資源

名称	分類	概要
江洲のお宮(ムラガミ)	御嶽・拝所	新開拓集落のため、拝所はお宮だけである。
開拓の碑	他の史跡・建造物	開拓を記念してたてた碑。
江洲焼	美術工芸	江洲には良質の陶土が豊富にあり、江洲焼で知られる。

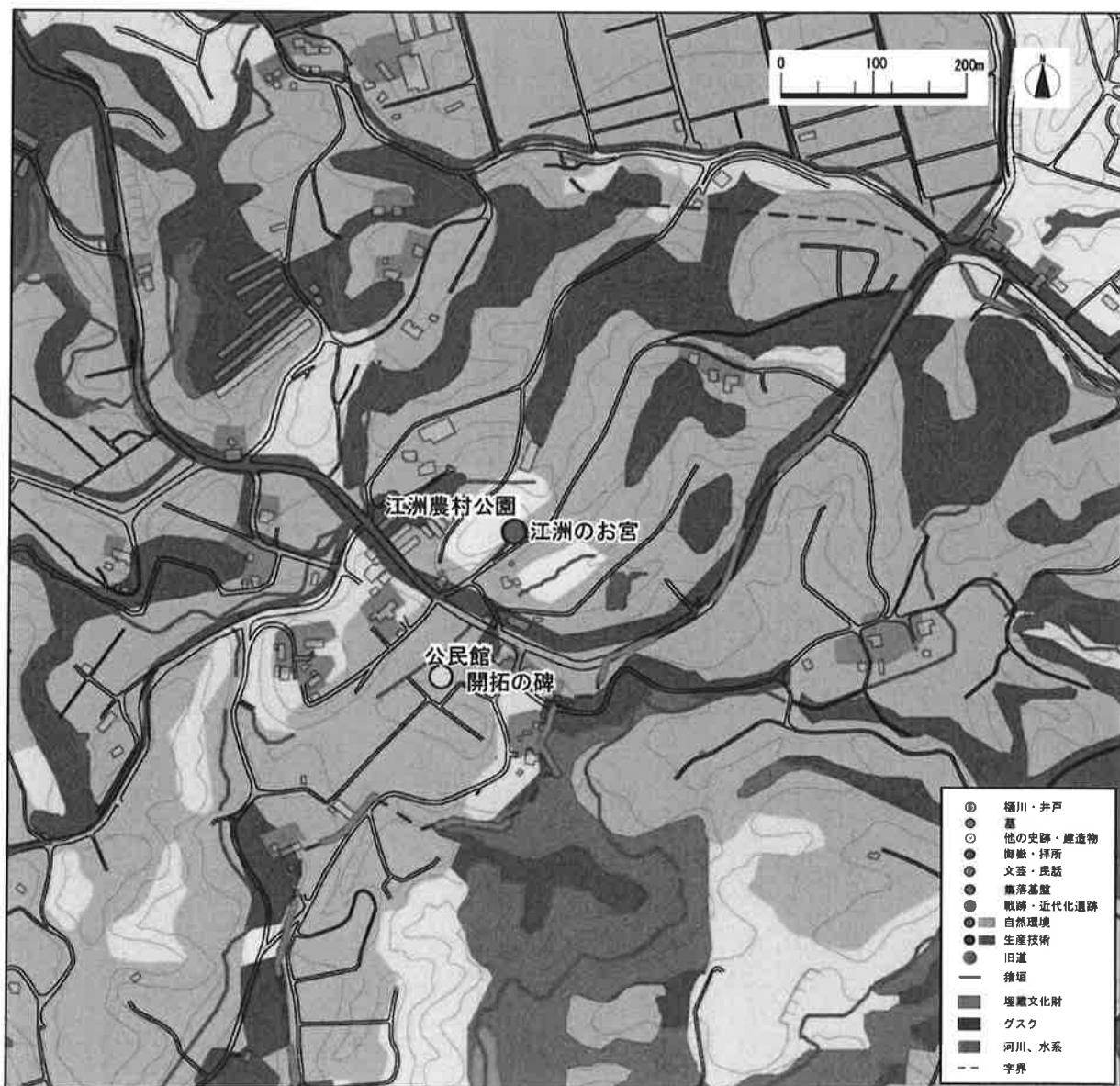


図 江洲の地域資源

3. 大宜味村の歴史文化基本方針

(1) 村の歴史文化における課題

1) 文化財行政における課題

- ・基礎調査のリスト化によって多くの文化財の抽出がされたが、区長アンケートによるところ一部の消失が確認された。今後も継続的に文化財の現存状況の把握に努める必要がある。
- ・現在、村内には国指定文化財 4 件（喜如嘉の芭蕉布^{※3}、田港御願の植物群落、塩屋湾のウンガミ）、県指定文化財 3 件（喜如嘉板敷海岸の板干瀬、大宜味御嶽のビロウ群落、旧大宜味村役場庁舎）が指定されており、その重要性が認識されている。一方で村指定文化財は 2 件（大宜味村の猪垣、塩屋ウフンチャのハスノハギリ）であり、今後は村指定文化財を増やし、文化財を積極的に保護する施策が必要である。
- ・根謝銘グスクは沖縄本島最北の大規模グスクであり、山原のグスクの代表として、さらに祭祀空間の継承された重要な聖域として、大宜味村の核となる文化財である。根謝銘グスクを核にハード、ソフトの文化財の保全・継承への取組みが必要である。
- ・文化財は単体で存在するのではなく、周辺の自然や集落の生活環境と密接な関わりがある。文化財が持つ歴史的背景や文化財周辺とのつながりを連続的にとらえ、文化財及び周辺環境の総合的な保全が必要である。
- ・こうした取組みには、村行政による継続的な調査や地域への支援が必要であり、資料収集や調査・普及の担い手となる文化財職員の確保も必要である。

※3：芭蕉布は、喜如嘉芭蕉布保存会、平良敏子氏それぞれで指定されている。

2) 地域住民における課題

- ・地域においては、普段見慣れている資源の価値を意識しないまま放置されていたり、文化財という名称に距離を感じたりすることがみられる。「文化財＝近寄りがたい」というイメージを払拭し、人々の生活に密着した大事な財産であることをアピールしていく必要がある。
- ・地域の文化財は行政だけでなく地域住民の手によって守り、活用していく仕組みをつくることが大切である。そのためには地域住民が親しく文化財を知り、触れる機会や活動を広げていく必要がある。

3) 観光や地域振興との課題

- ・本村ではエコツーリズムや体験滞在型観光が行われつつあり、観光産業においても歴史文化資源は実用的価値を持っている。今後、歴史文化情報の収集と蓄積を踏まえた観光情報の公開の仕組みを検討していく必要がある。
- ・文化財及び周辺環境の総合的な保全・活用を行うには、文化財側だけでなく、観光、建設やむらづくり部門などの行政部局間の横断的な取組み、情報の共有が必要である。

(2) 大宜味村歴史文化基本方針－文化財を結ぶテーマと方向性

1) 文化財を結ぶ基本的な考え方

大宜味村には、根謝銘グスクやウンガミ行事などの山原の歴史文化を象徴するような歴史文化資源がある。それとともに、ムラ・シマ（字）には御嶽や神アサギ、伝統芸能、井戸、フクギ並木などの資源が、地域の風土や環境、人々の生活に密着しながら存在している。それらは共通性を持ちつつも、それぞれが刻んできた歴史によって地域が個性をもって息づいている状況が理解できる。

本事業では、これまで文化財としてとらえていた個々の資源だけでなく、歴史や伝承によるストーリー、まつりなどの地域のつながりによって文化財を集合体としてとらえ、総合的に保全・活用を図っていくものとする。とりわけ大宜味村では、ムラ・シマ（字）を単位に伝統的な生活の営みや行為、歴史的環境が形成されてきた経緯があり、歴史文化の単位としてとらえることができる。それをふまえ、ウンガミや猪垣などの広域的なテーマで、各ムラ・シマ（字）の共通性を面や線として結ぶことで、広がりのある保存や活用に発展させたいと考える。

基本方針を策定するにあたり、歴史文化のコンセプトを次のとおり設定する。

大宜味村の歴史文化のコンセプト 自然と人々が共生する山原・イギミ（大宜味）の里 ～シマ（字）で育て、伝え・広げる歴史文化～

※コンセプト・基本方針では、地域の人々が親しみのある「シマ（字）」を使用する。

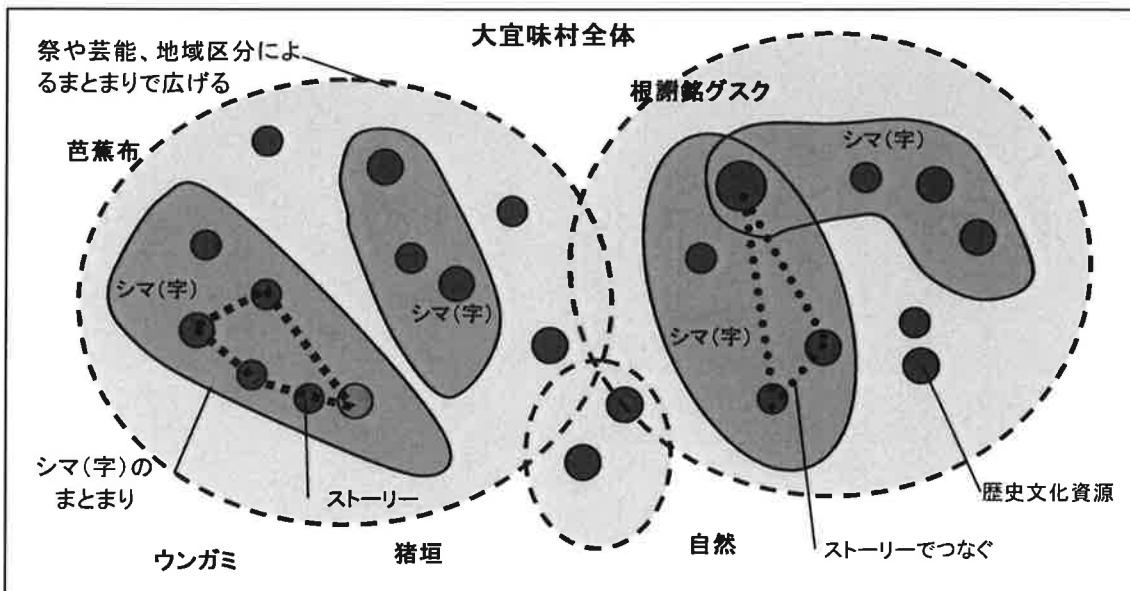


図 シマ(字)の歴史文化のまとまりの概念図

2) 基本方針

①シマ（字）自慢の宝をみつけ、地域全体で守り、伝えます。

- 地域の資源やその背景となる物語を継続的に掘り起こし、地域の魅力としての価値の共有化を図る。
- シマ（字）の歴史文化を楽しく紹介できる人材の発掘と育成を行うとともに、情報ツール（教材、展示、サイン）の充実を図る。
- 拝みや伝統芸能をはじめ、シマ（字）の歴史文化を知る・体験する機会を充実させ、世代や地域を越えた交流を促進する。
- シマ（字）の資源を地域住民が評価し、保存・継承できる仕組みをつくる。

②シマ（字）の歴史的環境（もの、こと、ひと）を一体的に保存・継承します。

- 歴史文化資源は、それを取り巻く自然環境や集落景観、人々の生活などと深い係わりをもって存在している。個々の文化財だけではなく、シマ（字）がもつ風土や環境全体をひとつの文化財としてとらえ、歴史的環境の保存・活用を図る。
- 伝統祭祀や生業などには、土地の記憶や先人たちの知恵が継承されている。伝統文化に込められた本来の意義を理解し、保存・継承する。
- 地域に根ざして活躍する人材も、シマ（字）の貴重な資源ととらえ、歴史文化むらづくりの担い手として技術の養成や活動への支援を図る。

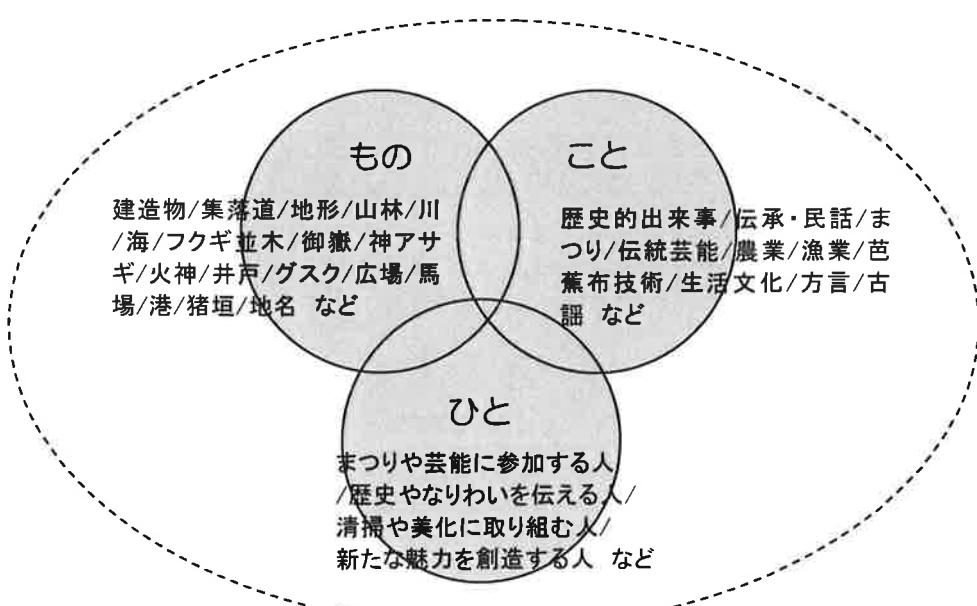


図 シマ(字)の歴史的環境の構成要素

③祭祀や伝統芸能による地域のつながりを、大宜味全体の広がりへと展開します

- ・ウンガミは、シマ（字）同士の伝統的な関係を表す行事である。ウンガミの道すじや拝所空間など、失われた祭祀の記憶を収集しながら、地域間の結びつきを再生する取組みを図る。
- ・伝統芸能は、地域の個性や活力を示す目安となる存在であり、伝統芸能の発表会など、シマ（字）同士が競いあいながら交流を深めるような展開を図る。

④根謝銘グスクを国頭の歴史文化の核として保存・活用を推進します

- ・根謝銘グスクは、グスク時代の国頭地域の拠点として山原のグスク文化を語る貴重な資源である。根謝銘グスクの保存・整備に向けた調査研究、文化財指定に向けた取組みを推進するとともに、村内外への普及・啓発を図る。
- ・根謝銘グスクは、集落の拠り所として、グスクとシマ（字）のつながりを示す存在でもある。根謝銘グスクと周辺地域で、深くグスクを知り、理解し、広く活用する機会を図る。

⑤自然を敬い、自然と生きた先人たちの技術を継承します

- ・猪垣は自然と共に存した先人たちの技術の象徴ともいえ、周辺の自然環境と一体的に猪垣の保存を図るとともに、その技術に触れるような活用を検討する。
- ・ブナガヤをはじめとする民話や伝承は、豊かな自然を敬い、生きてきた大宜味村の人々の心を示すものである。各シマ（字）の民話や伝承、それに由来する自然環境や民俗をシマ（字）の誇りとして次世代へ継承する。
- ・芭蕉布は沖縄を代表する工芸技術である。芭蕉布生産をはじめ、近年盛んになりつつある陶芸など、大宜味の自然素材から生まれた芸術文化の活用と、その技術を継承する人材の育成を図る。
- ・「大宜味大工」は、厳しい自然からつちかった大宜味の人々の建築技術と勤勉さを象徴し、現在の建設産業を支える基盤となる存在である。その歴史を人々の誇りとして語り継ぎながら、伝統的な建築知識や技術の記録を保存し、木造建築技術の継承、育成を図る。

(3) 今後の歴史文化むらづくりの展望

本事業は、文化財の基礎情報の調査整理をふまえ、歴史文化に対する基本的な考え方をまとめるものであり、今回の成果を受け、大宜味村において歴史文化によるむらづくりへの具体化への取組みが求められる。これは行政だけでなく、各シマ（字）を主体とする地域住民、村内の各団体、さらには郷友会や村外の専門家の参加・支援のもと進めることが望まれる。

今後の歴史文化むらづくりは、以下のような流れで進めていくことが考えられる。

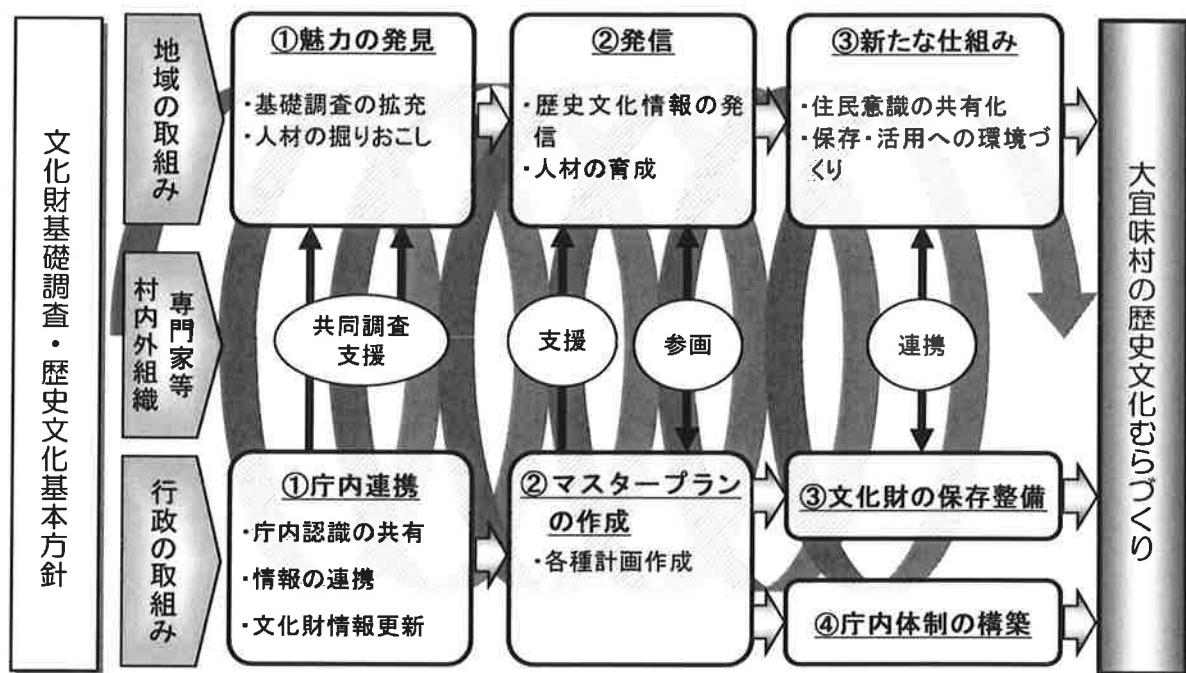


図 歴史文化むらづくりへの展開フロー

1) 地域の取組み

①魅力の発見

■基礎調査の拡充

本事業で作成した基礎調査のリスト及びカルテは、今回が完成版ではなく、今後も新しい資源の追加や更なる歴史情報の充実などを図る必要がある。また、住民へ村内の歴史文化の存在をアピールし、認知してもらうことが重要な作業となる。

今後の展開としては、本事業で収集したリストやカルテをもとに、シマ（字）ごとに住民の参加による地域の魅力の掘りおこしを進めることが考えられる。地域の古老などへの聞き取り調査や現地見学会などを地域の人々の手で行うことが望ましい。こうした地域参加の取組みを通して、資源の発掘だけでなく、人材の発掘も可能である。

■人材の発掘・育成

シマ（字）ごとの歴史文化を語ったり、案内したりする人材の発掘と育成が求められる。

シマ（字）単位の調査の実施時には、歴史文化に関心のある人や地域活動の中心となる人材を発掘する作業も同時に行うが、青年会や小中学生の育成も長期的な視点で必要となる。

展開の考え方

- 小中学生とともに教員や親への参加を呼びかけることが重要である。
- 対象シマ（字）を絞って重点的に行ったり、大学などの調査チームとの協働で行うことも考えられる。
- 字誌作成に 관심が高いことから、字誌を作っていない区には字誌作成の機会として、字誌がある区には更新や続編のきっかけとして、調査を実施する方法も考えられる。
- 意見や調査結果をコーディネートする担当職員や専門家が必要である。
- 住民だけでなく、郷友会をはじめ村外の人材も大宜味村を支援する重要な人材としてとらえる必要がある。
- 「大宜味椿の会」などの団体と協働し、山林と集落との関係を知る散策ツアーなどのプログラムの検討も考えられる。

メニュー(案)

<基礎調査>

- 子供たちによる古老人の聞き取り調査
- 大学の歴史・民俗調査との合同調査
- 大宜味版ムラ・シマめぐり(講座)
- 子供たちによるブナガヤ分布調査
- 古写真をもとにした現地撮影会
- 字別の歴史文化特派員の設置と調査

<人材育成>

- 観光事業と連携した案内人講座
- 大宜味ご当地検定
- 村出身の専門家による講演会

すぐ取り組める活動プラン① シマ（字）の魅力さがし、人さがし

【実現イメージ】

- 重点地区を選択し、月1回ペースの現地学習会を開催する。リストに掲載されている有形・無形の資源の有無や内容を確認し、カルテ化されていない資源については、観察記録を取る作業から進める。
- 最初は専門家や文化財審議員などの支援を受けながら地域めぐりを行うが、慣れてきたらグループ単位の調査を定例化し、リスト化されていない地域の掘りおこしを各自の視点で進めていくことも可能である。
- 各自分が調査・収集した資源は、「シマ（字）自慢のタネ（候補）」として参加者間で発表する（地域の賛同を得て、「シマ（字）自慢の宝」としてリストへ掲載する）。
- 小中学校や婦人会などへの参加を呼びかけることにより、親子ぐるみや教員の参加を含めた地域学習に取組めると考えられる。学校区別に字の持ち回りの調査へも展開できる。
- 定期的な学習会のなかで、歴史文化への関心の高い人材や地域リーダーは、歴史文化を発信し、支える人材の候補として確保する。各字1~2名のキーパーソンを見つけることが望まれる。

【村の役割】

地域の参加を促したり、意見を客観的に集約するコーディネーター的な役割となる。人材が必要なときは、名桜大学をはじめ県内大学の歴史・民俗専攻の学科への調査協力を依頼し、学習会へも参加してもらうなど、大学との連携も視野に入れる。

事例①ムラ・シマ講座（今帰仁村）

今帰仁村歴史文化センターの主催で、1993（平成5）年から始まった講座で、村内の小学4年生を対象としている。月1回の午前中の講座では、毎回、今帰仁村内や山原の字を歩いてまわり、ムラ・シマの歴史や御嶽・神アサギ・井戸などのポイントを調査し、記録している。こうした作業の中から、参加者が自分たちの生活している地域を発見し、誇りに思う機会につながっている。

講座期間：毎年5月～3月（全8回・9月休講）

講座日時：毎月第二土曜日の9時～13時まで

調査費用：500円（保険代のみ）

写真出典：今帰仁村歴史文化センターホームページ



②発信

基礎調査で収集した情報が一元的に把握できるように、冊子化や展示会など形のある成果として発信することが大事である。調査の参加者だけでなく、地域内外の住民に対して情報を発信し、大宜味村の歴史文化への認識アップを図る。情報発信により、新たな情報が追加されることも期待される。

展開の考え方

- ・シマ(字)単位で成果をまとめることにより、各地域の発見や比較につながるものと考えられる。
- ・広報誌や公民館など、既存の情報媒体や施設を活用し、小さな活動から村全体の活動へと展開を図る。
- ・地域参加の基礎調査の取組みについても広報し、調査を実施していない字への意欲を喚起する方法も考えられる。
- ・祭やイベントを活用することで、村外への情報発信も期待できる。
- ・発信するだけでなく、新たな情報を受け入れ、基礎情報を隨時更新する必要がある。

メニュー(案)

<情報整理>

- ・字別調査にもとづく、データベースの更新

<発信>

- ・シマ(字)展の開催
- ・大宜味村の風景、芸能の図画・写真展の開催
- ・広報誌を活用した歴史文化の連載
- ・シマ(字)パンフレットの作成
- ・シマ(字)特派員によるブログ紹介

すぐ取り組める活動プラン② シマ（字）展の開催（シマ自慢の宝発表会）

【実現イメージ】

- ・「おおぎみ展」が開催されているが、そのミニチュア版として各字の公民館で、そのシマ（字）をテーマとした展示会を開催する。
- ・学習会の参加者が主体となって、地域が選んだ「シマ（字）自慢の宝」についての展示会を行う。中学生は新聞形式やスケッチ、大人の場合は写真やカルテをベースにした地域マップなどの企画展示が考えられる。
- ・展示会の会期中に、散策会や古老たちによる語る会などを開催し、学習会で提案された「シマ（字）自慢のタネ（候補）」の価値の共有化、内容を深める。古い写真を提示することで、話題の呼び水となることが多い。この際の解説は、学習会で発掘された人材に任せることで、ガイド的な人材の育成にもつながることも期待できる。
- ・郷友会への参加を呼びかけることで、外から見た地域の魅力を再認識することにもつながる。
- ・複数の字で持ち回りで開催したり、広報誌で連載することで、展示会の気運が高まると考えられる。最終的にはシマ（字）の総合展として、大宜味村全体の展示会の開催が期待される。
- ・伝統芸能の発表会やシマ（字）の特産物の品評会を行い、現代版原山勝負としてシマ（字）単位で競い合う行事も盛り上がると考えられる。

【村の役割】

展示会開催は区と大宜味村の共催で行い、区長や自治会関係者との調整や協力者を募る。その他、展示会の広報支援や出展に関するコーディネート、パンフレットなどの冊子類の印刷についての支援を行う。

事例②字展（南風原町・宜野湾市）

南風原町では、南風原町文化センターが共催、支援により、字展が行われている。各字の公民館で展示会を開催し、その会期中には、歩く会や語る会が開催されるなど、字の歴史文化の情報交換の機会となっている。各字持ち回りで行われていることもあり、字展で収集された情報や資料が、文化センターの展示や字誌編集に活かされている。

宜野湾市では、宜野湾市立博物館にて、毎年 1~2 箇所の字をテーマにした企画展示会が行われている。

③新たな仕組み

地域の魅力を探し、地域での価値の共有化が図られたら、歴史文化を評価し、支えるための、新たな仕組みや環境づくりが必要となる。村内の地域団体をはじめ、郷友会など村外の協力を得ることで、村内の歴史文化を支える環境は広がりと多様性を持つと期待できる。

展開の考え方

- 地域の歴史文化資源を守るために何をすべきか、地域住民で考え、取組むプロセスが重要である。
- 基礎調査にもとづいて、シマ(字)単位の重要資源を評価・認定し、大宜味村指定の文化財として推薦する等、新たな文化財指定制度への展開も期待できる。
- エコツーリズムや体験滞在型観光など、関係する取組みは既に行われており、こうした団体との連携が必要である。
- 郷友会などの大宜味村外との支援体制の構築が望まれる。

メニュー(案)

<環境づくり>

- 大宜味シマ(字)おこしフォーラムの開催
- シマ(字)認定文化財の制定と村指定文化財への推薦制度
- 歴史文化サポーター制度

<活用>

- シマ(字)ブランドの特産品開発
- 自然環境と集落を体感するプログラムの充実

事例③大宰府市民遺産（福岡県大宰府市）

大宰府市では、市民が主体的に文化財に関わっていくために、市民が次世代に伝え守りたいと考えるストーリーやその遺産を「市民遺産」として市民と発見し、育成していく仕組みを構築中である。市民が見つけてきた「市民遺産」は、市民会議などで評価・認定し、市民共有の財産として保存され、市のまちづくり計画へ位置づけられる。現在、大宰府市では条例の制定や、組織体制の構築などを検討中である。

2) 行政の取組み

①庁内の連携

歴史文化資源は、その価値を認識されないまま消失していく傾向にあり、指定・未指定を問わず周辺環境を含めた歴史文化の総合的な保存・活用が必要である。今後、観光や建設・農業部門等と連携を図り、歴史文化遺産を活かした施策の展開を図る。

②マスターplanの策定

本事業の歴史文化基本方針をふまえ、村の歴史文化に立脚したマスターplanとして、歴史文化基本構想・計画の策定が必要となる。近年、景観法にもとづく景観計画が各市町村で策定されつつあるが、大宜味村においても自然や伝統的集落が一体となった歴史的環境の保全については、景観法も視野に入れたむらづくり計画を検討する。

本事業において、根謝銘グスクの存在が大宜味村だけでなく、国頭村や山原地域における重要なグスクであることが位置づけられた。今後は専門的調査や史跡指定の取組みなど、段階的な保存・活用への取組みを図る。

③庁内体制の構築

大宜味村のむらづくりを推進するための庁内体制として、専門的人材の確保や拠点機能の整備、さらには、地域活動を支援できる仕組みの構築が必要となる。

大宜味村では村指定文化財の指定数が少ないとから、字単位での資源の評価、文化財登録への推薦等、村民との協働による文化財保護・活用の支援体制の構築を図る。

地域の人材発掘と育成と同様に、地域の調査活動を支援できる職員や、専門的な調査へ対応できる専門職員の確保を図る。

これまでの調査や収集資料を常時公開できる場や、地域の情報を集約できる場が必要となる。既存施設や民間施設の活用を含め、今後、拠点施設の整備を推進する。

付記. 根謝銘グスク保存・活用の提言

根謝銘グスクについては、基礎調査において重点的に特徴や資源の分布状況を整理しており、それに基づいて、検討委員からの意見を保存・活用の提言として整理した。

(1) 根謝銘グスクの特徴

1) 立地状況

根謝銘グスクは14世紀から15世紀の大型城塞的なグスクで、地元では「上（ウイ）グシク」と呼んでいる。かつての城村の集落背後の標高約100メートルの舌状丘陵端に形成され、丘陵頂上部に古世期石灰岩の割石で石垣を巡らし、尾根筋は掘切で切断している。グスク内には大城御嶽（大グスク）と中城御嶽（中グスク）と呼ばれる御嶽がある。

大城御嶽の前庭が1964（昭和39）年に発掘され、グスク土器、カムイヤキ（亀焼）、青磁、鉄釘、獸骨など14世紀の遺物が出土した。大城御嶽と中城御嶽の崖下にはそれぞれ小規模な貝塚が形成されているので、この地点が居住区だったと考えられる。

『琉球国由来記』には国頭間切見里村の御嶽として「中城之嶽」、大宜味間切城村の御嶽として「小城嶽」が記載されており、それぞれ現在の大城御嶽と中城御嶽にあたる。中城御嶽の隣には木造瓦葺の神アサギが建てられている。

神アサギの庭では毎年旧暦7月にウンガミ（海神祭）が行われる。かつてはノロ主催の年中行事として稻穂祭、稻大祭、束取折目、海神折目、柴指、芋ナイ折目毎にグスクに登っていたが、戦後はウンガミだけとなつた。このほかグスク内には拝泉と火の神があり、掘切はフッキーとよばれ、防備のための逃げ道となっている。

2) 伝承・記録

『球陽』によると、尚巴志が北山王攀安知を攻めるにあたり、国頭按司は羽地按司、名護按司軍とともに中山軍に参戦している。この国頭按司の居城はこの根謝銘グスクだったと考えられている。

15世紀中頃の『海東諸国紀』に載る「琉球国之図」には、ひときわ大きな円形の城塞マークの中に「国頭城」と記載されており、これが根謝銘グスクではないかと考えられている。

『国頭郡志』によると、英祖王の後裔大宜味按司の居城とされるほか、第二尚氏王統が成立するときに、今帰仁グスクの官位にあった仲今帰仁城主一族が根謝銘グスクを頼って逃げたとの伝承もあり、首里や今帰仁の支配層との関係性もうかがえる。

3) グスク内の資源

①首里王府や支配者（両総地頭）に由来する資源

■城ノロ殿内

グスクの西側に位置する。城ノロは、謝名城、喜如嘉、饒波、大宜味を管轄したノロで、殿内には火の神（ノロ火の神、脇ノロ火の神）と神棚が祀られている。城（グスク）のウンガミでは、まずここで集合し、ノロと根神がその火の神をお通し神として、まつりを始めることを山の神、海の神、野の神、各村々の神等へ報告する。その次にヌルガンス（ノロ元祖）と神棚とを拝み、グスクへ向かう。



城ノロ殿内内部

■地頭火の神

かつては神アサギの西側にあったが、80年前頃に移動したとされる。祠は東側を向き、中に石3個の火の神が祭られている。

ウンガミでは、神アサギでのまつりを始める前に、ノロ、根神、勢頭神が祈願を行う。それが済むと同じ場所で向きを北東に変え、中城御嶽にも同様の祈願を行う。さらに、喜如嘉の方角に向かい、七滝拝所への祈願が行われる。

火の神は政治の重職にある者の職掌に関わる火の神（地頭火の神、夫地頭火の神）、神職に関わる火の神（ノロ火の神、根屋火の神）、各家庭でまつられる火の神があるが、この火の神は前者にあたる。グスクの支配者だった国頭按司が首里へ移った後も火の神だけは残され、地域で代わって拝むようになった事例のひとつである。



地頭火の神



中城御嶽や喜如嘉への祈願

■ウドゥンニーズ・トゥンチニーズ

御殿、殿内の火の神が祀られた祠がある。祠は東方に向いている。その横の庭は「ウドゥンマー（御殿庭）」と呼ばれる。

『宮城真治民俗調査ノート』（1927年）によると、御殿と殿内の場所（屋敷地）が記され、御殿敷地に火の神が祀られているのがみえるため、現在の火の神は統合されたものと考えられる。現在のウンガミでは、かつて仲庭（ナハマー）で謡われていたオモロをこの場所で踊り、招いた神々を



ウドゥンニーズ・トゥンチニーズ

送る行為を行っている。

■按司墓

グスクの南側にある墓で、「按司墓」と呼ばれている。中城御嶽の骨を納骨したともいわれる。按司墓は、グスクを統治していた人物の墓とされるが、多くは近世期の家譜作成段階で首里の士族層が先祖を正当化するために出身地の古墓を整備する傾向があり、この墓もそのひとつではないかと考えられている。



按司墓

■ウドゥンガー

2対の井戸で貴重な水源地である。拝所としても大事にされており、豊年祭の道ジュネーの順路にも含まれている。



ウドゥンガー

②集落（共同体）の拝所

■中城御嶽

『琉球国由来記』に「小城嶽」と記されている城村の御嶽で、現在は謝名城の拝所となっている。左縄が張り巡らされ、御嶽の中央には祠が設置されている。



中城御嶽

■城（グスク）の神アサギ

謝名城集落の神アサギである。『琉球国由来記』には神アサギについては記されていない。現在は瓦屋根のある建物で、壁や床があり、一般的な神アサギとは異なったつくりとなっている。ウンガミでは神アサギの内部で神人が座り、神酒を酌み交わした後、東側の広場で祭祀が行われる。

山原地域には羽地（親川）グスク、名護グスク、今帰仁グスクにも同様にグスク内に神アサギがあったといわれる。また奄美諸島の加計呂間島にも同様の形態の神アサギがある。



神アサギ

■大城御嶽（ウフグシク）

『琉球国由来記』に「中城御嶽」と記されている屋嘉比ノロの管轄する御嶽で、現在は田嘉里の拝所となっている。田嘉里は屋嘉比ノロの管轄下にあるため、城ノロの主催する城のウンガミには参加しない（大城御嶽を拝んでから、屋嘉比の神アサギで祭祀を行う）。



大城御嶽

③その他の資源

■上城ガ一

アサギ庭から掘切に向かう途中にある井戸跡。石囲いだけが残されている。井戸跡の前には香炉が置かれている。

この上城ガ一に対し、城集落には中川（ナハガ一）、下川（サンハ一）跡がある。



上城ガ一

■馬浴シガ一

馬が水浴びできるくらい水が豊富であったことを示して名づけられたのではないかと考えられている。

香炉が設置されているだけで、現在水はない。



馬浴シガ一

■アザナ（物見台）

物見台跡と考えられる。ガナハナノ嶽（根謝銘の御嶽）が対面に見え、煙を焚いて合図をしていたといわれる。



夫婦ガ一

■夫婦（ミートウ）ガ一

二つの石囲い跡（井戸跡）があるためそのように呼ばれる。現在は水もなく土が埋まっている。前田国男氏によると 40 年ほど前には水もあったという。クバの木もあったが枯れている。

■グシクのビジュル

グシクの入口に所在し、願い事や占い事をする靈石。持ち上げられるか持ち上げられないかで吉凶を占う。



■仲庭（ナハマー）

ウンガミのときに神人が籠にのった場所である。グスクでの儀式のあと、神人たちは輪になって「ねらや潮や、さすい港潮や、満ちゆい、いそじ早めり」ではじまるオモロを謡いながら踊っていた。ニライカナイへ神を送るオモロだが、現在は、ウドゥンニーズ・トゥンチニーズの祠の前で神々を送っている。

グシクのビジュル



仲庭

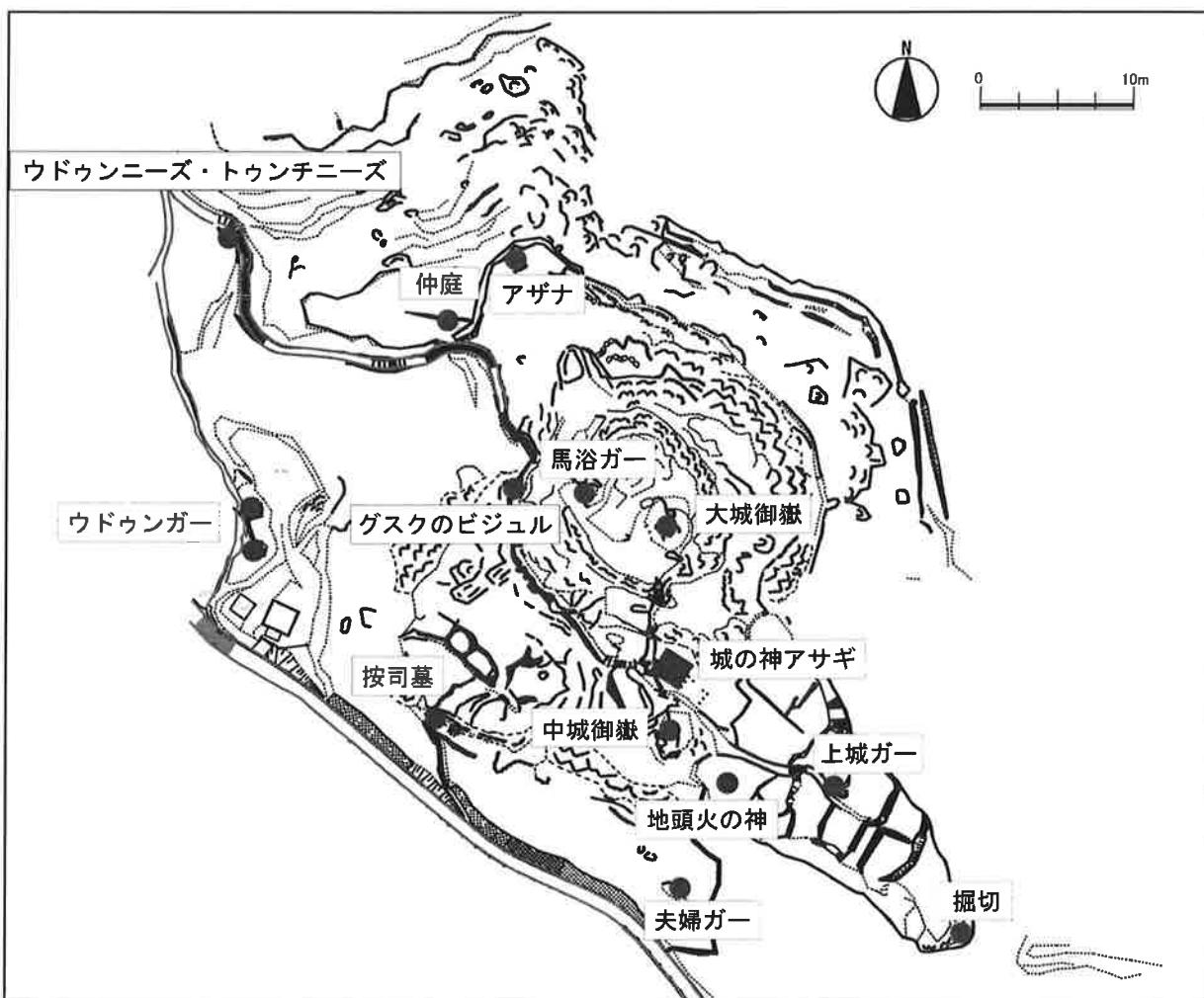


図 根謝銘グスクの資源分布

4) グスクと集落との関係

根謝銘グスクには、城ノロの管轄する中城御嶽、屋嘉比ノロの管轄する大城御嶽があり、2人のノロの管轄するグスクである。仲原弘哲氏によると、本来、根謝銘グスク全体が御嶽であり、それに寄り添うようにあった集落の御嶽であり、大城御嶽や中城御嶽は御嶽のイベに相当するという^{※4}。謝名城（城、根路銘、一名代）、田嘉里（屋嘉比、親田、見里）は、根謝銘グスクと深い関わりのある集落であり、この2つの字とグスクとの関係性は次のように位置づけられる。

※4:『なきじん研究 16号』2009年 今帰仁村歴史文化センター

①謝名城との関係

根謝銘グスクと謝名城とは、城のウンガミをテーマとした関係性で位置づけることができる。城のウンガミは、城ノロが管轄する謝名城、喜如嘉、饒波、大宜味の集落の神役の参加により、グスク内で山や海の神を迎える、喜如嘉の浜で「ナガレ」の儀式を行う（現行祭祀は潮崎で行う）。そうしたことから、根謝銘グスクから喜如嘉の浜にいたるウンガミの祭祀世界の一体性が確認できる。

根謝銘グスクと城のウンガミに関わる歴史文化資源

城ノロ殿内/城の神アサギ/地頭火神/中城御嶽/仲庭/ウドゥンニーズ・トウンチニーズ
喜如嘉根神屋/喜如嘉神アサギ(ヒンバームイ)/浴川(アミガー)/喜如嘉の浜

注：ウンガミの変遷を考慮し、新旧の拝所を抽出

参考：城のウンガミにおけるルート・関連拝所（『大宜味村誌』1934（昭和9）年の記述）

時間	場所	内容
前夜	喜如嘉根神屋	大ノロ、若ノロ（又はピラムト神）の祈願、ハンサガの式、一夜を過ごす。
当日	城の神アサギ	神人の朝ヌブイをし、遊び神（ピラムト神）が神踊りの練習を行う。
	城のノロ殿内	神人が集合し、白衣にてグスクに登る。
	城の神アサギ	神人が神アサギと庭に座し、酒肴を供え、神踊（4回）を行う。
	城ノロ殿内	大ノロ、若ノロ、海の神は遊びピラムト神とウムイを唱えノロ殿内へ帰る、火神前でも同じ歌をうたう。
	城の神アサギ	神アサギに戻り祈願を行う。
	喜如嘉の根屋	供物（猪・酒・鼠等）を供に担がせ、遊びピラムト神、ノロ、若ノロは海の神をお伴して喜如嘉の根屋に移動し、ウムイを謡う。
	浴川（アミガー）	同じくウムイを謡う。
	喜如嘉の浜	供物（猪・酒・鼠等）を捧げ、海と山に拝し、ナガレを行う。
	喜如嘉の根屋	喜如嘉の根屋で祈願し、一夜を過ごす
翌日	喜如嘉の神アサギ	ピラムト神及び喜如嘉の神人が集合して神酒を捧げ、祭の終わりを告げる。城の神人は籠で城のアサギへ帰る（神アサギは現存しない）。
	各字	各字で臼太鼓や村芝居など余興を行う。

出典：『大宜味村史 資料編』1977年

②田嘉里との関係

根謝銘グスクと田嘉里とは、グスクと港をテーマとした関係性で位置づけができる。

田嘉里の屋嘉比については、『おもろさうし』(巻13)に、貿易港である屋嘉比港を讃えた状況が触れられており、根謝銘グスクの貿易港としての関係がうかがえる。喜如嘉川も港として利用できたが、屋嘉比川では、根謝銘グスクの東麓の内陸部まで舟を寄せることができたため、この地が便利だったと考えられる。

また、大城御嶽で祭祀を行う屋嘉比ノロは、田嘉里（屋嘉比、親田、見里）と国頭村浜を管轄しており、行政的に分断されながらも、国頭間切時代の祭祀区分を継承する地域の一体性が確認できる。

『おもろさうし』(巻13-176)

しよりゑとの節

- | | |
|-------------|------------------|
| 一 やかびもり おわる | (屋嘉比社にいらっしゃいます) |
| おやのろは たかべて | (親のろ神女はお祈りいたします) |
| あんまぶて | (我々を守って) |
| このと わたしよわれ | (この海を渡し給え) |
| 又 あかまるに おわる | (赤丸におわす) |
| てくのきみ たかべて | (てくの君はお祈りいたします) |

根謝銘グスク、屋嘉比港、国頭間切に関わる歴史文化資源

大城御嶽/屋嘉比ノロ殿内/田嘉里のアサギ/屋嘉比川/屋嘉比港/浜集落/国頭間切番所跡



根謝銘グスクから喜如嘉の浜への眺め



根謝銘グスクから屋嘉比港(浜集落)への眺め

(2) 保存・活用への提言

1) 保存・活用に向けた取組みフロー

根謝銘グスクは本島最北のグスクとして注目されてきたが、客観的に評価できる考古・歴史資料がこれまで全くなかった。平成21年度に根謝銘グスクの範囲確認地形測量調査が行われており、測量調査によって根謝銘グスクの地形情報を明らかにしていくことで、ようやくグスクの全体像を知る第一段階に入ったところである。今後は地図情報をもとに発掘調査を行い、グスクの興亡について詳細な情報を収集・分析していく作業が必要になる。さらにその調査・研究を経て、グスク全体の保存・活用が検討できるようになる。

グスク全体の保存・修復整備は、遺構調査も含めて段階的に取り組まれていくものである。まず、村の財政状況に配慮した効率的な予算措置が必要となる。村独自での調査や史跡指定への取組みを行う際には、考古学専門の職員等の人材配置が前提となり、それとともにグスクの調査や整備を審議する調査指導委員会を設置し、定期的に指導を得ることが有意義だと考えられる。地域内外に対し、調査結果の公開や部分的な活用の機会を設け、グスクを地域全体で保存・活用する環境を段階的に整えていくことも重要である。

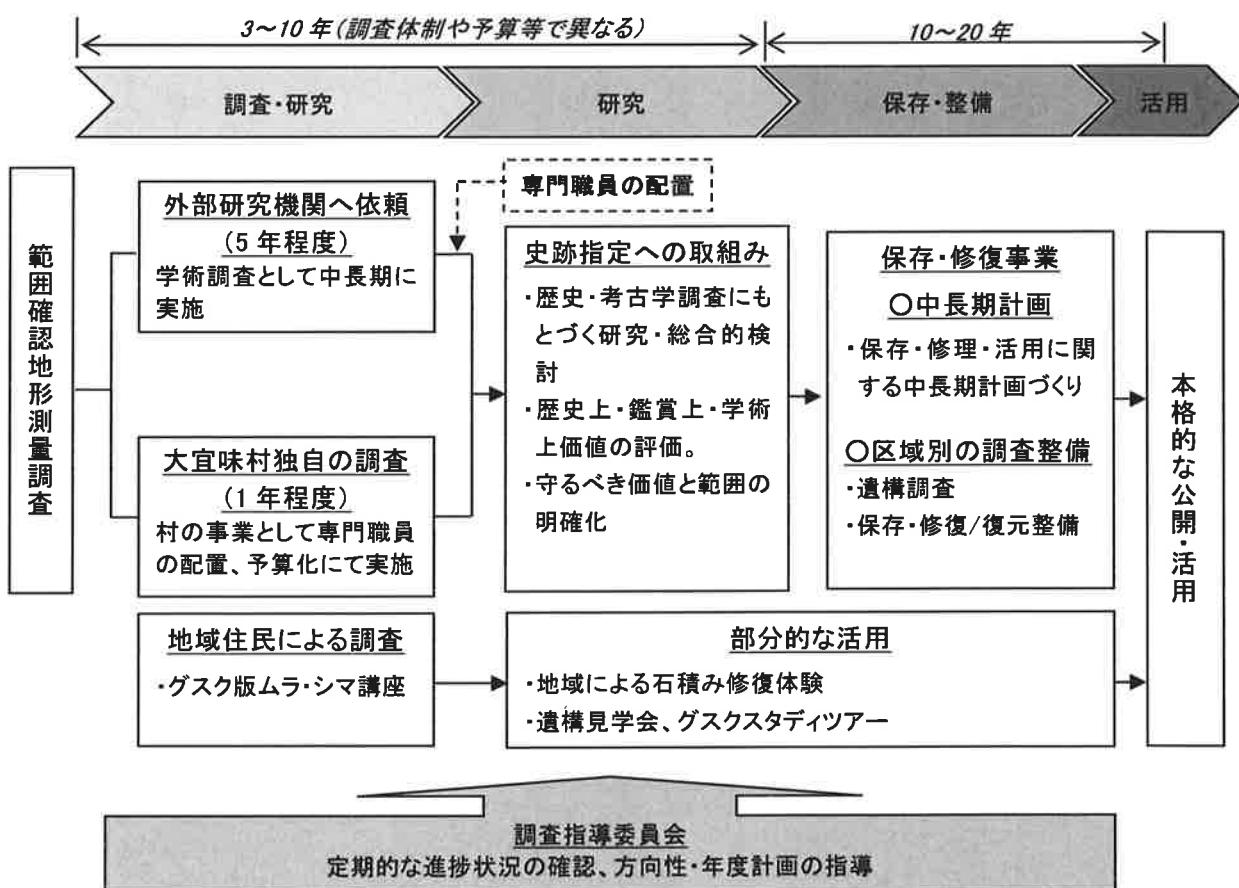


図 根謝銘グスクの文化財としての保存・活用フロー

2) 保存・整備・活用の考え方について（委員意見）

①今後保存して欲しい視点

- 根謝銘グスクの神アサギなどの建造物については、2人のノロがグスク内の祭祀を管轄したという歴史文化的評価やウンガミ行事として現在の祭祀として生き続けている点から保存すべきと考えられる。そのためには裏付けとなる学術的な確認作業が必要である。
- ウンガミ行事で喜如嘉の先にある今帰仁を拝む行為のように、グスクから遠方を見る風景もひとつの重要な資源としてとらえ、保存していく必要がある。



ウドゥンニーズからみる喜如嘉方面への眺め

②体制づくり・人材育成への視点

- グスクの保存整備は中長期的な事業だが、一方で人材を育てる期間が十分に取れる側面もある。史跡指定への取組みや整備事業に着手する頃には、現在の中学生が大学生・社会人となり、村の貴重な人材になると想定される。小中学生に対して、今の段階からグスクや歴史文化へ関心を持つような気運を盛り上げ、育てていくことで、村出身の専門職員が確保できるものと考えられる。
- 県内には多くのグスクが分布しており、他市町村の専門職員に協力・支援を仰ぐことも重要である。同規模人口や世界遺産等のグスク所在市町村に対し、調査や整備のノウハウを学ぶこと聞くことも重要である。
- 山原一帯の市町村でタイアップし、調査や整備体制を組んでいくことも考えられる。国頭村はもとより、今帰仁村や名護市などへの調査等の連携を依頼し、その後、根謝銘グスクを例にして他のグスクへシフトしていくことも十分対応できると考えられる。

③今後の活用について

- 根謝銘グスクの意義や各資源の分布について、地域の人と実際に歩きながら、グスクに触れる機会を創出することが大事である。5年間の継続でかなりの実績になると考えられる。
- ウンガミについても、現地で語るだけでなく、スライドなどでかつての風景を見せる作業も必要である。
- 謝名城との関係はウンガミなどで比較的知られているが、田嘉里側との関係をもっとアピールし、盛り上げていく気運が必要である。
- 国頭間切番所がグスクにあった可能性があり、国頭文化の拠点として、それを歴史的なテーマとしてPRすることもひとつの活用と考えられる。

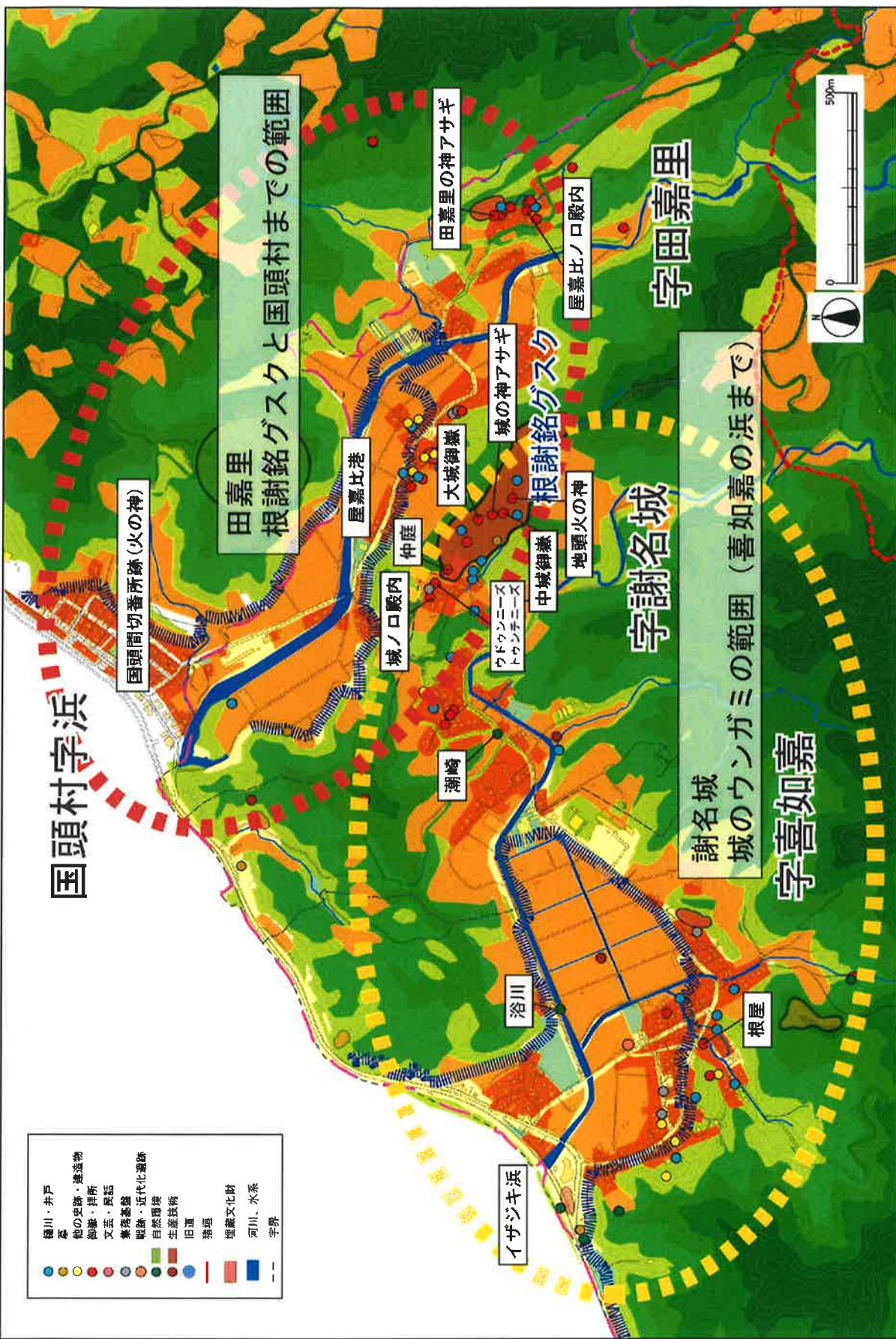


図 根謝銘グスクと周辺の歴史文化資源の保存・活用ゾーンの例示

注:当時の海平面を表現するため、5m ラインを青破線で表示

第2部 大宜味村の文化財カルテ



1 文化財基礎調査の目的と方法

(1) 基礎調査の目的と考え方

本村の文化財は、指定文化財のほか、自然環境や遺跡発掘などの一部の調査は行われてきたが、村全体を網羅した調査はこれまで行われておらず、文化財台帳も未整理の状況である。そのため、地域の人々にとっては、文化財の歴史的背景やそれぞれの資源とのつながりについて知る機会が少なく、また、行政においても文化財の保護やむらづくり施策に展開できないなどの課題があった。

本調査は、村内にある指定文化財および未指定の文化財について、文献資料調査、現地調査等によって基礎情報を収集し、整理することで、文化財を知り、理解する基礎条件を整えることを目的としている。文化財に対して地域の人々が親しみを深めるためには、文化財の特徴や歴史的背景を分かりやすく説明することが重要であり、情報発信を行うことで新たな文化財の発見につながることが期待できる。

調査では、本村における「歴史文化」、「自然」、「生業」、「まつり」などといった様々な地域資源の情報を収集し、その一部についてはカルテとして整理した。しかし、今回の成果は調査員による村外部の視点によって整理したものである。今回の調査を基礎に地域住民の目線による情報や価値付けを加えることで、様々な評価や歴史文化像が発見できると考えられる。そこで、本調査で作成したリストやカルテは、地域住民や村外の人々が大宜味村の文化財を知り、理解するための手がかりやたたき台として活用できるように「暫定版」として位置づける。

今後は地域住民の視点による文化財の掘りおこしや評価、情報の更新といった取組みによって、地域住民の手による情報の追加や更新が行われることが期待される。

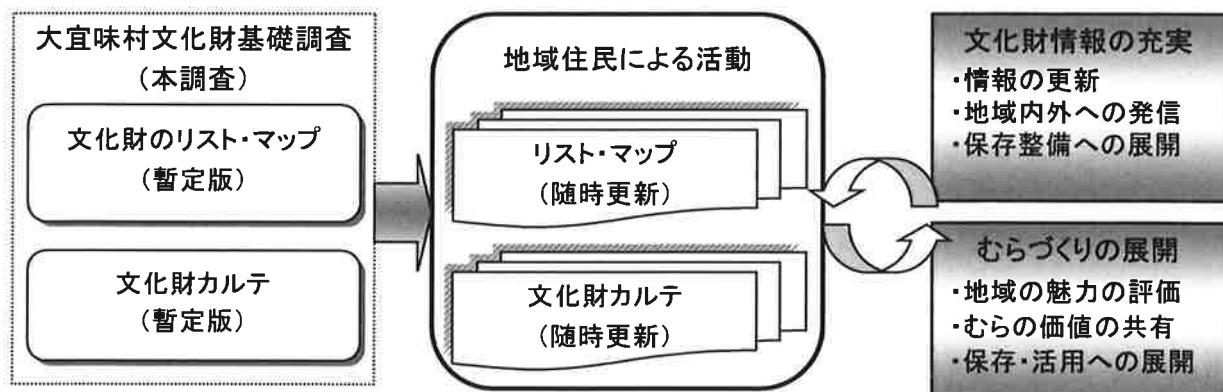


図 文化財基礎調査の展開イメージ

(2) 文化財調査の方法

本事業では、文化財のリスト・マップ化と、代表する文化財のカルテ化を行った。

1) リスト・マップ（暫定版）

文献調査や区長アンケート等において確認された文化財について、リスト化し、位置を地図に示した。リストは普段見過ごされがちな資源を体系的に掘り起こしていくことを目的としており、文化財の価値や種類などの制限は設けず、消失したものを含めて確認できるものはリストアップするように努めた。その結果、本調査では448件の資源がリスト化された。リストについては、別冊として整理している。

2) 代表文化財のカルテ化（暫定版）

文化財は、その性質や規模、歴史的背景などにより情報量が大きく異なるため、すべてを等しく調べることは難しい。本調査では、指定文化財をはじめ各地区を代表すると考えられる文化財を100件程度に絞り込み、重点的な情報の整理を行った。調査にあたっては、文献調査および現地調査を行い、共通する様式（文化財カルテ）として整理した。本書には文化財カルテの一部を掲載し、他は別冊として整理している。

(3) 文化財の分類

文化財保護法における指定・登録文化財の類型は、有形文化財（建造物・美術工芸品）、無形文化財（芸能・工芸技術）、民俗文化財（無形・有形）、記念物（史跡・名勝・天然記念物）などに区分されている。この類型は文化財保護の観点からは機能すると考えられるが、地域の歴史文化の特徴や歴史的経緯をとらえるには、大宜味村独自の文化財の類型（タイプ）化が必要と考えられる。

本調査ではリスト化された文化財の特徴を踏まえ、以下について、大宜味村文化財類型として、各資源の関連性やグルーピングに利用した。

表 大宜味村文化財の類型(タイプ)

類型	文化財の例
①グスク	グスク跡
②御嶽・拝所	御嶽、殿、火の神等の拝所
③樋川・井戸	共同井戸、拝井泉、歴史的水路、クムイ
④旧道	宿道、歴史の道
⑤集落基盤	集落を構成する資源。 石畳、石垣、並木、チンマーサー、石獅子、古民家、神道
⑥墓	神御墓（礼拝墓）、門中墓、歴史的人物の墓
⑦埋蔵文化財	貝塚、住居跡、生産遺跡など各種遺跡・遺構（城跡は除く）、遺物散布地、出土地 ※出土遺物（出土遺物）は、遺跡と一緒に概略を整理。

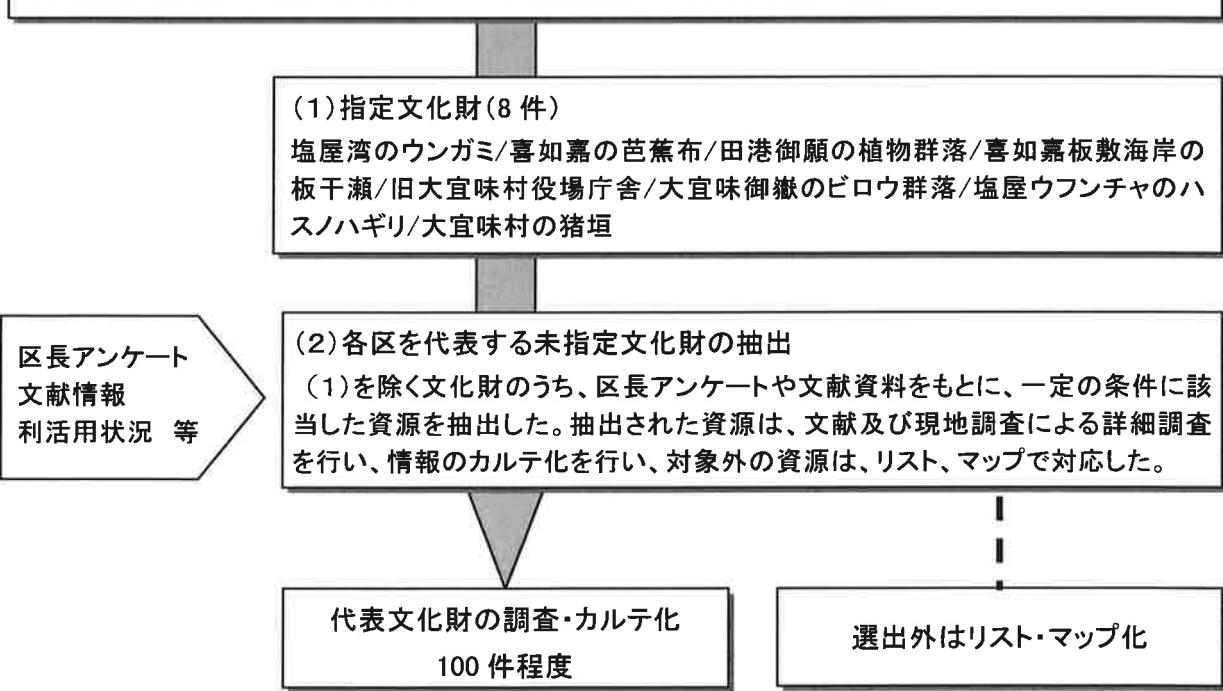
類型	文化財の例
⑧戦跡・近代化遺産	戦争遺跡、近代化遺産、慰靈碑・忠魂碑、天皇関係記念碑
⑨他の史跡・建造物	上記に含まれない史跡や建造物、石碑や銅像等
⑩自然環境	動物、植物(巨木、群落等)、地質、山、川、
⑪美術工芸	絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、陶芸、染織、漆芸、金工、木工 ※品物(有形)だけでなく、製作する技術(無形)も含む
⑫文物資料	古文書、考古資料(遺物)、歴史資料 ※考古資料は特徴的なものがあれば拾い上げ、基本的には埋蔵文化財と一緒に整理する。
⑬芸能	組踊、村芝居、民謡、舞踊
⑮伝統祭祀	村落祭祀、儀礼・行事
⑯口承文芸	歌謡、民話、昔話、方言 ※方言は、各資源の呼称としてそれぞれ位置づけていく。
⑰生産技術	農耕習俗、漁撈習俗、農地、漁場、その他生産活動に関わるもの

(4) カルテ化抽出の考え方

カルテ対象の資源は、指定文化財のほか、未指定文化財については、いくつかの評価指標を設け、それらの条件をもとに、大宜味村の各字を特徴づける代表資源として絞り込んだ。

大宜味村の文化財(暫定件数 448 件)

グスク、御嶽・拝所、樋川・井戸、旧道、集落基盤、墓、埋蔵文化財、戦跡・近代化遺産、他の史跡・建造物、自然環境、美術工芸、文物資料、芸能、伝統祭祀、口承文芸、生産技術



1) 大宜味村指定文化財（8件）

カルテ化の対象は、文化財指定を受けている資源を優先的に整理した。これらは、大宜味村を代表する文化財として、地域内外にその価値が知られており、今後の整備や活用を考える上で、共通の様式でカルテ（台帳）化を図る必要があるからである。

2) 各字を代表する文化財

未指定文化財のうち、各字を代表する文化財については、以下の考え方のもとに抽出した。まずカルテ化の条件として3つの条件について、参考資料や区長アンケートをもとに選出した。その選出の際には、地域バランスなどにも配慮し、一部調整を加えている。

＜選出条件＞

- ①学術的価値を持つものとして専門家の評価を得ていること。
- ②地域で重要度が高く、祭祀や伝統芸能の場などで利活用されていること。
- ③資源を価値づける祭祀・芸能の由来、史実や伝承、生業行為など、歴史的背景が確認できること。

＜調整事項＞

- ④便宜上、戦前までに形成され、かつ現存しているものを優先的選抜に選出する。
- ⑤各字から最低1件は選出する。
- ⑥埋蔵文化財は報告書が刊行されているため、「喜如嘉貝塚」を除き対象外とする。

①学術的価値による評価

これまで学術調査等で一定の評価を受け、大宜味村において台帳化が必要とされている文化財を対象とした。「大宜味村文化財保護委員会資料」をもとにカルテ化しやすい項目の整理を行い抽出した。また、なかでも根謝銘グスクについては、グスク内の資源についても個別カルテとして整理した。

②地域での重要度や利活用

地域で重要でかつ利活用されているもの、または内外からの認知度がある資源を抽出する。地域の重要度や利活用は区長アンケートや『大宜味村ふるさと発見ガイド』（2003年大宜味村商工会）への掲載資源などを参考とした。

③祭祀・芸能、史実伝承、公共性との関係

文化財の価値を確認するため、特徴的な祭祀や芸能との関連性や史実や伝承、民話など資源の由来について評価した。さらに、集落単位で継承された資源として公共性も重視した。

表 評価②③の考え方

評価指標	評価の方法、考え方	評価ポイント
ア. 区長評価及び 地域の認知度	区長へのアンケート調査で、「重要度」と「利活用」がともに「〇」と選択しているものを選択。	・区長アンケートによる選出

評価指標	評価の方法、考え方	評価ポイント
イ. 祭祀や芸能	ウンガミやウスデーク、ハーリーなど、地域を代表する祭祀や芸能に関連するものを選択。	・祭祀・芸能に関連する場所やもの
ウ. 史実や伝承	地域の歴史や伝承、民話等、資源の由来や履歴が分かる資源を選択。	・伝承や由来のあるもの
エ. 公共性	アイウで選出されたもののうち、集落において公共性が高いものを選択。	・集落の共同利用や信仰の対象であること

④戦前までに形成され、かつ現存しているもの

地域を代表する文化財としては、時間的な経過もその価値として判断できる。本調査では便宜上、戦前までの時代設定とした。そのため、戦跡や慰霊塔、歌碑など戦中・戦後のものはカルテとしては整理対象外とした。また有形の資源については、消失しているものについても、今回は対象から外している。

⑤各字から1件を選出

新たにできた字（押川、大保、江洲等）については、地域バランスに配慮し、戦後に建造されたものを含め、最低1件は選出した。

⑥埋蔵文化財を除く

埋蔵文化財は、現地での確認ができないこと、現在把握されている資源については発掘報告書で記録されていることから緊急性を伴わないことから、①に該当する喜如嘉貝塚を除き、今回は対象外とした。

表 カルテ化した文化財一覧

	所在地	調査名称	分類	備考
1	喜如嘉	喜如嘉の芭蕉布	伝統工芸	国指定文化財
2	田港	田港御願の植物群落	自然環境	国指定文化財
3	塩屋他	塩屋湾のウンガミ	伝統祭祀	国指定文化財
4	喜如嘉	喜如嘉板敷海岸の板干瀬	自然環境	県指定文化財
5	大宜味	大宜味御嶽のビロウ群落	自然環境	県指定文化財
6	大兼久	旧大宜味村役場庁舎	戦跡・近代化遺産	県指定文化財
7	村全域	大宜味村の猪垣	生産技術	村指定文化財
8	塩屋	塩屋ウフンチャのハスノハギリ	自然環境	村指定文化財
9	田嘉里	田嘉里の神アサギ	御嶽・拝所	
10	田嘉里	屋嘉比ノ口殿内	御嶽・拝所	
11	田嘉里	クガリヤマ	御嶽・拝所	
12	田嘉里	ブナガヤの神屋	御嶽・拝所	
13	田嘉里	倉下(クラサ)	御嶽・拝所	
14	謝名城	根謝銘グスク	グスク	
15	謝名城	大城御嶽(ウフグシク)	御嶽・拝所	根謝銘グスク内
16	謝名城	城の神アサギ	御嶽・拝所	根謝銘グスク内
17	謝名城	中城御嶽(ナカグシク)	御嶽・拝所	根謝銘グスク内
18	謝名城	地頭火の神	御嶽・拝所	根謝銘グスク内
19	謝名城	グシクのビジュル	御嶽・拝所	根謝銘グスク内

	所在地	調査名称	分類	備考
20	謝名城	上城ガー	樋川・井戸	根謝銘グスク内
21	謝名城	馬浴みし井戸	樋川・井戸	根謝銘グスク内
22	謝名城	夫婦ガー(ミートウガー)	樋川・井戸	根謝銘グスク内
23	謝名城	按司墓	墓	根謝銘グスク内
24	謝名城	仲庭	他の史跡・建造物	根謝銘グスク内
25	謝名城	ウドゥンニーズ・トウンチニーズ	御嶽・拝所	
26	謝名城	城(グスク)ノロ殿内	御嶽・拝所	
27	謝名城	ウドゥンガー	樋川・井戸	
28	謝名城	謝名城の豊年祭	芸能	
29	謝名城	城(グスク)のウンガミ	伝統祭祀	
30	謝名城	根差部親方の神屋	御嶽・拝所	
31	謝名城	潮崎(ウスザキ)	他の史跡・建造物、自然環境	
32	喜如嘉	喜如嘉七滝	御嶽・拝所	
33	喜如嘉	喜如嘉貝塚	埋蔵文化財	
34	喜如嘉	七滝拝所周辺の植物群落	自然環境	
35	喜如嘉	喜如嘉の臼太鼓	芸能	
36	喜如嘉	喜如嘉のエイサー	芸能	
37	喜如嘉	大山墓ならびに喜如嘉墓のフクギ群	自然環境	
38	喜如嘉	ヒンバームイ	御嶽・拝所	
39	饒波	饒波のお宮(カミヤー)	御嶽・拝所	
40	饒波	ムラの火の神(仲田)	御嶽・拝所	
41	大兼久	大兼久のお宮(クサティ、フサティ)	御嶽・拝所	
42	大兼久	大兼久ハーリー	伝統祭祀	
43	大宜味	大宜味の板干瀬	自然環境	
44	大宜味	根神屋(ニガミヤー・ウフヤー)	御嶽・拝所	
45	大宜味	大宜味アサギマー	御嶽・拝所	
46	大宜味	大宜味御嶽(大宜味ウガミ)	御嶽・拝所	
47	大宜味	根屋(ニーカー)	御嶽・拝所	
48	根路銘	加那筑の力石	他の史跡・建造物、口承文芸	
49	根路銘	根路銘のお宮(ハミヤー)	御嶽・拝所	
50	根路銘	根路銘のウンガミ	伝統祭祀	
51	根路銘	トウクジョウ(アジガミ、トクゾー)	御嶽・拝所	
52	根路銘	ティサガ森	御嶽・拝所	
53	上原	上原のお宮	御嶽・拝所	
54	塩屋	森川之子祠(ムイカーヌシ一祠)	御嶽・拝所	
55	塩屋	神門(ハーミンゾー)	御嶽・拝所	
56	塩屋	ハニクバマ	御嶽・拝所、自然環境	
57	塩屋	ウフチダキ	御嶽・拝所	
58	塩屋	塩屋の神アサギ	御嶽・拝所	
59	塩屋	根神屋(ニガミヤー)	御嶽・拝所	
60	塩屋	兼久井泉(ハニクガー)	樋川・井戸	
61	塩屋	大川井泉(ウッカーガー)	樋川・井戸	
62	塩屋	蔵井泉(クラガー)	樋川・井戸	
63	塩屋	穴井泉(アナガー)	樋川・井戸	
64	塩屋	御拝川(ウガミガー)	樋川・井戸	

	所在地	調査名称	分類	備考
65	塩屋	シナバ(青年浜)	自然環境	
66	塩屋	ハーミンゾー(神門)	御嶽・拝所	
67	屋古	ハーリーガミ	御嶽・拝所	
68	屋古	屋古のクサティガミ	御嶽・拝所	
69	屋古	屋古の神アサギ	御嶽・拝所	
70	屋古	前田井戸(メーダガー)	樋川・井戸	
71	屋古	ヌルガー	樋川・井戸	
72	屋古	大屋井戸(ウフヤーガー)	樋川・井戸	
73	屋古	マンカーガー	樋川・井戸	
74	屋古	ウフヌハー(ウフヌガーパー)	自然環境	
75	田港	ダチ川	樋川・井戸、他の史跡・建造物	
76	田港	田港ノロ殿内	御嶽・拝所	
77	田港	イビナ嶽(オミヤ)	御嶽・拝所	
78	田港	田港の神アサギ	御嶽・拝所	
79	田港	大屋(ウフヤ)	御嶽・拝所	
80	田港	ウヘーヤ(ウフェ屋)	御嶽・拝所	
81	田港	ヌルガー	樋川・井戸	
82	田港	前田井戸(メーダガー)	樋川・井戸	
83	田港	メーレーバカ(眼洗い墓)	他の史跡・建造物、墓	
84	押川	押川のお宮	御嶽・拝所	
85	押川	マエダガー(メーダーガー)	樋川・井戸	
86	白浜	サバガー	樋川・井戸	
87	白浜	ピンカガー	樋川・井戸	
88	大保	大保のお宮(クサティ)	御嶽・拝所	
89	大保	イクサンザキ(戦ん崎)	他の史跡・建造物	
90	宮城	宮城のお宮	御嶽・拝所	
91	江洲	江洲のお宮(ムラガミ)	御嶽・拝所	
92	津波	森川之子(森川子遺跡)	御嶽・拝所	
93	津波	津波の神アサギ周辺の植物群落	自然環境	
94	津波	津波・宮城のトウケーの板干瀬	自然環境	
95	津波	平南川の滝(タ一滝、アサガ滝)	自然環境	
96	津波	津波の豊年祭	芸能	
97	津波	津波グスク	グスク	
98	津波	津波の神アサギ	御嶽・拝所	
99	津波	シマウフェーフ	御嶽・拝所	
100	津波	津波のノロ殿内	御嶽・拝所	
101	津波	トウヌ	御嶽・拝所	

2 大宜味村の文化財カルテ

本書では文化財基礎調査で整理した文化財カルテ（暫定版）のうち、以下に文化財について抜粋掲載する。

掲載順は、指定文化財は指定年順、未指定文化財は字別である。

(1) 指定文化財

1. 喜如嘉の芭蕉布	9
2. 田港御願の植物群落	11
3. 塩屋湾のウンガミ	13
4. 喜如嘉板敷海岸の板干瀬	15
5. 大宜味御嶽のビロウ群落	17
6. 旧大宜味村役場庁舎	19
7. 大宜味村の猪垣	21
8. 塩屋ウフンチャのハスノハギリ	23

(2) 未指定の文化財

9. 田嘉里の神アサギ	25
10. 根謝銘グスク	26
11. 城（グスク）の神アサギ	28
12. 城（グスク）のウンガミ	29
13. 喜如嘉貝塚	31
14. 塩屋の神アサギ	32
15. 屋古の神アサギ	33
16. 田港の神アサギ	34
17. 津波・宮城のトウケーの板干瀬	35
18. 津波の神アサギ	36

大宜味村文化財カルテ

番号 喜如嘉01

名称 喜如嘉の芭蕉布

ふりがな きじよかのばしようふ

類型(タイプ) 時代区分
美術工芸

解説文

芭蕉布とは沖縄特産の糸芭蕉の纖維を織った布で、昔から庶民の普段着として各家庭で盛んに織られていた。しかし、戦後の生活様式の変化により使用量が減り、現在では大宜味村の喜如嘉でのみ生産されている。一時は途絶えそうになった芭蕉布は、人間国宝となった平良敏子さんをはじめとする幾人かのムラの婦人たちの手によって復活した。

所在地

字喜如嘉

写真1



写真2



主な参考文献

- ・『琉球芭蕉布(上下巻)』(1972・1973年/辻合喜代太郎/はくおう社)
- ・『芭蕉布一生産と歌』(1974年/平良景昭/民具の家)
- ・『芭蕉布と平良敏子—沖縄県立博物館企画展図録』(1993年/沖縄県立博物館友の会)
- ・『喜如嘉誌』(1996年/喜如嘉誌刊行会)
- ・『平良敏子の芭蕉布』(1998年/平良敏子他/日本放送協会)

備考

写真は「芭蕉布の里」(大宜味村役場)より

大宜味村文化財カルテ

番号 喜如嘉01

名称 喜如嘉の芭蕉布

ふりがな きじょかのばしょふ

類型(タイプ)

美術工芸

時代区分

文献等の解説①

芭蕉布はイトバシヨウの纖維を糸にして織ったもので、軽くさらりとした肌ざわりと、使えば使うほどよくなる感触が、沖縄のむし暑い夏にぴったりで、戦前は沖縄の至る所で織られ愛用されてきました。しかし、戦後の生活様式の変化によって、その伝統もとだえ、現在では大宜味村喜如嘉を中心に生産されるだけとなりました。喜如嘉の芭蕉布は、経緯糸とも百パーセント手紡ぎの芭蕉糸を用い、糸取りから仕上げまで全て一貫した作業によって製作されています。現在は紺が中心で、紺糸はリュウキュウアイとティカチ(オキナワシャリンバイ)の染料で染められます。できあがった反物は、木灰で精錬されたあと中和剤としてのユナジ(ごはんを醸酵させたもの)に漬けて仕上りますが、この反物の状態での精錬も喜如嘉芭蕉布の特徴の一つです。なお、喜如嘉の芭蕉布の伝統は戦後、途絶えかけそうになりましたが、平良敏子(1920年生まれ)保存会代表ら字の婦人たちの情熱と努力で復活、現在に受け継がれることになりました。保存会代表の平良敏子さんは、個人として、県指定無形文化財の技能保持者でもあります。(『沖縄文化財百科第3巻 芸能・民俗』)

写真3



写真4



指定区分/種類/分類

国指定 重要無形文化財 工芸技術(染織)

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

1974(昭和49)年4月20日

所有形態/所有・管理者

喜如嘉の芭蕉布保存会

管理/保護団体指定年月日

1976(昭和51)年4月30日

指定/登録履歴

1972(昭和47)年県指定重要無形文化財/1974年(昭和49)4月20日国指定・認定(保持者(代表者)・平良敏子)/1976年(昭和51)4月30日 認定解除

指定/登録基準

指定要件

- 一 糸は、糸芭蕉より苧引きしたものであること。
- 二 染色は植物染であること。
- 三 紺模様は手くり紺であること。
- 四 手織りであること。

芭蕉布は、糸芭蕉の纖維を糸にして織った布で、沖縄、奄美諸島の衣料として古くは盛んに作られた。そのうち沖縄県国頭郡で製作されていた日常衣料を主とする芭蕉布製作の伝統が、現在、同郡喜如嘉を中心とした地域で婦人達の協同作業によって伝承されている。

喜如嘉の芭蕉布は、テカチ・染・琉球藍染・木灰の使用など、すべて天然の材料によって手仕事で製作されており、纖維の粗剛な平織物ながら、特別な魅力を具えた織物として今日評価が高い。

大宜味村文化財カルテ

番号 田港01
名称 田港御願の植物群落
ふりがな たみなどうがんのしょくぶつぐんらく

類型(タイプ) 時代区分
自然環境

解説文

集落の東側に、緑の木々が鬱蒼と茂る山が田港御願の拝所林である。田港御願は、田港・屋古・塩屋・白浜(渡野喜屋)の守護神を祀った御嶽であり、地域住民からは神域として保護してきた場所である。御嶽から樹木を伐採することは昔から法度であったため、現在林の様相を呈して今まで残すことができた。指定を受けている地域は、木が残っており、沖縄の古生期石灰岩の代表的植生として学術上重要であるといわれている。

所在地

字田港御神上原

写真1



面積/規模・形態/員数

観察・調査記録

集落東側の畠に文化財指定の碑があり、その後背地の山がその植物群落にあたる。山の麓には、御嶽を遙拝するイビナ嶽がある。

利用案内

田港集落の北東側、塩屋湾を前方に立地している。

利活用状況

神域として保護されている。

主な参考文献

- ・『大宜味村史 通史編』(1979年/大宜味村史編集委員会)
- ・『沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅲ』(1980年/沖縄県教育委員会)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)

備考

伝承・言い伝え

大宜味村文化財カルテ

番号 田港01
名称 田港御願の植物群落
ふりがな たみなとうがんのしょくぶつぐんらく

類型(タイプ) 時代区分
自然環境

文献等の解説①

田港御願は、田港部落の南東約100mの所に位置する。御願所の下部は海抜約5mの地点で耕作地に隣接し、上部は海抜約110mの地点で古生層石灰岩の断崖となる。この範囲を一般に田港御願と呼んでいる。田港御願は、第二次世界大戦末期から終戦後にかけて多少人為的に搅乱されたことはあるが、田港部落、屋古部落、塩屋部落などの祭事の場として古くから大事に保護されている。古生層石灰岩を母岩とする本地域にはガジュマル、アカギ、クスノハカエデ、シロダモ、ホルトノキ、クワノハエノキなどの大木やワラビツナギ、タカクマソウ、カレンコウアミシダ、アコウネッタイラン、ムクノキなど分布上興味ある植物が生育し、沖縄における古生層石灰岩の代表的な植物群落として、昭和47年5月に国の天然記念物に指定された。(『沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅲ』)

写真2



写真3

指定区分/種類/分類

国指定 記念物 天然記念物

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

1972(昭和47)年5月15日

指定/登録基準

所有形態/所有・管理者

管理/保護団体指定年月日

指定/登録履歴

大宜味村文化財カルテ

番号 共通01
名称 塩屋湾のウンガミ
ふりがな しおやわんのうんがみ

類型(タイプ) 伝統祭祀 時代区分 近世～現代

解説文

毎年旧盆明けの亥の日に行われる。海神祭は古い時代に北部の村々で起り、語り伝えられてきたが、時代が進むにつれてその影が揺らぎつつある時、塩屋では昔そのままの姿を残して盛大に行われている。海と山に囲まれ、そこから生活の糧を得ていたことから、海の幸、山の幸を祈願する豊作・豊漁(獵)祭である。現在は田港、屋古、塩屋、白浜に加え、大保、押川、江洲も行事に参加している。

所在地

塩屋湾(塩屋、田港、屋古、白浜)

観察・調査記録

(1)前夜 神人が門中の元屋に集まりウンケー(神迎え)を行う。田港ノロはサンナム(ヌルの世話役)とシマンホー(祭祀を担当する男性)はのノロ殿内で神迎えを行う。
(2)当日 ①ノロは田港のウフェー屋を拝み、神人達は田港アサギに集合する。②神女たちは、タンナ川に行って拝み、水撫でする。③田港アサギでウンケージャク(御迎酌)を行い、祭りの始まりを告げる。④ノロと神人たちは、マタザイ(二股の鉢を真似た道具)を持ったシマンホーの先導で屋古アサギへ移動する。⑤屋古アサギでノロがウンケージャクを行い、屋古の旧家二軒の当主と盃を交わす。⑥屋古アサギでは、アシビガミが弓を持ってヨンコイの神舞を行い、ワハヌル・ウフシリ・スリガミの3人の神人が神ウスイを行う。⑦ノロ、神人たちは駕籠に乗り、塩屋のシナバヘ移動する。⑧ファーリガミは屋古海岸のフルガンサに向かい、爬竜船に乗り込む。⑨御願バーリーの後にウフバーリーの競争が行われる。⑩ノロの行列が兼久浜に到着すると、ニレー・ジュウグにウンガミ終了を感謝し、豊作・豊漁を祈願するナガリを行う。⑪シマンホーがフィートウニアゲーをする。⑫ノロたちがシナバヘ戻りパーシー、奉納相撲をする。
(3)翌日 ウガンマールは翌日にヤーサグイ、ウドイマールには塩屋で総踊り、屋古と田港ではサーサーが行われる。

写真1



写真2



主な参考文献

- ・『大宜味村史』(1979年/大宜味村役場)
- ・『塩屋ウンガミ』(1986年/平良孝七撮影/塩屋ウンガミ刊行委員会)
- ・『沖縄祭祀の研究』(1994年/高阪薰/翰林書房)
- ・『沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動(4)－沖縄本島周辺離島一(沖縄県文化財調査報告書第103集)』(1991年/沖縄県教育委員会)
- ・『塩屋誌』(2003年/塩屋区公民館)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)

備考

大宜味村文化財カルテ

番号 共通01

名称 塩屋湾のウンガミ

ふりがな しおやわんのうんがみ

類型(タイプ)

伝統祭祀 時代区分 近世～現代

文献等の解説①

ヤーサグイでまわる家・拝所

田港 ウフ屋、ヌン殿内、ニザン屋、桃原、ウフェー屋

白浜 根神殿内、タマ屋、クラントー

屋古 ウフェー屋(アサギの後ろの祠)、若ヌル屋、ナ

ハ屋、上又川、メーダヤー

塩屋 根神屋、大東新屋、ナハ屋、スーギチ屋、仲ン

ダ屋、上殿内、セーク屋、スリ屋(『塩屋誌』)

写真3



写真4



指定区分/種類/分類

国指定 種別1 風俗習慣

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

1997(平成9)年12月15日

所有形態/所有・管理者

田港区、屋古区、塩屋区、白浜区

管理/保護団体指定年月日

指定/登録基準

沖縄県北部の大宜味村の塩屋湾で行われるウンガミは、田港区・屋古区・塩屋区・白浜区のシカアザ(四か字)で行われる行事である。旧盆明けの初亥の日を中心に三日間かけて行われており、一年交代でウグアンマール(御願年)とウドaimar(踊り年)とを行う。……

塩屋湾のウンガミは、沖縄の伝統的な民俗信仰のあり方を伝えるとともに、沖縄県北部に分布するウンガミを代表する行事である。(文化庁国指定文化財等データベース)

指定/登録履歴

大宜味村文化財カルテ

番号 喜如嘉02
名称 喜如嘉板敷海岸の板干瀬
ふりがな きじょかいたじきかいがんのいたびし

類型(タイプ) 自然環境
時代区分 地質時代

解説文

喜如嘉区の南海岸の波打ち際にあり、炭酸カルシウムのセメント作用により砂、礫、岩石等が固結された海浜性の岩石。本地域の板干瀬はビーチロックともいい、一般に熱帯から亜熱帯地域の海岸に見られ、海側にやや傾斜し波状に発達する。県内に大小数多くあるが大規模なものは本地域以外に国頭村謝敷、大宜味村大宜味、同村津波などがある(「大宜味村文化財パンフレット」)。

所在地

字喜如嘉

面積/規模・形態/員数

厚さ約6~30cm、幅約30cm、長さ約1km。

写真1



利用案内

干潮時見学可能

観察・調査記録

板干瀬(ビーチロック)は喜如嘉の海岸の南側にあり、西から東へ広がっている。浜辺にはアダンが群生している。58号線沿い海岸入り口左側に説明版、右側には「沖縄海岸国定公園 沖縄県・大宜味村」の案内板がある。海岸への入り口はタイルできれいに整備され、コンクリートのブロックで車止めがなされている。板干瀬の上で釣りをする人も見られた。

利活用状況

備考

1995年(平成7)3月に県の条例によって、この地域において許可なく現状を変更し、又は保存に影響を及ぼす行為をすることを禁じている。

主な参考文献

- ・『大宜味村史 通史編』(1979年/大宜味村史編集委員会)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)
- ・『大宜味村の自然大宜味村動植物調査報告書』(1995年/大宜味村教育委員会)

伝承・言い伝え

大宜味村文化財カルテ

番号 喜如嘉02

名称 喜如嘉板敷海岸の板干瀬

ふりがな きじょかいたじきかいがんのいたびし

類型(タイプ) 自然環境
時代区分 地質時代

文献等の解説①

辺土名高校北側の海岸にあるビーチロックは幅25m～30m、長さ1.5kmに渡って分布する大規模なもので、県指定の天然記念物になっている。厚さが10～20cm単位で板状の岩石となり、海に向かって5～10°で傾斜し、陸側では急傾斜となりマイクロケスタ状をなしている。外見は硬そうであるが、割ると内部は軟らかくぼろぼろに崩れてしまう。他の地域と違い、ビーチロックを構成する物質は基盤に由来する千枚岩や砂岩の礫が石灰岩で固結されたものが多く、サンゴ片など海起源の物質が少ないので特徴である。(『大宜味村の自然』)

写真2



写真3



指定区分/種類/分類

県指定 記念物 天然記念物

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

1974(昭和49)年3月18日

指定/登録基準

所有形態/所有・管理者

沖縄県

管理/保護団体指定年月日

指定/登録履歴

大宜味村文化財カルテ

番号 大宜味01

名称 大宜味御嶽のビロウ群落

ふりがな おおぎみうたきのびろうぐんらく

類型(タイプ) 時代区分

自然環境

解説文

大宜味小学校の北側を流れる川に沿って位置し、本島の海岸斜面に成林するビロウ群落の代表的なもの。県下でビロウ群落は、海岸斜面の潮風の影響の強い立地に成林し、伊平屋島、南大東島、与那国島などによく発達している。沖縄本島ではあまり発達が見られず本群落が最大である。

写真1



所在地

字大宜味

面積/規模・形態/員数

大宜味御嶽の左右に分布。

観察・調査記録

御嶽を中心に左右後方にかけて発達した植物が生い茂っていることがわかる。全体に縄がはられており、内部への侵入はできない。

利用案内

見学可能。御嶽には縄が張られている。

利活用状況

備考

主な参考文献

- ・『沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅲ』(1980年/沖縄県教育委員会)
- ・『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅲ—国頭・中頭方西海道(Ⅱ)—』(1986年/大宜味村教育委員会)
- ・『大兼久誌』(1991年/大兼久区)
- ・『大宜味村の自然』(1997年/大宜味村教育委員会)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)

伝承・言い伝え

大宜味村文化財カルテ

番号 大宜味01

名称 大宜味御嶽のビロウ群落

ふりがな おおぎみうたきのびろうぐんらく

類型(タイプ) 時代区分
自然環境

文献等の解説①

大宜味御嶽は、大宜味村役所の南東方約100mの谷間に位置する。祠の後方南岸向きの斜面にビロウの優先する群落が発達する。立地は所々に粘板岩の露出する急斜面($20^{\circ} \sim 35^{\circ}$)である。群落の高さは谷間の湿度の高い立地では約7m、斜面上部の風当たりの強いやや乾燥した立地では約6mである。群落構造は4階層に分化し、各階層にビロウが出現する。高木層にはビロウの他にシマタゴ、エゴノキが出現し、植被率は40~50%である。亜高木層にはビロウ、ヤブニッケイ、フカノキ、フクギなどが高い頻度で出現し、植被率は60~90%でよく発達している。低木層にはビロウ、ナガミボチヨウジ、モクタチバナ、ハマビワ、クロツグ、アカテツなどが出現する。草本層にはヤブニッケイ、ショウベンノキ、シラタマカズラ、コバノカナワラビ、カニクサ、ホウビカンジュ、タシロスゲ、シゲスゲ、ノシラン、クロツグなど50種出現する。(『沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅲ』)

写真2



写真3

指定区分/種類/分類

県指定 記念物 天然記念物

指定/登録基準

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

1974(昭和49)年2月22日

所有形態/所有・管理者

管理/保護団体指定年月日

指定/登録履歴

大宜味村文化財カルテ

番号 大兼久01
名称 旧大宜味村役場庁舎
ふりがな きゅうおおぎみそんやくばちょうしゃ

類型(タイプ) 戦跡・近代化遺産
時代区分 近代

解説文

県内でも古く本格的な鉄筋コンクリート造の建築物で、1925(大正14)年に竣工。沖縄の気候風土を十分考慮に入れ、特に台風による風圧を軽減するため、八角の平面形状を取り入れるなど、優れた特徴を有している。大正時代のコンクリート建築物として県内に現存する唯一のもので、鉄筋コンクリート造技術の導入や、構造法の歴史を知る上で貴重とされている。(「大宜味村文化財パンフレット」)

写真1



所在地

字大兼久157番地

観察・調査記録

面積/規模・形態/員数

鉄筋コンクリート構造2階建て1棟。延べ面積182.6m²
(1階170m²、2階12.6m²)

利用案内

大宜味村の施設として使用中

利活用状況

大宜味村の施設として使用中

備考

主な参考文献

- ・『清村勉設計の沖縄における初期鉄筋コンクリート造建築 日本建築学会九州支部研究報告 第25号』(1980年/木下義宜・木島安史)
- ・『公共建築』No24通巻95号(1982年/社団法人營繕協会)
- ・「大正の沖縄に、なぜコンクリート造校舎が」(原昭夫『わが町のモダン建築<INAX BOOKLET Vol7 No3>』/株式会社INAX発行)

伝承・言い伝え

大宜味村文化財カルテ

番号 大兼久01
名称 旧大宜味村役場庁舎
ふりがな きゅうおおぎみそんやくばちょうしゃ

類型(タイプ) 戦跡・近代化遺産
時代区分 近代

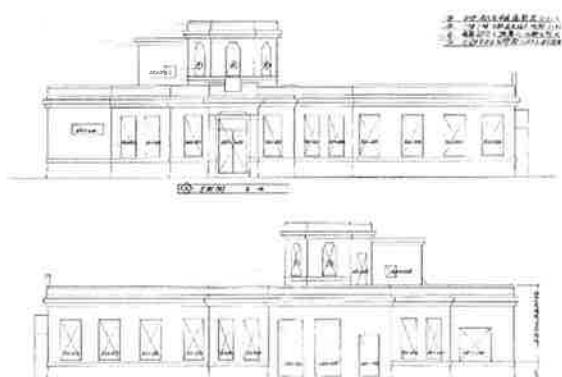
文献等の解説①

旧大宜味村役場庁舎は、公共建築物としては県内初の本格的な鉄筋コンクリート造の建築物で、大正14年に竣工(設計:清村勉)されました。当時としては画期的なメートル法を用いた設計で、意匠的に沖縄の気候・風土を十分考慮に入れるなど、優れた特徴を持っています。大正期のコンクリート建築物としては、県内に唯一現存するもので、鉄筋コンクリート造技術の導入や、構造法の歴史を知るうえで貴重な資料とされ、平成9年11月18日に件指定有形文化財にしていただきました。(『大宜味村ふるさと発見ガイド』)

写真2



写真3



指定区分/種類/分類

県指定 有形文化財 建造物

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

1997(平成9)年11月18日

所有形態/所有・管理者

大宜味村

管理/保護団体指定年月日

指定/登録履歴

指定/登録基準

本建築物は、大正13年9月に工事着工し、大正14年3月に完成した県内初の鉄筋コンクリート構造2階建庁舎であり、設計は当時の国頭郡役所建築技手であった清村勉氏(熊本県出身)によるものである。以来、昭和47年まで大宜味村役場庁舎として使用された。その後は、村商工会や農業改良普及所として使用され、現在は民具等の収蔵、展示場として使用している。居住目的の建築物はレンガ造りが主流であった時代に、清村氏が独自に研究、実験を積み重ね、沖縄県に鉄筋コンクリート造りが最適と考え建造したもので、県内に現存する唯一の大正時代の建物である。また、本庁舎の気候風土を考慮した平面型の設計や、台風に対して壁面の風圧を減少させるための八角形の時計を模した形状は、現在でも適用するモダンな設計であり、その構造法の歴史を知るうえで貴重である。

大宜味村文化財カルテ

番号 共通02
名称 大宜味村の猪垣
ふりがな おおぎみそんのやましがき

類型(タイプ) 生産技術 時代区分 近世～現代

解説文

農作物への猪被害を防ぐため、畠地と山地の境界に築かれた垣。『球陽』によると 1776 年から 1782 年にかけて改修工事が行われていたことがわかり、その以前から作られたと考えられている。その後も継続的に増築され、大宜味村全域を囲い込んでいる。

所在地

字押川六田原(前ホテルシャーベイ跡地付近)～根路銘棚原山林間(上原ハキンジョウ)

面積/規模・形態/員数

字押川六田原(前ホテルシャーベイ跡地付近)から根路銘棚原山林間(上原ハキンジョウ)までの約1.3kmを指定(猪垣全長約31km)。

利用案内

指定範囲へは遊歩道より見学可。

利活用状況

見学可能。大宜味椿の会が、塩屋富士散策ツアーを開催している。

備考

調査状況については、『大宜味村の猪垣－猪垣調査報告書一(大宜味村文化財調査報告書第3集)』参照。

写真1



観察・調査記録

最も古い記録は1787年の『球陽』で、1776年から1782年に改修工事が行われたとされるため、それ以前から建設されていたと考えられる。
1935(昭和10)年に本格的に整備か。
調査状況については、『大宜味村の猪垣－猪垣調査報告書一(大宜味村文化財調査報告書第3集)』参照。

主な参考文献

- ・『大宜味村史』(1979年/大宜味村役場)
- ・『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅲ－国頭・中頭方西海道(Ⅱ)－』(1986年/沖縄県教育委員会)
- ・『大宜味村の猪垣－猪垣調査報告書一(大宜味村文化財調査報告書第3集)』(1994年/大宜味村教育委員会)

伝承・言い伝え

大宜味村文化財カルテ

番号	共通02	類型(タイプ)	時代区分
名称	大宜味村の猪垣	生産技術	近世～現代
ふりがな	おおぎみそんのやましがき		

文献等の解説①

農作物への猪被害を防ぐため、畑地と山地の境界に築かれた垣。大宜味村全域を囲い込む猪垣は「十里の長城」とも呼ばれ、畑のヤマシの侵入は、主食であるイモやすべての作物を失うことにもなり、農民の生存にかかわることだけに、猪垣をもってヤマシの侵入を防ぐことは農民の生きるための戦いでもあった。(「大宜味村文化財パンフレット」)

写真2

写真3

指定区分/種類/分類

村指定 有形文化財 史跡

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

2005(平成17)年10月1日

所有形態/所有・管理者

大宜味村

管理/保護団体指定年月日

指定/登録基準

私達大宜味村の先祖は、杣山(現在村有地)と農耕地(畑)との境界に猪垣を築き、畑地へのヤマシの侵入を防ぎ、畑を守ってきた。殊に猪垣に隣接する土地の所有者は代々自分の畑を守るためにも、大宜味村全域の畑を守るためにも、自分の土地に接する猪垣を責任を持ってその保全に努め、崩れたら直ぐに補修をして猪垣を維持してきた。……猪垣には私達村民の先祖の歴史が刻まれている。大宜味村全域を囲い込む猪垣は「十里の長城」とも呼ばれ、構築から改修・保全と大宜味村に住んでいた人々の長い歴史の証しである。私達村民の先祖の歴史を語ってくれる貴重な文化遺産である。(大宜味村ホームページより)

指定/登録履歴

大宜味村文化財カルテ

番号 塩屋01
名称 塩屋ウフンチャのハスノハギリ
ふりがな しおやうふんちやのはすのはぎり

類型(タイプ) 自然環境
時代区分 近代～現代

解説文

塩屋区のウフンチャ墓地内に生息しているハスノハギリは、茎の下部で4本に分かれ、胸高直径がそれぞれ116cm、101cm、82cm、42cm。樹高は13.5mである。ハスノハギリは海岸付近に生息する性質があり、このことから昔はこの樹木が生育している付近が砂浜だったことが伺える。

村指定文化財。

写真1



所在地

字塩屋597 サトシ電器サービスの横より入る

面積/規模・形態/員数

樹木は1本だが茎の下部で4本に分かれる。樹高135cm、胸高直径がそれぞれ116cm、101cm、82cm、42cm。

観察・調査記録

塩屋ウフンチャ墓の入口にある大木。広場には古い墓群があり、個人墓も、集落の共同墓もある。ハスノハギリの根元にはオオタニワタリなど様々な植物が寄生している。

利用案内

見学可能

利活用状況

広場はきれいに整備されている。

主な参考文献

・「大宜味村文化財パンフレット」

備考

伝承・言い伝え

大宜味村文化財カルテ

番号 塩屋01
名称 塩屋ウフンチャのハスノハギリ
ふりがな しおやうふんちやのはすのはぎり

類型(タイプ) 自然環境 時代区分
近代～現代

文献等の解説①

写真2



写真3



指定区分/種類/分類

村指定文化財

指定・登録年月日/告示年月日/告示番号

2007(平成19)年03月

指定/登録基準

所有形態/所有・管理者

塩屋区

管理/保護団体指定年月日

指定/登録履歴

大宜味村文化財カルテ

番号 田嘉里01
名称 田嘉里の神アサギ
ふりがな たかざとかみあさぎ

類型(タイプ) 時代区分
御嶽・拝所

解説文

田嘉里の神アサギ。神アサギ後方はクガリ山に通じて
いる。ウスデークの時、2番目に巡る場所である。

所在地

字田嘉里

面積/規模・形態/員数

コンクリート製四脚の神アサギー基。屋根はセメント
瓦、小屋組は木造。隣接してコンクリート製祠1基。
高102cm×139cm

利活用状況

ウスデークの時などに巡る。

伝承・言い伝え

旧7月のウンガミの翌日に、クガリ山で恋焦がれて死ん
だ喜界島のノロを慰めるために、ウスデークを行う。

主な参考文献

- ・『田嘉里の歴史』(1990年/安里有三)
- ・『大宜味村民話研究遺跡編』(1999年/平成10年
度沖縄国際大学卒業論文)

写真1



写真2



観察・調査記録

四脚コンクリート製の神アサギで、手前にアサギマー
(広場)、隣接してコンクリートブロック製の祠がある。祠
内には、火神と思われる石6つと、石香炉1つ、陶器製
香炉2つがある。アサギの裏手はシークワーサー畑となっ
ている。神アサギ後方はクガリ山に通じているとされる
が、現地では木に遮られて山への眺望はかなわない。

備考

大宜味村文化財カルテ

番号 謝名城01
名称 根謝銘グスク
ふりがな ねじやめぐすく

類型(タイプ) グスク
時代区分 グスク時代

解説文

根謝銘グスクは14世紀から15世紀の大型城塞的なグスクで、地元では「上(ウイ)グシク」と呼んでいる。かつての城村の集落背後の標高約100メートルの舌状丘陵端に形成され、丘陵頂上部に古成期石灰岩の割石で石塁を巡らし、尾根筋は掘切で切断している。グスク内には大城御嶽(大グスク)と中城御嶽(中グスク)と呼ばれる御嶽があり、中城御嶽の隣りには木造瓦葺の神アサギが建てられている。

所在地

字謝名城

面積/規模・形態/員数

写真1



観察・調査記録

グスク内には大城御嶽、中城御嶽、神アサギ、地頭火の神の拝所、上城ガード、馬浴し井戸などの井戸跡があり、現在は拝所となっている。グスク及び周辺の資源には、謝名城区による石碑(名称が刻まれている)が置かれている。

利活用状況

年1回、ウンガミの祭場となる。

参考文献

- ・「根謝銘城調査概報」『琉大史学』第2号(1970年/宮城長信)
- ・『図説 沖縄の城』(1996年/名嘉正八郎/那覇出版社)
- ・『沖縄の城跡』(1982年/新城徳祐/新報出版)
- ・「大宜味村民話研究 遺跡編」(1998年/平成10年度沖縄国際大学卒業論文)
- ・比嘉朝進『沖縄拝所巡り300』(2005年/那覇出版社)
- ・『沖縄の地名 日本歴史地名大系48』(2002年/平凡社)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)
- ・『謝名城における集落の発生と信仰』(宮城長信)

伝承・言い伝え

『球陽』によると、尚巴志が北山王攀安知を攻めるにあたり、國頭按司は羽地按司・名護按司軍とともに中山軍に参戦しており、この國頭按司の居城はこの根謝銘グスクだったと考えられている。15世紀中頃の『海東諸国紀』に載る「琉球国之図」には、ひときわ大きな円形の城塞マークの中に「國頭城」と記載されており、これが根謝銘城ではないかと考えられている。『國頭郡志』によると、英祖王の後裔大宜味按司の居城とされるほか、第二尚氏王統が成立するときに、今帰仁グスクの官位にあった仲今帰仁城主一族が根謝銘グスクを頼って逃げたとの伝説がある。

大宜味村文化財カルテ

番号 謝名城01
名称 根謝銘グスク
ふりがな ねじやめぐすく

類型(タイプ) グスク
時代区分 グスク時代

文献等の解説①

国道58号線を北上すると、沖縄本島最北端の国頭村と大宜味村の境界に、屋嘉比川(田嘉里川)がある。屋嘉比川の河口にかけられた屋嘉比橋から、サバ岬に連なる丘陵地を眺めると、田嘉里の背面に円錐状の山がある。そこが根謝銘城(ネジヤメグシク)遺跡の頂上部にあたる。最も高い位置に大城(ウフガシク)の御嶽があり、一段下がった平坦部に神アサギと中城の御嶽がある。この神アサギの広場では、毎年旧七月盆後の初亥の日に謝名城・喜如嘉・大宜味・大兼久の四文字共同の古式な祭儀が行われている。資料編では田嘉里、謝名城、喜如嘉、饒波の各字の神人が集つて之を行ふ、とある。根謝銘城の周囲は、断崖と急斜面によって、山裾から頂上部を孤立させ天然要害の地形をなす。城壁とみなされる線に沿う所々に野面積みの石垣がみられる。北と南の端の突端部に小高い石礫の集積があり、当時の城の外様が偲ばれる。

遺跡の西方眼下には、喜如嘉川が形成した低湿地帯が屈曲してのび、遠く海上には古宇利島・本部半島・伊江島が見渡せる。東北東眼下から北方へ流れる屋嘉比川の両側に低平地が広がり、川口右側の砂丘に字浜がある。その北方に赤丸岬(帆の岬)があり、水平線に伊是名島・伊平屋島を一望に収め景勝の地である。根謝銘城は、一名上城とも称し、往昔中山英祖王の後裔大宜味按司の居城なりといふ(『国頭郡志』)。また、民間伝承によると築城途上に外敵の攻撃を受け、城壁を築く余裕もなく廃城となったと伝えられている。旧藩庁系図座出仕長浜氏の記録(『国頭郡志』)を要約すれば、尚巴志の北山攻略の際に、仲今帰仁城主の孫の真三良金が父祖の仇敵を討つに活躍し、尚忠の北山監守時代に城内官職に任せられ、三男一女を生み、長女の真鶴金は大宜味按司に嫁し、次男兼松金の次男思五良金は大宜味按司の婿であったという。(『大宜味村史』)

備考

写真2



写真3



写真4



大宜味村文化財カルテ

番号 謝名城03

名称 城の神アサギ

ふりがな ぐすくのかみあさぎ

類型(タイプ)

御嶽・拝所

時代区分

解説文

謝名城集落の神アサギである。『琉球国由来記』には神アサギについては記されていない。現在は瓦屋根のある建物で、壁や床があり、一般的な神アサギとは異なった作りとなっている。ウンガミではアサギの内部で神人が座り、神酒を酌み交わした後、東側の広場(アサギマー)で祭祀が行われる。

所在地

字謝名城

写真1



面積/規模・形態/員数

セメント瓦の建物。柱や床は木造。

写真2



利活用状況

ウンガミが行われる。

伝承・言い伝え

主な参考文献

- ・『喜如嘉の民俗』(1970年/平良豊勝/沖縄僚友会)
- ・『大宜味村史 資料編』(1978年/大宜味村)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)
- ・『謝名城における集落の発生と信仰』(宮城長信)

観察・調査記録

他の神アサギと異なり、神人が腰掛ける床がついている。新らしく建て替えられたものだが、造りは昔と変わらないという。神アサギの横の広場(アサギマー)には、ウンガミなどで木のベンチを設置する石の支柱が残されている。

備考

現在の神アサギは2000年改築で、区民が1~2日の奉仕作業によるものである。

大宜味村文化財カルテ

番号 謝名城20
名称 城のウンガミ
ふりがな ぐすくのうんがみ

類型(タイプ) 伝統祭祀 時代区分 近世～現代

解説文

城のウンガミは、海の神だけではなく、山の神もお迎えして悪疫を払い、豊作や子孫繁栄を祈る祭祀である。区で最も重要な祭事とされ、毎年旧盆明けの最初の亥の日、グスクバールの東方の高台「上城(ウイグシク)」で行われる。

明治以降から行事が短縮化されたり、過疎化の影響により神人(カミニチュ)のなり手が減るなど、行事自体の形態は変化しているが、中城御嶽や神アサギで行われる一連の祭事は今もなお受け継がれ、いにしえより続く神と人間との関係を感じることができる。

所在地

字謝名城

観察・調査記録

現在はノロ殿内での祈願の後、グスクへ登る。神アサギに到着すると祭の準備が行われ、地頭火の神、喜如嘉への拝み、上グスクのカーの拝みをして、再びアサギに戻る。アサギで神酒の杯をかわすと、アサギマーで神踊り(4回)が行われる。グスクでの祭事が終わるとウドウンニーズ・トウンチニーズの前(ウドウンマー)で神送りが行われる。かつては、前日に神アサギに籠もり、その翌朝喜如嘉の浜に下りて海の神を迎えたとされるが、現在は籠もりではなく、謝名城の潮崎で神を迎える。また、神送りの行事も、かつては喜如嘉の立名ブク、イムツチマーシ(地名)でナガリーウケンザクのウムイと祈願が行われ、喜如嘉の神アサギに一泊したとされ、ここ百年余りの間で簡素化され変遷している。

写真1



写真2



主な参考文献

- ・『喜如嘉の民俗』(1970年/平良豊勝/沖縄僚友会)
- ・『大宜味村史 資料編』(1978年/大宜味村)
- ・『ハンサガ—大宜味村字根路銘謝名城における神人就任儀礼』(1989年/沖縄国際大学ハンサガー調査団/沖縄国際大学)
- ・『琉球服装の研究』(1991年/辻合喜代太郎、橋本千榮子/関西衣生活研究所)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)
- ・『謝名城における集落の発生と信仰』(宮城長信)

備考

大宜味村文化財カルテ

番号	謝名城20
名称	城のウンガミ
ふりがな	ぐすくのうんがみ

類型(タイプ)	伝統祭祀
	近世～現代

文献等の解説①

●ウタカビ又はウングムイ

儀式の前晩行ふもので其の晩は大祝女若祝女又はピラムト神(海の掌神)を連れて、喜如嘉の根神の家へ行って祈願する。その時は凡て白裳束で垂髪をしている。それが済むとハンサガの式を行ふ。(中略)儀式の当日 朝は城及根謝銘の神人はカゴを用意して喜如嘉にウングマイしている神人を迎へに行く。

●行列

祝女殿内に集まつた神く人ゝは総べて白衣を着し、マンサジ(八巻)を頭に結び、六尺ほどの神弓と矢を持ち、片手には赤いウチワを持って、太鼓を鳴らしつつ行列を整えて神アサギに向ふ。昔はカゴに乗つたらしい。途中火の神を祭れるアサギに行き祈願を済ましてから行く。

●祭典

神アサギにつくと神人は各自所定の席に座し、祝女若ノロ 根神 ウチ神 ピラムト遊ピラムトの諸神人二十四人が順に坐す。他の神人は庭に坐し、氏子は各字交ってアサギ前のクバの葉の敷いた拝所の左右に坐し各自酒肴を供して氏子を祭る。祝女は時刻を見て共に祈祷を始め、それが済むと全部庭に出て定めた場所に着し、喜如嘉でウングマイした神人を上庭に迎へ、城根謝銘の遊ピラムト神はその真中で神踊を踊る。(踊り部分省略)かくて踊り終わると見物中の神女がミカンを踊手の中にまきちらし、それが済むと猪をとるまねをして飾つてある冬瓜を槍で突き殺すのである。(中略)

●第五回 神アサギに帰り祈願を成し猪、残酒、鼠等を御供にかつがせ遊びピラムト祝女若ノロは海の神をお供して喜如嘉の根屋に集合し再びウムイを歌ひ之がすむと行列で喜如嘉の浜に向ふ。途中あみ河という所で前と同じ様な事をする。(中略)

●第六回 ナガレ 喜如嘉の浜に行列が着くとお供に持参せしめた猪、鼠を捧げ、残酒を供して海を押し、又山を押し、踊りに使用した冠と共に捧げたものを海に流す。(中略)分れ 祭の翌日喜如嘉アサギに遊びピラムト神及び喜如嘉の神人が集合して神酒を捧げ、祭の終った事を神に告げ後ウムイを歌つて城から出た神人がカゴで城アサギに帰る。(『大宜味村史資料編』)

写真3



写真4



写真5



大宜味村文化財カルテ

番号 喜如嘉04
名称 喜如嘉貝塚
ふりがな きじょかかいづか

類型(タイプ) 埋蔵文化財
時代区分 先史時代

解説文

喜如嘉集落の南西部、国道58号線に沿った標高3~5mの海浜砂丘に形成された遺跡。沖縄先史時代後期の特徴を持つ土器や貝製品が大量に出土した。しかし、石器が1点も出土していないことは、そこにとって代わるものがあったことを示唆していると考えられる。(「大宜味村文化財パンフレット」)

所在地

字喜如嘉

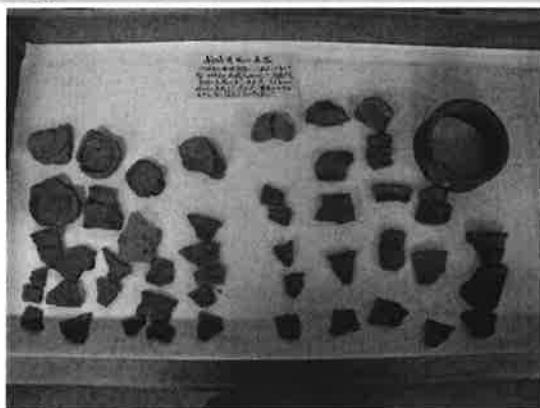
写真1



面積/規模・形態/員数

約150平方メートル

写真2



利活用状況

遺構保存

伝承・言い伝え

主な参考文献

- ・『大宜味村喜如嘉貝塚発掘調査ニュース』(1978年/大宜味村教育委員会)
- ・『喜如嘉貝塚発掘調査報告書』(1979年/大宜味村教育委員会)
- ・『大宜味村の遺跡 詳細分布調査報告書』(1984年/大宜味村教育委員会)
- ・『喜如嘉貝塚一国道58号改修工事に係る緊急発掘調査』(1994年/沖縄県教育委員会)

観察・調査記録

大宜味村農村環境改善センター敷地にて、遺構保存がされている。

備考

大宜味村文化財カルテ

番号 塩屋06
名称 塩屋の神アサギ
ふりがな しおやのかみあさぎ

類型(タイプ) 御嶽・拝所
時代区分 近世～現代

解説文

塩屋区の神アサギとその庭で、集落の祭祀行事が行われる。現在の神アサギは1997年に建て替えられたもの。ウンガミ行事では、2日目のヤーサゲイの後、アサギマーにて隔年毎にウスデークを踊り、神人は神アサギの中で踊りを見守る。

所在地

字塩屋 塩屋小学校の裏手

面積/規模・形態/員数

コンクリート製の屋根付き建造物1基、梁と支柱はコンクリート製、屋根はセメント瓦葺き、小屋組は木造

利活用状況

ウンガミのヤーサゲイの後、ウスデークを踊る。4年に1度の豊年踊りも開催される。

伝承・言い伝え

主な参考文献

- ・『大宜味村史』資料編「大宜味村誌」(1978年/大宜味村史編集委員会)
- ・『塩屋ウンガミ』(1986年/平良孝七撮影/塩屋ウンガミ刊行委員会)
- ・『大宜味村民話研究遺跡編』(1998年度卒業論文)
- ・『塩屋誌』(2003年/塩屋区公民館)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)

写真1



写真2



観察・調査記録

梁と支柱はコンクリート製、屋根はセメント瓦葺き、天井内部は木製。天井内部の最上部に「紫微鑾駕 平成9年8月13日(旧7月12日) 施工:(有)宮保建設」の記載された木板あり。木板裏には塩らしきものが入った無色ビニール製の小袋が3つぶら下げられている。元々は、赤瓦葺きの建物が建っていた。アサギマーでは、4年に1度の豊年踊りが行われる。男性は三味線を使わずに太鼓だけを叩く。女性だけが踊る。

備考

大宜味村文化財カルテ

番号 屋古03

名称 屋古の神アサギ

ふりがな やこのかみあさぎ

類型(タイプ)

御嶽・拝所

時代区分

解説文

字屋古の神アサギ。

ウンガミのとき、神人が田港の神アサギから屋古の神アサギにやってくる。アサギマーには太い柱を立てて、それを中心にクムーが張られ、その周辺は芭蕉の葉の屋根でめぐらされ、下のほうは芭蕉の葉を筵代わりに敷く。

所在地

字屋古

写真1



面積/規模・形態/員数

瓦葺建築物1基、支柱と梁はコンクリート製、柱は8本

写真2



利活用状況

ウンガミのとき、アサギマーに祭場が作られて、「ヨイコイの神舞」などが行われる。

伝承・言い伝え

主な参考文献

- ・『大宜味村民話研究遺跡編』(1999年/平成10年度沖縄国際大学卒業論文)
- ・『塩屋誌』(2003年/塩屋区公民館)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)

観察・調査記録

梁と支柱はコンクリート製。木製の天井梁を上にのせてある。支柱の足もとにセメントのかけらがそれぞれ置かれている。

隣接してハーリーに使う舟小屋がある。左後方にはフクギが植えられている。手前は広場(アサギマー)になっている。

広場には頂上に藁の縄がついたコンクリート製の支柱が1本立っている。

備考

大宜味村文化財カルテ

番号 田港06

名称 田港の神アサギ

ふりがな たみなとのかみあさぎ

類型(タイプ)

御嶽・拝所

時代区分

解説文

田港の神アサギで、ウンガミではウフェ屋とノロ殿内で祈願した神人たちが集合し、祈願を行う。

所在地

字田港

写真1



面積/規模・形態/員数

12脚を持つ神アサギ。柱はコンクリートブロック、セメント瓦、小屋組は木造。

写真2



利活用状況

伝承・言い伝え

主な参考文献

- ・『大宜味村史 通史編』(1979年/大宜味村史編集委員会)
- ・『塩屋・ウンガミー沖縄県大宜味村塩屋ウンガミの記録』(1986年/平良孝七撮影 /塩屋ウンガミ刊行委員会)
- ・『塩屋誌』(2003年/塩屋区公民館)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)

観察・調査記録

田港集落の一番高台にある。小屋組の木造はかなり古く、痛みがみられる。屋根にはガジュマルが自生し、柱にはツタがはっており、荘厳な雰囲気だが損壊の不安はある。隅頭4箇所のうち2箇所がとれている。神アサギのそばには古い石積みが一部残っている。周囲には桜の木が植えられ、シーカワガサ一畠もある。

備考

大宜味村文化財カルテ

番号 津波04
名称 津波・宮城のトウケーの板干瀬
ふりがな つは・みやぎのとうけーのいたびし

類型(タイプ) 時代区分
自然環境

解説文

津波小学校の西海岸にある板干瀬。南側の海岸から宮城島に向かって塩屋湾の南側開口部を閉じるような形で形成されたもので、その形状から昔の砂嘴が固結してできたものと推定される。

所在地

字津波

写真1



面積/規模・形態/員数

写真2

利活用状況

伝承・言い伝え

主な参考文献

・『大宜味村の自然』(1997年/大宜味村教育委員会)

観察・調査記録

干潮になると、津波小学校裏側から宮城島にむけて、板干瀬が確認できる。

備考

大宜味村文化財カルテ

番号 津波08

名称 津波の神アサギ

ふりがな つはのかみあさぎ

類型(タイプ)

御嶽・拝所

時代区分

解説文

津波の神アサギ。左が津波、右が平南。2つアサギがあるのは平南村の合併を表している。

所在地

字津波 農村公園の隣に所在

写真1



面積/規模・形態/員数

アサギ(コンクリート造・セメント瓦)、鳥居(コンクリート)、陶製の円形香炉2

写真2



利活用状況

伝承・言い伝え

主な参考文献

- ・『沖縄国頭の村落』(1982年/新星図書出版)
- ・『沖縄『歴史の道』を行く』(2001年/むぎ社)
- ・「大宜味村民話研究 遺跡編」(1999年/平成10年沖縄国際大学卒業論文)
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』(2003年/大宜味村商工会)

観察・調査記録

アサギは階段が五段あり、2つの入口がある。前後、横の壁が抜けたつくりになっていて、二つをつないでいる壁はある。アサギの右方は四隅に大きな石が置いてあり、中央手前に白い香炉あり。左方は中央手前に香炉のみ。二つとも灰が入っている。屋根には六個の陶器の鬼瓦あり。すぐ横に農村公園があり、鳥居のある入り口から入り、アサギと同じ敷地内にトウヌがある。アサギを建てたときの寄付者名碑もある。植生は太く大きなフクギが多く、アサギの後ろにはクロツグ。フクギの下にはサクラがあつた。

備考

「平成十年十二月吉日竣工 阿舍慶新築」とある。

■主要参考文献

- ・『大宜味村史』(通史編、資料編) 1979年 大宜味村役場
- ・『角川日本地名大辞典』1986年 角川書店
- ・『沖縄国頭の村落<上巻>』1982年 新星図書出版
- ・『根路銘誌』1985年 根路銘区 大宜味村根路銘区
- ・『田嘉里の歴史』1990年 安里有三
- ・『大兼久誌』1991年 大兼久区
- ・『喜如嘉誌』1996年 喜如嘉誌刊行会
- ・『大宜味村民話研究 遺跡編』1999年 1998年度沖縄国際大学卒業論文
- ・『沖縄「歴史の道」に行く』2001年 むぎ社
- ・『塩屋誌 第1集』2003年 塩屋誌編集委員会
- ・『大宜味村津波誌』2004年 大宜味村津波区
- ・『大宜味村饒波誌』2005年 大宜味村字饒波
- ・『大宜味村大保誌-大保川の流れとともに』2006年 大宜味村大保区字誌編纂委員会
- ・『大宜味村ふるさと発見ガイド』2003年 大宜味村商工会
- ・『なきじん研究』16号 2009年 今帰仁村歴史文化センター

大宜味村文化財基礎調査及び歴史文化基本方針策定事業報告書

平成22年3月

発行 大宜味村教育委員会
〒905-1305 沖縄県大宜味村字大兼久 157番地
TEL 0980-44-3006

編集 株式会社 国建